
魔法世界にこんにちわ

烏丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界にこんにちわ

【Nコード】

N2110M

【作者名】

烏丸

【あらすじ】

一人の男が死を迎えた。そして再び目覚めた幕間の世界にて、男は新たに世界の分岐を作る任を受ける。授かりし力で男は黄金騎士へと姿を変えて、ネギまの世界へと降り立った。

活動報告で各話のこぼれ話が書いてあります。暇な時にも目を通していただくと、ほんのり普通です

0： 転生（前書き）

この扉を開く者、全ての希望を捨てよ。

0： 転生

気がついた時、俺はすでにこの奇妙な場所にいた。

まるで舞台の上。真っ黒い闇の中に俺だけがスポットライトのような光で照らされている。

前に進んでもスポットライトは追いかけてくる。いや、そもそも本当に自分が前に進んでいるのかさえ疑わしい。

そうしているうちに、目の前にもう一つスポットライトが灯る。

そこにいたのはタキシードにシルクハットを被った一人の男。まるで司会、狂言回しみたいだと俺はなんとなくそう感じた。

「ようこそ幕間の世界へ」

目の前の男が俺に話しかけてくる。現状が理解できない俺は、どう返して良いか分からずにただただ無言。

「初めまして。もしくはお久しぶり。さて？ 貴方に相応しい挨拶はどちらでしたかな？」

男は人を食ったような笑みを浮かべながら、俺に尋ねてくる。

当然、俺にはこの男の言っている事は狂人の戯言にしか聞こえてこない。勿論、俺は過去にこのような男と面識を持った覚えなどは一切無い。全くの初対面である。

「まず一つ言っておくと、あなたはすでに死んでいます」

「死んだ？ 俺が？」

ここでようやく俺は口を開く。流石に今の『死』という言葉聞き流してしまう訳にはいなかった。

「そうです。しかしそれが、つい先ほどの出来事なのか、はたまた遠い過去の出来事なのか。それを覚えているモノは限りなくゼロです」

俺は本当に訳が分からなくなる。これは現実なのだろうか？ それとも俺の脳が作り出している、夢という名の幻想なのだろうか？

死んだ？ 俺が？

何時？ どこで？ どうして？

「……何故、俺はこんなところにいる？ ここはあの世なのか？」

俺は、目の前の男に質問せずにいられなかった。

「いえいえ、先ほど言ったようにここは幕間の世界。いくなれば準備と出番を待ったための世界」

「準備？」

「そうです。ここに貴方がいらしたという事は、あなたはどのような結末であったにしろ、一つの物語を終え、そしてまた次の物語を紡いで行かねばならないのです」

「次の物語だと？ 一体何をしに？ そもそも俺は……」

そこで俺ははつとする。

『俺は一体誰なんだ？』

思い出せない。俺は自分の事を何一つ覚えていない。

自分の名は？ 生まれた場所は？ 年齢は？ 両親は？ 友人は？

俺の顔は？

俺は自分の両の掌を見つめる。生まれたときからずっと見つめ続けてきたはずであろう掌は、酷く曖昧でおぼろげな印象の他人の掌のように、まるで霞んで見えた。

「ははははは、これは可笑しな事を仰るお方だ。貴方は、貴方だった者はもうこの世に存在しないんです。この幕間にたどり着いた瞬間から」

男の笑い声と共に俺に浴びせられた言葉に、俺は呆然とした。

ショックもある。しかし、呆然としている最大の理由は、この男から浴びせ掛けられた言葉を聞いて、俺自身が心のどこかでその事を納得してしまっている事だった。

そう、この男の言葉は最初から最期まで真実である。

俺はその事を知っている。

そして、俺が次に一体何をすべきなのかも。

「俺がここに来るのは、どうやら初めてではないらしいな」

「ご明察。そしてこのやり取りも、数え切れないくらい繰り返されたテンプレートでございます」

テンプレートね……。この男からしたら、まさに飽き飽きするよ
うな光景な訳だ。

「そして、これまたテンプレートな流れ出で説明させていただきま
すと。貴方が紡ぐ物語は、牽いては世界を救う事になる。貴方のす
べき事は、世界の分岐を遮る壁を打ち壊す事。世界の明日を覆う闇
を払う事。それが、貴方がこの幕間の世界から旅立つ唯一無二の理
由となります」

「そいつは大層なお役目だ」

「そうです。この世界は根源から今日に至るまで無限の分岐によつ
て成り立っています。その分岐の中では、あなた達が漫画だと思っ
ていた世界も現実のものとして存在しています。あなたにはその世
界の一つに行ってもらい、その世界を救っていただきます」

漫画の世界を救ってくるねえ……。漫画なんて大抵がハッピーエ
ンドで幸せに終わってくれるもんじゃないかね？

「それが終わらなくなってくれから困るのですよ。……いや、バッドエンドなら兎も角、物語の途中でいきなり話が終わって、そのまま物語自体が消えてしまう事になってしまふのです」

……人の独白にまで返事をしなくてもいい。が、それは本当に一大事ではないか。さっきまでのこの男の胡散臭い雰囲気のせいで分からなかったが。

「……それで？ 結局俺はどこの世界に行かなくちゃならないんだ？」

「はい、貴方の知っている言葉で言う『ネギま』の世界という奴です。貴方の知識にも多少はあるのではないのですか？」

……何故、自分に関する知識は皆無なのに、こんな漫画の世界の知識なんか覚えているんだ俺は。

まあ、確かに知ってはいるけれども、正直アニメの主題歌以外は印象が薄い。

「それはそうと、俺は具体的に何をどうすればいいんだ？」

「そうですね、とりあえず適当に歩き回って気に入らない奴をぶっ飛ばしてしまえばよろしいのではないですか？」

お前の説明が何よりも適当な上、それじゃあただのチンピラだろうが。

「だいたいそのようなニュアンスで間違いではないので。貴方以外

の方々も大体そのような感じで異世界を旅しておられますし」

この男、今サラッとももの凄く失礼なこと言わなかったか？ていうか、他の方々ってなんだ。

「まあまあそれは兎も角として、貴方にはこれから世界を旅するにあたって必要な能力を与えなければなりません。さて？ どのような力を欲しますか？」

「能力って……いきなりそんな事言われてもだな……」

男の言葉に俺は焦る。能力と言われてもそんなに急に出てくるものではない

「さあさあどうしますか？ 何も無いんだったらテンプレ通りに『不死・年齢操作・魔力無限・身体能力強化』みたいな面白みの無い俺強えwww的な能力にしちゃいますよ？」

「いやいやいや、ちょっと待て！ これからの俺の未来がかかっているんだからそんなにサラッと決めようとするな！！」

「はははは、冗談ですよ。そもそも、そのような出鱈目な能力のつけ方は出来ません」

……俺はこの男に遊ばれてるだけなのかもしれない。

「焦らずとも、貴方が使える能力は既に貴方自身が知っているはずですよ？ ほらほら、よく考えてみなさいな」

そう言われ、俺は頭の中を穿り返すように必死で思い出そうとす

る。

すると、頭の中に浮かんでくるのは無数の人の影。

まるでそれは一枚の絵のように並び、こちらを見ているように見えた。

その中心で一際輝く、黄金の鎧に狼の面をした騎士は特に印象深く思えた。そう、俺は知っている。

この、心の風景に浮かんでいるのは、かつて俺のいた世界で特撮のヒーローとして存在していた英雄達だ。

そして、どうやら俺の能力というのは……。

「……わかったぞ。俺の能力はどうか『英雄の力を纏う能力』らしいな」

「おやおや、どうやら思い出せたようですね」

男が、相変わらぬ胡散臭い笑みで言う。

俺の力。それは、俺の知っているかつて英雄と呼ばれた者の衣装・鎧を身に纏い、その能力の100%を引き出す能力。

その中で、特に力のウェイトを占めているのがく牙狼^{ガロ}と呼ばれる英雄の力だった。

牙狼^{ガロ}。それは、牙狼という作品の主人公であるく牙島^{さいしま} 鋼牙^{こうが}が鎧を身に纏った姿であり、森羅万象あらゆるものに存在する“陰我

”と呼ばれる心の闇に寄生する怪物・ホラーを狩る、魔戒騎士と呼ばれる戦士の頂点に立つ者に与えられる称号。

俺の能力は、どうやらこの牙狼という英雄の姿を基本として発現するらしい。他に心の風景に映っていたのは、かつて仮面ライダーと呼ばれた英雄達。恐らく、全種類のライダー達が揃っていたと思われる。

どうやら牙狼の姿から、更に二段変身して姿と能力を得るようだ。その過程を飛ばした場合は、能力の大半は使えなくなり姿だけを借りることになる制限がついている。

俺は、まるで芋蔓式に次々に思い出ししていく。

「思い出せていただけて何よりです。それはそうと、一つだけ貴方の知識には無い事柄をば」

「なんだ？」

「ご存知の通り、貴方がこれから向かうネギまの世界にはホラーという化け物は存在いたしません。なので、牙狼の鎧に備わっているホラーを浄化する力の変わりに、魔法を弱めるような効果に変更してありますので」

「……それはまた随分とありがたい効果を」

「いえいえ、礼には及びませんよ。あと貴方の容姿も、牙狼の冴島鋼牙と同じものにしておきます。そのような具合でいいですね？ ああ、それと。老化については、非常に緩慢に進むようになっていきますので。もちろん不死ではないので死ぬ時は死にます。まあ、能

力的にもそんなことはあまりないと思いますが」

「……分かったという事にしておく。ところで今ふと思ったんだが、もしかして俺は変身できる分全ての世界を回って来たとかそんなんじゃない――」

「ではいつてらっしゃい！！よい旅を！！」

俺の言葉をぶった切るかのように男が大きな声でそう言つと、俺達を照らしていたスポットライトのような光が消え、俺を奇妙な浮遊感が襲う。

「それではあちらで頑張ってください。まあ、知識がないから手探りになるでしょうが」

最後に男のそんな言葉が聞こえてきた。さっきも言ったけど俺ネギまの世界なんてよく分からないぞ？

もしかして、ネギ君に会えないまま終わったりして。

そんなことを思っていると、体から浮遊感が消え、徐々に周りが変化し始める。

輪郭が少しずつ浮かび上がり、色も黒からだんだんとカラフルに色付けされていく。

そうして俺の目の前に完全に浮かび上がったその場所は、これまたテンプレの如くどこぞの森の中だった。

……何をすべきか分からないけども、とりあえず歩こう。

こうして、俺は異世界に降り立つ事になる。

1： 出合

というわけで、ネギまの世界に来てしまったらしいのだが、回りを見渡しても鬱蒼とした森が視界一杯に広がっているだけで、まるで実感がない。

どうしたものと首をかしげていると、ふと自分の服装に目が行った。

「おお、この服装は……」

真っ黒い丈夫そうな服に、真っ白いコート。このもの凄い目立つ服装は、＜牙狼＞の主人公の冴島 鋼牙の服装そのままじゃないか。ということとは……。

俺は自分の今の状態を確認する。

腰には一振りの剣。抜いてみると細身両刃の一見脆そうな剣だ。

「まあ、魔戒剣がないと鎧召喚できないしな」

この剣の名前は魔戒剣。ソウルメタルという魔戒騎士以外の人間にとっては超重量の特殊金属で出来ている剣だ。この剣で頭上に円を描き空間を切り裂く事で牙狼の鎧を召喚することが出来る。

一応、自分も魔戒騎士扱いなので剣も軽い。ていうか軽すぎる。まるで羽毛のようだ。

左手の中指には残念ながら何もついてはいなかった。まあ、ホラ
ーの存在しない世界だし必要もなかったか。

「それじゃあ、試しにやってみるとするか」

剣を頭上に掲げ、空間を切り裂くイメージで鋭く、大きな円を描く。

そのまま剣を勢いよく振り下ろすと同時に、切り裂かれた空間から眩い光があふれ出す。

そして瞬きするかどうかの刹那、自分の体は黄金の鎧と、狼を模ったようなフルフェイスのマスクに覆われる。

違和感は全く無いどころか、重さまで感じない。この鎧もまた、剣と同じソウルメタルで作られている。ソウルメタルは持ち主の心の在りようによって重量を変える物質。実感はあるが、とりあえず俺の心は良い感じらしいという事にしておこう。

「おお……牙狼だ。本物の黄金騎士……！」

やばい、これは非常にテンションが上がる。変身ヒーローに憧れない男の子はこの世に存在しないというのが身をもって証明された瞬間だ。

なんてテンションが上がって漲ってきてたら、何か体が燃えてる事に気がつく。

もしかして、これはあの烈火炎装という奴ではないだろうか？

ちなみに烈火炎装とは、魔導火という特殊な炎を身に纏う事でパワーアップする技だ。本当はちゃんとした手順が必要なのだが、まあ原作でも途中から手順を無視していたし大丈夫だろう。ていうかテンション上げたら出るとか……。

?
SIDE

『完全な世界』に関する情報収集を終えて、俺達『紅き翼』のパイレーターがアジトに戻っている最中の事だった。

休憩していた草原の近くにある、何の変哲もない森の中から一瞬だけ訳の分からない妙な気配がしやがった。今ここにいる俺以外のメンバーの（と言ってもアルとラカンの二人だけだが）、アルはともかく筋肉馬鹿のラカンでさえ何かを感じ取ったところから、魔力とは違う別の何かかもしれない。

「ちよつくら様子見てくるわ」

二人も俺のその一言だけで理解したらしく、警戒した様子コクリとで頷く。

気配のした方向へ慎重に進んでいくと、少し開けた場所で一人の男が立っていた。

白いコートを着た茶色い髪 of 男だ。年は俺よりも上、大体20いつてるかどうかくらいか。そして腰には剣。

魔力は……どういうことだ？ 少ないどころか微塵も感じやしない。少なくともこっちの魔法世界じゃ絶対にありえねえだろ？

なんなんだあいつは。一体ここで何をしてるんだ？

そんな俺の疑問は、次の瞬間にあっけなく吹き飛ぶ事になる。

「っ！？」

（剣を抜いた？ もしかして俺に気付いたのか！？）

だが男は俺のほうを向く事無く、そのまま天に向かって剣を掲げると空中に円を描く。

そこから先は、全く俺の想像のつかない領域だった。

なんと男が剣で円を描いた空間が切り裂かれ、そこから眩いばかりの光が溢れてくる。

不覚にも一瞬目をそらしてしまう。クソ、戦場だったら死んでるぜ。

そして視線を戻した俺は言葉を失う

「……………」

俺はハッキリ言っであまり頭は良くない。ていうか馬鹿だ。気の利いた言葉の一つも口にするのが難しい。

そんな俺でも言えることがある。

俺の視線の先にいる、黄金の鎧を着た狼みたいな奴。

剣を構え立っている黄金の騎士は、神々しいまでに美しかった。

金ピカだからとかそんなんじゃないぞ。纏ってる雰囲気自体が違う気がする。

俺が言葉を失ってその姿に見惚れていると、変化が訪れた。

「も、燃え出した!？」

黄金の騎士の体が急に緑色の炎に包まれ始めやがった。緑色の炎を出す魔法なんて聞いた事ねえぞ!？ ていうかあいつから魔力なんて全く感じない。一体どうなってやがる!？

すると、あいつはゆっくりと俺の方へ体ごと向き直ると、ゆっくり

りと剣を構える

ゾワリ

「！？気付かれた……！？」

俺の勘が、生存本能が、なにかがヤバイと俺に告げる。

だが妙な感じだった。剣を向けてはいるが、殺気のほうは少しも感じられない。むしろ黄金の騎士が剣を構えてこちらを向いてる事を抜かせば、さわやかな風さえ感じられる。おそらく目を閉じていたら気付かないだろう。

そして俺は信じられないものを目にする

あいつが空気を斬る音を纏わせて、剣を一振り二振り。普通ならただの素振りで終わる動作だ。

「なんだ……ありやあ……？」

黄金の騎士が剣を振った後。その軌跡をなぞるかのように、緑色の炎を纏った『何か』が空中に2つ停止していた。あれはまるで……。

「斬撃が空中に停止してるとっていいのかよ……」

斬撃を飛ばすだけならたいして驚かない。うちの詠春だって出来るし、あいつは雷光剣なんておよそ剣術を超えた技だって持ってる。

だがこれはなんだ？　これが魔法無しで人間ができる事か？

俺は久しぶりに背中に冷や汗が流れるのを感じた。

自分の理解の範疇外の存在って奴にだ。ハハッ「千の呪文の男」
が聞いてあきれるな。

「先手打たれた上に、相手の手の内もわかんねえ。おまけにこっちは俺一人。いつもの俺だったら、そんなこと関係なく、迷わずぶっ飛ばすだけなんけどよ……」

今回はっかは勝てるイメージ湧かないぜ。そう口に出さなかったのは、俺の数少ないプライドからだっただんたろうな。

俺は両手を上げて黄金の騎士の前に歩いていく事にした。

ナギ SIDE OUT

烈火炎装を試した後で、他にも色々出来ないかと模索していた結

果、魔戒騎士は確か斬撃を空中に滞空させて飛ばすような事も出来るはずだったという事を思い出す。

そして、見よう見まねどころか完全にオリジナルでやってみたら出来てしまった。

そしたら、なんか赤い髪の少年が両手挙げて草むらの影から出てきたではないか。……何故？

そうして俺は今の状況にハツとする。あの少年が斬撃の斜線軸上に見事に重なっており、このままでは事情を知らないあの少年は、魔導火を纏った斬撃で見るも無残な姿に成り果ててしまう。

魔導火は、常人ならば触れただけで灰すら残さず燃やし尽くしてしまう恐ろしい物だ。

すると案の定斬撃が動き出し少年目掛け飛んでいこうと動き始める。

「チィッ！」

斬撃の消し方も分からない俺は、思い切り踏み込むと少年に向かって跳躍する。

空中で手を伸ばしたところで、俺は再びハツとした。そういえばソウルメタル製の鎧は常人ならば触れただけで皮膚を破くとか何か。

どんだけ常人に優しくないんだ魔戒騎士。

コンマ3秒の高速思考でその事に気がついた俺は、飛びながら鎧を送還すると少年を掴んで斬撃を全力で回避する。

少年の方は何が起こったかわからずポカンとしている。が、斬撃が通った後を見て顔を引きつらせていた。

斬撃によってなぎ倒された木々達が、緑色の炎に包まれて消えていく光景を見れば誰だってそうなるだろう。

というか、斬撃は一体どこまで飛んで行くのだろう。斬撃の後に綺麗な一本道が出来上がっていく。環境保護団体に訴えられたらまさしく一発KOだ。

……まあ、そんなことはともかくとしてだ。

「平気か少年」

罪も無い少年を危うく消滅させそうになってしまったという、罪悪感一杯の俺はかろうじて少年に語りかける。

ナギSIDE

「平気か少年」

何が起こったかわからなかった俺に、いつの間にか鎧を脱いだ中身が話しかけてくる。

なんて身体能力だと思った。スピードだけならラカン奴なんて相手にならないくらい速い。それと合わせてさっきの斬撃。軽い感じで繰り出していたアレだって同じ奴を詠春が出したって、あんな事にはならないだろう。だってあれだぞ？ 森の一部が斬撃だけで消滅したぞ。

「あ、ああ」

クソ、情けないぜ。これでも「まほら武道会」の優勝経験者だぜ？ その俺がこのザマとはよ。本当にこの男は一体何なんだ？……って、聞けばいいだけの話だろうが！！ ああ、もうなんか調子狂ってるぞ俺！！

「ところであんたは一体何者だ？ 見たところ魔法使いには見えな
いぜ」

何とか取り繕って相手に尋ねる。

「……名前、か」

そう言う但至少だけ悩むそぶりを見せると、俺をみてこう言った

「俺の名前は冴島 鋼牙。魔戒騎士だ」

「魔戒騎士？」

……全く聞いた事がないぞ

「俺しかいないけどな。ところでお前は？」

ああ、やっぱり知らないんだな。さつきから少年ってしか言っていないし。

よし！ 気分変えてここは思いっきり言っておくかー！

「聞いて驚くんじゃねえぞ？ 俺の名前はナギ・スプリングフィールド！ 紅き翼の千の呪文の男とは俺のことだー！」

そう言っ て俺は鋼牙に向けてサムズアップする。

「おお、お前があのだギか」

俺の名前を知ってもさほど驚く様子も無い鋼牙。……いや、なんつーか。肩透かしを食らったようなむなしき気分だな。

「……何だ知ってんのか」

「まあ、薄らぼんやりとはな。しかし、思ったよりも若くて少し驚いた」

まあ、「ハア？ 何言ってるんだこのガキは？」とか言われないだけマシか……

「おうよ、若き天才って奴だぜ。……って、それはどうだっていいんだよ。それよりあんたはこんなとこで何やってんだよ？」

「ああ、実はな……」

そうして俺達は色々と情報を交換した。鋼牙からは奴自身の情報を。俺からはこの世界の事と世界情勢を。

そして鋼牙が話した事を要約してみるとこういうことらしい。こいつは何と旧世界の人間で、偶然ゲートを潜っちまってここに飛ばされてきたらしい。

さっきの黄金の鎧は鋼牙の家に代々伝わるもので、鋼牙も魔戒騎士とかいうやつの最高位の实力があるらしい。魔力が全く感じられないのも、旧世界の人間だからといえば分かる気もする。

「それで、これから一体どうするんだ？」

「さあな。なにせ右も左も分からない状態だ。とりあえず南の暖かいところを目指して歩くかな」

……少し話していて分かった。こいつの脳内には危機感つてものが無い。

ここで戦争が行われているって事は教えたはずなんだが、「へー」で終わってしまった。おそらく、巻き込まれたって全く問題ないだけの實力を持ち合わせているからこその余裕なんだろう。

ここで俺の頭に天啓が降りた。

そうだよ、なんでこれをすぐ思いつかなかったんだ？

「なあ鋼牙」

「何だ？」

「行く当てが無いんなら……ウチにこないか？」

俺は心の中で確信していた。こいつが仲間になれば、戦争の終結まで一歩近づける

そしてそれ以上に俺は思っていた。

俺はこいつの……黄金騎士の武が見てみたい、と。

これが俺達『紅い翼』と『黄金騎士』の出会いだった。

ナギ SIDE OUT

2： 武力

異世界に来て最初に出会った人間が原作の登場人物だった事に関しては、自分の幸運に大いに感謝したい。

でも、危うく殺しそうになって、原作を俺の手で終了させてしまふという、恐ろしい自体を引き起こすところだった。

現在、俺は歩きながらナギと色々と情報を交換している。その話をまとめると、この場所は魔法世界らしく、ナギたちはN G O団体『悠久の風』の中の『紅き翼』というパーティーらしい。あと、よく分からないが、今魔法世界は連合と帝国という所が戦争してるらしい。それでナギ達は連合側で戦ってたらしいが、なんやかんやあって反逆者扱いになって追われる身らしい。正直そういう話は全く持って分からない。

俺の方からはほとんど話せる事は無い。普通に考えて、よく分からないけれど世界を救いに来ました、なんて狂人の戯言以外の何者でもない。俺だったら警察に突き出す。なので、日本に住んでたんだが、気が付いたらあそこにいた。という事だけを説明した。本当じゃないけど嘘でもない。そうしたら、何故か分からないが勝手に納得してくれた。旧世界がどうかいってるが、どうやらこちらではそう呼ぶらしい。

それと、なんかこっちに来てナギと話してる時だけ俺の口調がおかしい。一人だけの時はいつもどおりだったのに、ナギと話す時だけ、なんか凄く無愛想。っていうか、もしかして本家のほうの冴島鋼牙と同じくってないか？ 性格は違うけど。

なんて考えていると、いつの間にか森を抜けて草原のような場所に出る。が、なぜかナギに後ろの木に隠れてると言われる。何でも二人を驚かせたいらしい。

二人というのは『紅き翼』のメンバーで、ナギ曰く筋肉の塊のような大男のジャック・ラカンと、優男風の魔法使いのアルことアルビレオ・イマの二人。本当はもう4人ほどいるそうなのだが、彼らはアジトで待機してるらしい。

俺は原作を祭りの中盤までしか読んだ事がない上に読み込んでないので、ナギ以外の人間は殆ど分らないと思う。

原作のキャラクターに絡んでいけば、この物語の主だった場面に関わる事が出来る。そうすれば、いずれこの世界を滅ぼすであろう存在とも出会える。……少なくとも、それが一番確率が高いだろう。

紅き翼 SIDE

ナギが森に入ってから数十分。アルとラカンは切り株に腰をかけながら休憩を取っていた。無論警戒は解かずに、それぞれの得物を手にしている。

「しかし何だったんでしょ、先ほどの気配は」

「さあな。まあ、別に平気なんじゃねえか？ 確におかしな気配だったけどよ、殺気だとかは感じなかったぜ」

アルの問いかけにラカンが返す。

「そうですね。仮に敵だとしても、ナギが何とかするでしょう」

「あのバグキャラにどうにかできねえ奴がいたら見てみたいもんだぜ」

ラカンはそう言うのと豪快な笑い声を上げる。それにつられてアルも「それもそうですね」と言いながらフフフと笑う。

しかしその笑い声も、木が倒れるような轟音によって止まる。

二人は急いで立ち上がると、ナギの歩いていった方向を向く。

「お、やっぱりおっ始めやがったぜ、ナギの野郎」

「いえ、それにしても被害が地味じゃないですか？ ナギが戦っているならもつと壊滅的な被害が出るはず、というかあの人はそうならない魔法なんて覚えてませんから」

「……てことは、まさか」

「楽観的なラカンだが、流石に最悪の事態を想像しないわけにはいかなかった。」

「平気だとは思いますが0ではありません。我々も急いでナギのところにいきましょう」

「だな。ナギの野郎をぶちのめした奴となると、それ以上のチート野郎って事だからな」

そう言って走り出そうとする二人に、森の中から声が掛かる。

「んな心配いらねえよ」

ラカンとアルは驚いて思わず飛びのく。そして安堵の表情を浮かべる。

「俺がそんな簡単にぶちのめされてたまるかよ。……危なかったけどよ」

森から出てきたナギの声は、語尾の方が少々聞き取れなかったものの怪我もなく、異常がないことを物語っていた。

「それは良かったですね。ではさっきの木が倒れるような音は？それに妙な気配の原因は？」

「せかすなよアル。その説明も含めて、とんでもない土産を持ってきてやったぜ」

「なんだよ、巨大な金塊でも落っこちてきたってのか？」

金にがめついラカンが冗談でそう茶化す。それを聞いたナギの顔に不敵な笑みが浮かぶ。

「安心しろよ筋肉ダルマ。テメエが金なんかよりもっと喜ぶもんが土産だぜ。……おい鋼牙、出て来てくれ」

そのナギの言葉と同時に、ナギの後ろの木の影から一人の青年が姿を表す。

その青年を見た瞬間、まずアルの目に驚愕の二文字が浮かぶ。

「……ナギ、その方は何者ですか？ 魔力が全く感じられないのすが」

「なんだと！？ 全く無いだとおっ！？」

続いてラカンが驚きの声を上げる。

「ああ、どうやら旧世界から事故でこっちに迷い込んだらしいぜ。俺も魔力が無いのには驚いたが、旧世界から来たんならそういうのもいるんじゃないか？」

そのナギの言葉を聞いたアルは頭痛を覚えずにはいられなかった。

「……ナギ、魔法世界・旧世界に関わらず魔力がゼロの状態で動き回れる人間は存在しませんよ。あなただって、魔力が空になったら気絶位はするでしょう？」

「……怪しいなそいつ、まさか『完全なる世界』の関係者じゃねえだろうな？」

筋肉ダルマのラカンでさえ、魔力も無く動き回る人間は怪しく見

えるらしい。

「……ナギ。完全なる世界とは一体なんだ？」

「シツ！ 後で教えてやるから少し黙ってる！」

ナギと鋼牙の二人が小声で何か言ってるが、アルとラカンには良く聞こえない。

「とにかく！！ こいつは悪モンなんかじゃねえ！！ 俺が保障してやる！！」

そうナギは胸を張り大声で宣言する。

「……それにこいつは滅茶苦茶強えぞ？ 少なくとも筋肉ダルマよりは強いんじゃないか？」

ナギは不敵にラカンの方を見る。

その言葉を聞いたラカンは一瞬だけ不機嫌そうな顔をするが、ナギの意図を読み取ったのかこちらも顔に不敵な笑みを浮かべる。

「なるほどな。これがお前の言う、金以上の土産か。確かに金なんかより何倍も嬉しいぜ」

「だろ？」

そんな二人を見て嘆息するアル。バグキヤラのナギがこうも強い強いと言うのだから、下手したらその男もそれ以上のバグキヤラなのかもしれない。そう思うといつも飄々としている彼でも嘆息せず

にはいらなかった。

アルはチラリとナギの後ろの男に目をやる。

黒い服に真つ白なコートと言う目立つ格好。もしもそんなに強いのだったら噂に一つも聞きそうなものだが。

……確かに、彼の鋭い目付きや雰囲気を見る限り只者ではないと思うが、正直バグキャラ認定するには少々物足りない気がした。

アルがそんなことを考えているうちに、暗に戦う事を要求されていると気がついた鋼牙と呼ばれた男が、前に出てきてラカンに向かい合い対峙する。

「まず名乗っておこう。俺の名前は冴島 鋼牙。旧世界から来てナギに拾われた男だ」

「こりゃ丁寧にどーも。俺の名前はジャック・ラカン。『紅き翼』の千の刃たあ俺のことよ！」

「なるほど、覚えておこう。これから共に戦う友人になるか……それとも、最後に聞く名前かは分かんが、な」

そう言い終えると、鋼牙は剣を天高く掲げる。ナギ以外の二人は、これから鋼牙が何をしようとしているのか分からない。

対峙者のラカンは、一瞬だけ判断が遅れたものの、これから何かするであろう目の前の男の動きを潰そうと、拳を握り締めて鋼牙に突っ込む。

だが、そのほんの一瞬だけの判断の遅れが明暗を分けた。

鋼牙が強い光に包まれたかと思うと、すでにそこに姿は無く、ラカンの拳は風を切る音を残して虚しく空を切る。

そして、かなり離れた背後から何かが着地するような音。

その音に一瞬で反応して振り向いたラカンは、ほんの僅かその姿に目を奪われる。

「へえ、変身できる魔法が何かかい！ 強そうで格好いいじゃねえかあつ！！」

自分の数十メートル先に威風堂々と立つ、黄金の鎧を纏った狼面の騎士の姿に、心底楽しそうにラカンは叫ぶ。

仲間の二人もそれぞれの反応を見せていた。ナギは本格的に鋼牙の実力を見れるという事で、こちらも心底楽しそうな表情を浮かべ、できれば自分も混ざって一緒に戦りたいという感情を、ラカンとのタイマンという事で必死に抑えていた。

アルの方は相変わらず驚愕と緊張の表情を浮かべている。相変わらず魔力は微塵も感じられない。しかし、武人ではなく魔法使いのアルにでも分かるくらいの闘気は、彼の額に冷や汗を滲ませるには十分なものだった。

「それは嬉しい言葉だ。それじゃあ、特別に別の姿も見せてやろう」

その鋼牙の言葉の意味を理解する前に、鋼牙は動き始める。自分の腰に手を当てたかと思うと、鎧の上から更にベルトのようなもの

が現れ装着されたのだ。

そして両腕を右水平に構えると、ゆっくりと左へ持っていく。ラカンこの隙だらけの相手に対して動く事が出来ない。ただ、ここで動くのだけはしてはいけないことだと、魂が叫んでいた。

「変身……V3アツ!!」

目の前の鋼牙がそう叫ぶと、その姿が一瞬にしてまた変わった。

今度の姿は赤い仮面と緑の体をした、まるでトンボをイメージさせるような格好だった。

「へえ、どうやら色んな姿になれるみてえだな。その姿も渋くて嫌いじゃないぜ!」

そう言うや否や、ラカンは再び鋼牙に突っ込んでいく。

「それは結構。趣味が合いそうで何よりだ」

鋼牙はそう軽く言いながら、ラカンから繰り出される一撃必殺の拳と蹴りを時には流し、時には受けつつも難無く捌いている。そして相手の攻撃の合間を縫って、的確にラカンの体に攻撃を入れていく。

見た目に派手さは全く無い。しかし見るものが見れば、この戦いがそれぞれの武の極みに達したものの同士の戦いだという事が分かる。小細工の一切無い純粹な武のぶつかり合い。それはまるで予定されていたかのように行われる流れるような攻防。見ているナギとアル、そして闘っているラカン自身も一つの考えに至っていた。

この戦いはラカンが負けることを前提にした演舞のようだ、と。

闘ってるラカンは不思議な気持ちだった。普通だったら自分の攻撃がことごとく相手によって捌かれ、相手の攻撃は的確に自分の体にダメージを蓄積させているこの状況。普通だったらそう短くない己の敗北と言う未来に焦りと絶望を覚えるものだろう。

だがラカンの心に満ちるのは、不思議な高揚感と満足感。ラカンはこの戦いが、今までのどんな戦いよりも楽しくて仕方が無かった。帝国の剣闘士の頂点を極めた時も、このような気持ちを味わった事はついぞ無かった。

だからこそ、思いがけずに目の前に沸いて出たこの男の存在に、ラカンは今まで祈ったことも無い神に感謝した。

そして、永遠と思われていた攻防もやがて終わりを迎える。ラカンがあえて鋼牙に吹き飛ばされるような形で無理やりその距離を開けたからだ。

「冴島 鋼牙、あんたは本当に強え。……悔しいが、このまま殴り合ってもお前さんにゃ勝てそうに無い!!」

ラカンは生まれて初めて、それも森を揺らすような大きな声で己の負けを口にする。

「だが最後に!! 俺の取っておきを受けちゃくれねえか!! 武人なんて綺麗な言葉を使うつもりはねえ!! 一人の男として、あなたに受けてもらいてえ!!」

「アデアット！」とラカンが叫ぶと、彼の手に一振りの剣が現れる。

それはアーティファクトと呼ばれる専用の魔具。ラカンの持つアーティファクトは『千の顔を持つ英雄』という如何なる武具にも姿を変える変幻自在・無敵無類の至高の宝具だ。

「心して受けよう。そして返礼として、俺も『この姿』での切り札を見せてやろう」

「ありがとよ!!」

そう叫ぶと、ラカン持つ剣が変化する。

それは剣と呼ぶにはあまりに巨大。天をも貫く一振りの巨剣。

ラカンはその巨大な剣を持ち上げると、全身に残った力の力で全て漲らせる。闘気が満ち、空気が震える。常人ではこの空気だけで卒倒してしまうくらいの凄まじい闘気だ。

仲間のナギとアルでさえ、このように全力全開のラカンは数えるほどしか見たことが無い。それだけ、あの冴島 鋼牙という男が強いという事だった。

「ナギ」

「何だアル」

「世界は広いものなんですネ」

「……俺もあいつと会ったときに思い知らされたよ」

二人は、ラカンの闘気を受けてなお余裕すら感じられる鋼牙にそう呟かざるを得なかった。仮面を被って表情は分からないが、恐らくその顔は不敵に笑っている事だろう。

そして、張り詰めていた空気が。

爆ぜた。

「行くぜ！！ ひiiiiiiiiっさっうっ！！ざああんかん！！
けええええええんっ！！」

それは光速。

音すら置き去りにする速度。

そして迫るは力。

ただ純粋な、そして何人も防ぐ事のかなわぬ、圧倒的な力。

速く強い。

ただそれだけの、そしてそれ以外は必要としない武の極地。

これこそラカンが唯一必殺技と呼ぶ最大の業『斬艦剣』だった。

今までの中で最大最強。この最高に高まり研ぎ澄まされた精神状態だからこそ繰り出せる、己の人生の中で一番の一撃。

その最高の出来の一撃に、ナギ・アルは目を見張り、ラカンの勝利のビジョンが目に浮かんだ。いくら鋼牙でもあの一撃はどうにも出来ない。二人はそう確信する。

そして、永遠とも感じられる一瞬。

ラカンの斬艦剣が鋼牙の緑色の体に打ち込まれる刹那。

ラカンは意識を失う事になる。

「逆……ダブルタイフーン!!」

ラカンはなにが起きたのかすら知覚できなかったが、戦いを見守っていたナギとアルは全てを見ていた。

『逆ダブルタイフーン』 そう鋼牙が叫んだ瞬間、彼のベルトの二つの風車のような物から、とてつもないエネルギーの渦がラカン目掛けて放出されたのだ。

そのエネルギーの渦はラカンを吹き飛ばし、彼のアーティファクトを消滅させると、遙か彼方にそびえる山の、およそ半分を跡形も無く吹き飛ばしてしまった。

ラカンが完全に巻き込まれなかったのは、運が良かったのか鋼牙の采配なのか。アーティファクトが盾なったおかげで気絶だけだったようだ。

気を失ってるラカンに慌てて駆け寄るナギとアル。

「……良かった、気を失ってるだけ……じゃありませんね。骨もいくつか逝ってますねこれは」

「馬鹿、あんなの喰らって骨だけですんでるんだろっが。運が良いんだが筋肉馬鹿なんだが」

「おそらく、それにプラス彼の手心のおかげでしょうね」

そう言ってアルはこちらに歩いてくる鋼牙を見る。姿はすでに変身前の白いコート姿に戻っている。

「それは違うな。あの技は俺の全エネルギーを放出するものだ。手加減がどうこうできるものじゃない」

倒れているラカンを見ながらそう言い放つ鋼牙。

「それに、もしあれが避けられていたら、俺は間違いなくこいつの一撃で再起不能だったろうな」

「んなこたないだろ。さっきの姿だったら死ぬまではいきそうにないと思うぜ？」

「それがそもいかない。あの技を使ったら最後、エネルギーを使い果たして3時間程変身不能になる」

その言葉を聞いて驚いたのはアル。

「な！？ そんなリスクのある技をわざわざ使ったのですか！？」

アルは鋼牙の言葉に驚きと呆れの混ざったような感情を覚える。会ったばかりで、鋼牙の事を完全には信用していない自分達に対してあまりに無防備、かつ最大の弱点とも取れる技を出した事にだ。

「俺はこのラカンという男の覚悟に答えたただけだ。勝負と殺し合いは違う」

「……その後で私にあなたが襲い掛かる可能性だってあるのですよ？」

「可能性の話だろう？ 現にお前はこうして俺と話をしている」

そう言って、鋼牙は小さく笑みを浮かべる。

それだけで十分だった。

アルは瞳を閉じると静かに笑う。

「……フフフ。そうですね。私もそんなことする気は無くなりまして」

アルビレオ・イマを納得させるには、その小さな笑みだけで十分だったのだ。

「な？ 言つたろ？ 悪モンなんかじゃねえって」

アルの肩をバシバシと叩きながら、ナギが嬉しそうに言う。

「確かにそうでした。……申し遅れましたが、私の名前はアルビレオ・イマ。『紅き翼』の魔法使いです。アルと呼んでください」

そう自己紹介して右手を差し出すアル。

「もう知っていると思うが、俺の名前は冴島 鋼牙。旧世界の人間で、事故でこっちに来てしまったらしい。……今日から世話になる」

アルの右手を握り返す鋼牙。

こうして正式に『紅き翼』に加わる事になった鋼牙。

その最初の仕事は、気絶したラカンを背負ってアジトにつれて帰ることだったのは言うまでも無い。

紅き翼 SIDE OUT

3： 偽憶

ラカンという名のバグキャラと手合わせをする事になり、初めての戦闘に少々腰が引ける……、かと思いきやそんな事は一切無かった。それどころか、戦いが始まる時のあのピリピリとした緊張感漂う空気は、逆に俺の肌によく馴染むものだった。これが冴島 鋼牙になったということなのだろうか。

そして戦いの後アルと自己紹介し合い、ようやく『紅き翼』に入ってもらえることになった。

そして、気を失ってるラカンを俺がおぶっていく事になったのだが、これが死ぬほど重い。見た目通りと言えばそれまでだが、こいつの場合それ以上に筋肉の密度が高すぎる性も間違いなくあると思う。

そうこうして、俺は『紅き翼』のアジトに着いて、他のメンバーに顔合わせする事になるんだが……。

紅き翼 SIDE

『完全なる世界』の情報を探しに行つてたネギ・ラカン・アルの三人が、新しいメンバーの鋼牙を連れてアジトに戻ってきた時の反応はそれぞれだった。

しかし、ナギとラカンはともかくアルも太鼓判を押すほどの人物なので、反対する人間はいない。逆にその経歴を聞いてから興味しか沸いて来ない。

特に同じ旧世界の出身という事で青山 詠春が、魔力を持っていないという事で呪文詠唱が出来ない高畑・Ｔ・タカミチが並々ならぬ関心を寄せた。

ガトウとゼクトは、ナギ達と入れ替わりですぐに出て行つてしまい鋼牙とは軽くしか挨拶できなかった。

その後で、人数も少なくなったので交流もかねて一人づつ話をする事になった。残った二人も、幸い鋼牙には興味津々なので丁度良いだろうとの事。

その間他のメンバーは訓練がてら模擬戦をするらしい。どうやらラカンと鋼牙の戦いで火がついたらしい。

というわけで、最初は詠春からという事で、残ったタカミチはラカンとナギに悲鳴を上げながら引きずられて行つたのだった。

紅き翼SIDE OUT

詠春SIDE

「俺は青山 詠春。あんたと同じく旧世界の日本の出身だ」

俺はナギ達が連れてきた男に挨拶をする。どうやらとてつもない確率の偶然に引っかかってこっちの世界に来てしまったらしい。

黒い服に真っ白いコートという非常に目立つ格好をしているのが印象的だった。

「俺の名前は冴島 鋼牙。青山というと、もしかして神鳴流の青山か？」

「！？ その名を知っているのか！？」

俺は心底驚いた。神鳴流は魔を絶つ剣術。それゆえ表には出ず裏の世界で暗躍する流派であり、決して一般人が知っているようなものではなかったからだ。

「蛇の道は蛇、という奴だ。……魔戒騎士という言葉聞いたこと

はあるか？」

その言葉に、俺は再び驚愕する。

「……ああ、知っている」

俺の言葉に、鋼牙は意外そうにほんの少し驚きの表情を見せる。

「旧世界の裏では伝説のようなものだ。表の人間を魔から守るために、人としての生活を捨て、生まれてから死ぬまで魔と戦い続ける運命にある者達。その姿は様々あるがその頂点に立つのは金色の狼人はそれを……」

俺は視線を鋼牙に向ける。

長い沈黙。

そして鋼牙はゆつくりと口を開く

「……人それをく牙狼>と呼ぶ」

その言葉を聞いた俺は、自分の手が震えているのを自覚した。牙狼は闇に生きる者達にとつて、手も届かないところにいる英雄。闇の中で一際輝き続ける、黄金の存在。目の前にいる人物は、その牙狼かもしれない。いや、もしかしてただの語りで全く違うのかもしれない。それでも自分は目の前にいる人物の存在を否定できなかった。

「し、しかし魔戒騎士は何十年も前に滅びたと」

私は問いかけられずにはいらなかった。目の前にいるのが御伽
噺の英雄なのか、ただの名をかたる悪党なのか、その真偽が分かる
までは。

彼は、自分の問いにゆつくりと言葉を選ぶように答える。

「……俺が最後の一人だ」

俺は思わず息を呑む。そして彼はそのまま話を続ける。

「魔戒騎士とは魔法世界が旧世界に影響を及ぼす遥か昔から、世界
の裏で魔を祓ってきた者達の事。そして百年ほど前、魔法世界と旧
世界が明確なつながりを持ち、協会が設立されてからは、我々はそ
のまま闇に消えた。……何故だかわかるか？」

俺は何も言う事が出来なかった。迫害、淘汰、そんな嫌な言葉し
か、俺の頭の中には浮かんでこなかったからだ。

そんな俺の顔を見て、鋼牙は困ったような苦笑いを浮かべる。

「そんな不安そうな顔をするな。安心しろ。お前が思ってるような
後ろ暗い理由ではない」

鋼牙は俺の不安を拭い去るように、小さく笑みを浮かべると、
少しだけ遠くを見るような物憂げな表情になる。

「魔戒騎士は人々を守るために、人としての生活を捨てた者達。そ
うする以外に人々を守る生き方を知らなかったのだ。だが魔法世界
との交流で協会が出来、人々を守るための組織が出来上がった」

「……それでも魔戒騎士の力は必要とされていたはずです」

「人々はそうでも、我々は違ったのだ詠春」

そうして鋼牙は少しだけため息を吐く。

「だれが好き好んで、愛する子供達から人間の生活を奪うような道を歩ませられるだろうか。それが、新たに魔法使いとしての道が切り開かれたのならなおさらだ」

鋼牙の言葉に答えるものはいない。彼らの歩んできた道は『茨の道』すら生ぬるい『剣の道』。己の体を剣で貫きながらも、世界の裏で人々を魔から守ってきた存在。

そんな彼らが選んだ安息の道を誰が拒む事が出来ようか。

「魔戒騎士はそうして消えていったのだよ。世界の表からも裏からも…… たった一人を除いて」

「……それは」

「そう、俺はこの世で最後の魔戒騎士。正真正銘、人の道を捨てた闇に生きる人間だ」

自分には彼の言っている事がよく分からなかった。が、すぐにその言葉の意味に気がつく。

魔戒騎士が滅びてから、最低でも50年は経ったと言われている。それなのに目の前の彼はどうだろうか？

どう見ても20代そこそこにしきみえない。

「……俺は魔戒騎士の最高位く牙狼。後の人間がしっかり育てられないと、俺も隠居できないって事だ」

彼は少しだけ冗談めいたようにそう言うと、俺の肩を軽く叩く。その彼の一言で、緊張感が漂っていた空気が一気に綻びる。

「俺の事をそんなに真面目に考える必要は無い。今はただの『紅い翼』の一人に過ぎない」

彼のその一言で、俺の中に生まれていた緊張感というものが解れていった。

「……そうだな。これから一緒に戦っていく仲間だしな」

そうやって俺は、腰に差していた愛剣・夕風を引き抜く。鋼牙は一瞬だけ驚いた表情を浮かべる。

「ああ、心配するな。俺はナギやラカンと違って戦闘狂じゃない。ウチの流儀でな、剣を持ったのも同士で背中を任せ合う場合は、互いの剣を交換して誓いを交わすって言うのがあるんだ」

「ああ、そういう事なら喜んで……いや、ちょっとまって」

そう言うと鋼牙は少し何かを考えるそぶりを見せる。

「いや、無理にとは言わないぞ？ ……まあ、してくれた方が個人的には嬉しいが」

なんだかんだ言っても、俺は目の前の御伽噺の英雄と対して少々浮かれてしまっているらしい。

「ああ、いや。別にそういう事はないんだが……。まあいいか、それじゃあ剣を交換するか」

そういつて、腰から剣を抜く鋼牙。自分で言うのもなんだが、ものの凄く嬉しい。

俺は鋼牙に手順を教える。まずは剣を床に突き立てる。そうしたら相手の剣を抜き取り、適当に自分の言葉で相手に背中を預ける旨を伝える。以上が手順だ。

そうして剣を突き立てる俺達。

俺の夕凧を引き抜く鋼牙。流石に剣を持つ姿が様になってる。

そして今度は俺が鋼牙の剣を抜くば……。ん……？

「ふっ！？ ぬ、抜け……ない！？」

信じられない事に床に突き刺さった剣は、俺が思い切り引つ張ってもビクともしない。

鋼牙は予想してたかのように苦笑いを浮かべている。

「その剣は魔戒剣。魔戒騎士の修行を積んだ人間じゃなければ持つ事は出来ない。ちなみに俺はその剣を持てるまでに10年は掛かった」

その言葉を聞いて、俺は少しだけ涙目になりながら、目の前にいる人物が本物の魔戒騎士なんだという事に感動したのだった。

詠春SIDE OUT

4： 補完

詠春がタカミチを呼びに外に出て行ってからすぐ。

俺はほんの瞬きする間に、再びあの幕間の世界に立っていた。初めて来た時と全く同じように、俺は真っ暗い世界の中スポットライトに照らされている。

一つだけ違う事と言えば、俺の目の前にはすでにあの男が、俺と同じくスポットライトに照らされ目の前に立っていたという事ぐら이다。

「どうも冴島 鋼牙。ご機嫌いかがですか」

目の前の男はあいも変わらず、人の良さそうな笑みで俺に話しかけてくる。

「ああ、少なくとも最低じゃあないな。それで？ 一体急にどうした？ 俺としては、てっきりあれでもう永遠の別れだと思ってたんだが？ まさか顔を忘れる間も無く、また会う事になるとは思ってもしなかった」

「それは好意的な言葉として受け取っておきますよ」

男はそう言うとおげさにお辞儀をする。まるで舞台の上の役者のように大降りで大げさな動きだ。

「今回あなたを呼んだのは他でもありません。あなたの降り立った世界の『補完と修正』についてお知らせするためです」

「『補完と修正』？」

当然意味の分からない俺は男に聞き返す。

「そうです。あなた先ほど感じませんでしたか？『何でこの世界にも牙狼がいるんだ？』と。理由は簡単です。それは世界があなたの過去として、新たに作り上げたからに他なりません」

「新たに……作り上げた？」

「そうです。あなたはあの世界にとって異物です。世界は自分の中にあなたという異物が入り込んだ際に、二つ選択肢を出しました。一つは異物であるあなたを外にはじき出す事。そしてもう一つは、あなたを受け入れ、自らの中に完全に作り込んでしまうというもの。そして世界は後者を選んだのです」

「完全に作り込むだって？」

「そうです。あなたの存在を益と受け取り、この世界に溶け込ませてしまおうと言うわけです。そのために、あなたの能力である魔戒騎士という存在を基に、あなたにふさわしい過去を作り上げたんですよ。他に悪影響を与えないように、綿密かつ大胆にその存在をこの世界に捻じ込んだんですよ。おかしいとは思いませんか？
全くの出鱈目を話しているにしては、いやに自分の口がスラスラと回る事に」

そう言われてみればそうだった。いくらなんでも、あんなに長く痞えずスラスラと、出鱈目で言葉が出てくる訳が無い。俺は残念ながらそんな口が達者な人間ではない。

「それが補完です。そして次に来るのは修正。あなたを異世界からの来訪者ではなく、世界の一人として溶け込ませる最終工程です。じきに貴方と”牙島 鋼牙”の人格は完全に溶け合い新たな牙島 鋼牙として確立されます。そして世界も、貴方という異物を迎えるに当たって、一部だけ貴方の頭の中にある牙狼の世界と融合し、新たな世界へと変貌を遂げる事になるでしょう」

「……それは大丈夫なのか？ 原作の世界とはかけ離れた世界になってしまうが」

「問題は無いでしょう。物語自体が消えない限り、世界は無限に枝分かれして広がっていきます。貴方の介入もその無限の未来の中の一つなのだと考えれば、それはそれで面白いではないですか。それに牙狼の世界が融合するといってもほんの一部分だけです。ので、物語の大筋に変更は無いでしょう。まあ、そういう事です。そして修正が完全に終えた時、あなたは本当の意味で転生を完了します」

「修正された後の俺の立場は一体どうなるんだ？ 牙狼の存在が在りうる世界になったとしたならば……」

「それはあなた自身の目で、耳で。実際に確かめられた方が面白いかと。ここから先は漫画の世界ではない、貴方の進む未来の世界が待っているのですから」

男は、そう言うとき深く静かに一礼する。

やがてスポットライトは消え、俺は再びあの世界に飲み込まれる。

そして俺は覚悟する。

もう頭文字さえ思い出せない自分の名と、
もう面影すら思い出せない自分の顔を捨て。

一人の魔戒騎士『冴島 鋼牙』として

あの、魔法の世界を歩んでいく事を。

そして齒車は噛み合い

世界は色を帯び

音を立てて回り始める

タカミチSIDE

僕がナギさんとラカンさんが滅茶苦茶する中を逃げ回っていると、詠春さんが僕の名前を呼びながらこちらに向かってきた。多分、詠春さんと鋼牙さんの話が終わって僕を呼びに来たんだと思う。

呼びに来た詠春さんは何だか分からないけど、凄く興奮していた。いつもの無口で冷静な姿から見れば、とても珍しい。

しかも、なぜか分からないけどナギさんとラカンさんが戦っている中に刀を抜いて飛んで行ってしまった。

いつもだったら、バグキヤラ同士の戦いに巻き込まれたらかなわ

ない、とか何とか言って傍観しているのだから、これは珍しいどころの話じゃなかった。

鋼牙さんと話をして何かあったんでしょうか？

でも、そういう僕も鋼牙さんにはとても興味があります。

アルさんが最初に少しだけ説明してくれたんですが、鋼牙さんにはなぜか魔力が無いそうです。僕達の常識から言ったらそんなことはありえないです。僕だって呪文の詠唱は出来ないけど、魔力自体は無いわけじゃありません。詠春さんだって魔法を使わない剣士ですけど魔力を持っています。

……まあ、色々と考えてしまいますけども、実際に話してみれば分かりますよね。

そう思いながら、僕は鋼牙さんがいるアジトの一室をノックします。

中から短く返事が聞こえたので僕は少しだけ緊張しながら中に入ります。

中には椅子に座り窓の外を眺める鋼牙さんがいました。自分の第一印象は詠春さんとガトウさんを足したような人です。

その鋭い視線と纏う空気は、この人が戦いの中で生きてきたんだと思わせるには十分なものだったと思います。

僕は少し及び腰になってしまいましたが、意を決して鋼牙さんに話しかける事にしました。

「ど、どうも初めまして……じゃなかった、あいさつはさつきもしたし……えっと、改めて自己紹介をします！ 僕の名前は高幡・T・タカミチと言います！ この紅き翼でガトウさんの弟子をさせてもらっていきましょっ！」

……噛んじゃった。うう、第一印象が大事なのに。

「……そんなに気負うことはない。これからは仲間なのだからもっと気楽に接してくれた方がいい」

鋼牙さんは、少しだけ苦笑しながら僕にそう言ってくれた。その一言で、僕は少しだけ緊張がほぐれる。そして深呼吸をしてもう一度話しかける。

「あ、ありがとうございます。そうですね、仲間なんですよね僕達！ ……えっと、それなので、色々と聞きたい事とかあるんですけどもいいですか？」

僕が勇気を振り絞って聞いてみると、鋼牙さんはすんなりと「俺の知ってることならば」と許してくれた。

「えっと、それじゃあ……。こ、鋼牙さんは魔力が無くてもとても強いつてナギさん達が話していたんですけど、どうやったら強くなれますか！ ……僕も生まれつき呪文の詠唱が出来なくて、魔法使いとしては落ちこぼれにすらならないような人間で……。あ、でも今はガトウさんから居合い拳っていう体術を教えてもらってるので自分の身ぐらいは守れる程度にはなったんですよ……！」

「そうか、ならばそのまま続けて行くのが一番良い」

僕の問いかけに鋼牙さんはそう答える。

「……俺からも聞いて良いか？」

そして意外な事に鋼牙さんから僕に質問される。

「は、はい！ 何なりと！」

「何故お前はこの紅き翼に入ったんだ？ お前が強くてスカウトされたと言っなら分かるが、どうやらそれも違うみたいだな」

鋼牙さんは不思議そうに僕に尋ねる。……確かにそう思っても無理もないと思う。

「……どうやら聞いて良い質問ではなかったらしいな。すまない、忘れてくれ」

僕の一瞬の躊躇を読み取ったのか、鋼牙さんは謝りながら質問を撤回する。

「え？ あ、ち、違いますよ！ そんな大層なもんじゃないですよ！ えっとその、僕はいわゆる戦災孤児って言う奴で、ガトウさんに拾われてですね……。強くなりたいと思ったのは少しでも皆さんのお役に立ちたいって言うのもあってですねその」

僕は慌てて一気にまくし立てるように話す。確かに悲しいことに違いはないけど、戦争中の今、僕のような戦争孤児というのは珍しい存在じゃない。そんな中で、ガトウさんに拾われ紅き翼に入れたのは幸運以外の何者でもないとおもっ。

そして僕は、僕の話聞いた鋼牙さんの表情を見て、ほんの少し言葉を失う。彼は少しだけ唇をかみ締めているだけの無表情に近い顔で視線を床に落としている。だけど……だけど僕にでもわかったこの人の浮かべてる表情は、絵の具で言う様々な色が混ざり合った末の黒なのだ、と。悲しみや怒りが混ざり合った末の表情。上辺だけの悲しみでも安っぽい同情でもない。何も知らない子供の僕にも分かる。

多分この人は出会ってきたんだろう。何度も何度も、僕のような人達に。立ち会ったのだろう、悲劇の瞬間に。

僕は涙も流さず唇をかみ締めるだけのこの人が、泣いている様に見えた。

「……どの世界でも、変わらず世界は不条理なものだ」

鋼牙さんは静かにポツリとそう呟く。

その言葉にどれだけ意味が込められているか、今の僕に知る術はない。

この日僕が話した事と言ったらこの程度のもだった。

しかし、僕にとって鋼牙さんを知るにはこれで十分だったと思う。

この人は信用し尊敬するに足る人物だ。

たった数分の会話で僕はそう感じられた。

それからはガトウさんに修行に加えて、鋼牙さんも稽古をつけてくれるようになった。

鋼牙さん曰く「基本的な事はガトウが全て教えてやっているし、俺から教えてやれるような特殊な技術は無い」らしく、もっぱら模擬戦のみだけど、ナギさんやラカンさんと違ってちゃんと加減して、僕がどうにか戦えるレベルで手加減して戦ってくれる。

ガトウさんやゼクトさん、そして詠春さんが言うには、遥かに格下の相手に手加減して戦うのは相当に難しい事らしく、ガトウさんやゼクトさんにしても鋼牙さんほどに上手く立ち回るのは無理だと言っていた。

ナギさんやラカンさん、そして何と詠春さんも頻繁に鋼牙さんに模擬戦を挑んでいくが、ちゃんとそれぞれの実力ギリギリで戦っているらしい。……こういつては何だけど、詠春さんとはかく、バグキヤラの二人を相手にして出し惜しみをしているのは凄いを通り越して恐ろしくさえ感じます。

ゼクトさんと詠春さんは何か知っているらしく、鋼牙さんの実力に疑問を持ってないみたいです。

僕との模擬戦の時は、基本的に鋼牙さんは変身せず生身で相手をしてくれます。正直、それでも全く相手になりません。あ、さつきどうにか戦えるレベルって言ったのと矛盾しますね。多分、普通に模擬戦をしたらなにが起きたかも分からず気絶させられます。あく

まで練習として、全く歯が立たない程度に手加減されていると言うか何と言うか……。とりあえずそんな感じです。

魔法使いのように魔法を使ってくるわけも無いし、ラカンさんのようにもの武器を使ってくるわけでもないし、ガトウさんの居合い拳のように凄い技を使ってくるわけでもないです。

ただ僕の攻撃を避けて、その度僕に一撃を与えていく。その一撃も限りなく手加減されていますけど、模擬戦が終わるころには一歩も動けなくなっています。

でも何度も模擬戦を続けているうちに、僕も段々強くなってきました。……多分。

そしてなんと、居合い拳がようやく実践で使えるレベルまで上達したと、ガトウさんにお墨付きを貰った時にお祝いとして仮契約を許してくれたのです！

なんでも、お祝いをゼクトさんに相談したところアーティファクトがいいのではないかという事になったらしいです。どうやら、呪文詠唱できないぼくでも、従者としてアーティファクトを召喚するくらいは平気らしいです。

鋼牙さん自体に魔力はないので、魔力供給とかそういった面でのメリットはないので、純粹にアーティファクトを贈るだけらしいです。従者とかそういうのも考えなくて良いと言っていました。……個人的には別に従者でも良かったんですけど。

何はともあれ、仮契約です！！

男と女の場合はキスという方法がありますが、同姓の場合は互いの血の交換が仮契約の儀式になります。

少し緊張しましたが無事に儀式を終えた僕の手に、一枚のカードが現れました。

そしてそのカードを見た僕は心臓が飛び出るくらいに驚きました。

特性：希望

方位：中央

色調：銀

星辰性：天王星

様子を見ていた他のメンバーのみんなも、希少な銀色のカードが出たことに驚きの顔を浮かべています。

そして、ゼクトさんと詠春さん、そして鋼牙さんはカードに書かれた称号のほうをみて言葉を失っていました。正直、この三人のあんな顔は二度と見れないと思います。

カードに書かれていた称号は『騎士を継ぐもの』

ゼクトさんと詠春さんはただただ驚きの表情を浮かべ、鋼牙さん

は何だか複雑そうな顔をしています。

どうかしたのですか？ と聞くと、鋼牙さんはフ……と笑みを浮かべると、僕の頭を撫でて「なんでもない」と一言だけ言った。明らかになんでもなくない事は確かだったけど、僕は何も言わずに黙っている事にしました。

そして、いよいよアーティファクトとの対面です。どんな物が出てくるかとても楽しみです。

僕が緊張しながら「アデアット！」と叫ぶと、僕の手には二本一組の銀色の双剣が現れて……。

地面に突き刺さりました。

理由は簡単です。

重すぎて持てなかったからです。

他の皆さんも引つ張って見ますが、あの力自慢のラカンさんさえピクリともしませんでした。ラカンさんは軽くへこんでました。

しかし、鋼牙さんだけはおもむろに手を伸ばすと軽々とその双剣を引き抜いてしまったんです。持ち主の僕でさえ抜けなかったのに……。

すると鋼牙さんはこう教えてくれました。

この双剣はおそらく、昔自分と共に戦った魔戒騎士の持っていた剣と同じものだ。

そして、その剣で空中に円を描くと、鋼牙さんの体が、いつもの黄金の鎧とは違う、銀色の鎧に包まれたんです。

そこにいたみんなは目を見開きました。勿論僕もです。

そして鋼牙さんは教えてくれました。

このアーティファクトの名前は『銀狼剣』。そしてその能力は『銀牙騎士・絶狼の鎧を召喚する』事。

そして僕は鋼牙さんの口から、魔戒騎士が何なのかを初めて詳しい話を聞くことになった。

タカミチSIDE OUT

5： 少年

正直予想の範疇を超えた出来事が起きた。

タカミチとの対話から1ヶ月あまり。自分の精神もようやく統合され落ち着きを取り戻し、世界の作り上げた記憶ともようやく馴染んだ。まあ、実際のところ馴染んだといっても、思い出すときには本来の記憶のようにパツと思い出すのではなく、まるで辞書を引くかのように順序だてないと出てこないわけだが。

作り上げられた歴史によると、魔戒騎士は魔法協会の普及とともに、魔法使いやその従者として姿を消して行き、鎧や剣の元であるソウルメタルもその生成法を封印され、現存する剣と鎧も、俺の意思により魔法協会と呪術協会の共同作業により一箇所に集められ、大々的な儀式によって処分されたらしい。

なんと、今ここにいるゼクトも若い時にそこに立ち会っていたらしく、俺のことを知っていたらしい。

魔法かなにかで外見は子供だが、実際は相当の年齢のようだ。

紅き翼は現在、世界を裏で操る『完全なる世界』と言う組織を追っている最中で、とにかく情報を集めていた。

俺はというと、実は留守番しかしていない。

ゼクト曰く、紅き翼は現在指名手配中なうえ、元々有名人であったため全員の顔が割れており、動きがかなり制限されている。だが、俺ならば知る人間はほぼゼロに等しいので、ここぞと言う時の隠密活動に徹して、極力顔が割れる事は避けたいらしい。

なのでする事といえば、ナギやラカンの憂さ晴らしに詠春とタカミチの稽古くらいのものであった。

改めて戦ってみると、ナギやラカンがバグキャラと呼ばれるのがよく分かった。

ナギは恐ろしいほどの魔力の持ち主で、一撃一撃に馬鹿みたいな魔力を練りこんでいるので、まさに一撃必殺。それでいて戦闘スタイルは魔法戦士なので隙が無い。なので、こちらは詠唱される前に接近戦に持ち込む以外に勝機は薄い。殴り合いだったらこちらの方が遥かに上手だから、距離を取られない限りは何とかなった。

ラカンの方は逆に距離を取ったほうが楽だった。距離を取っても恐ろしい量の武器が飛んでくるが、あの馬鹿力で思い切り殴られるよりは遥かにマシだった。

変身もそれぞれによって使い分けている。

ナギと戦う場合は、昭和ライダーのようにシンプルで高い身体能力のタイプ。ラカンと戦う場合は、平成ライダーのように特殊な能力を持つるタイプ。

転生前の自分の趣味なのか、仮面ライダーくらいしか思いつかな

かったが、まあ十分だろう。

詠春とは、純粹に木刀での打ち合いだ。互いに死なない程度に本気でやりあうので、いい運動になる。しかし、やはりというかなんというか、生身の状態では剣術において詠春に対して少々分が悪かった。負けることは無いものの、ごり押しの力任せのような勝利だったので正直勝った気がしない。詠春が「勝ちば勝ちだ」と笑ってくれるのが救いか。

そして、タカミチ。

正直な話、自分は10歳そこそこであろうこの子が戦場に立つのに気が引けた。それは大人の勝手な感傷からだったのかもしれない。だがしかしこの子の親はすでにこの世にいない。

全ては戦争のためだ。

だから俺はこの子が、この子の両親と同じ死に方をしないように、そしてこの先の未来を生き抜いていくために、戦いの仕方を教えていく事にした。

この子には魔法を使うための素養が無い。

だから、この子の師であるガトウはひたすらに体術を学ばせていた。自分もそれが最良の道だと思う。すでにタカミチには最高の師がついているので、自分は余計な口出しはせずに、ただひたすらに動く木人形に徹した。

しかし、ただの木人形ではない。彼にとってギリギリで攻撃を入れることのできず、なおかつ油断すれば、軽いものではあるが、数

を受ければ確実に膝をつくような一撃を打ち込んでくる木人形だ。

そうして過ごして1ヶ月目の今日。最初に言ったとおり、予想外の出来事が起こった。

この日俺は、タカミチがガトウから居合い拳のマスターを認められた祝いとして、アーティファクトをプレゼントしようと仮契約を行った。

見物にと周りには情報収集に言っているアルとガトウ以外の面々。性格的にこの二人が一番偵察に向いており、いない事が多いのだ。

正直、仮契約とはキスしなければならぬのではないかと冷や冷やしたが、無事に血液の交換という方法で仮契約を成功させた。

そして現れたカードの色を見て、俺以外の全員が驚愕の表情を浮かべる。俺にはよく分からなかったが、どうやらタカミチのカードの銀色は、金・虹と並び希少なアーティファクトを表す色らしい。

だが俺は、そんな色よりも気になる文字があった。

どうやらゼクトと詠春も気がついたらしく、その顔を再び驚愕に染める。

それは称号の部分に書かれた彼の称号。

『騎士を継ぐもの』

ナギ・ラカン・タカミチは意味がよく分かっているようだった。

それも当然だろう。普通の人間がみたら騎士が一体何の事を指すのか分からない。だがしかし、契約の相手が俺という事で話は変わってくる。

それが示す可能性は唯一つだ。

「どうかしたのですか？」

俺達三人の反応にタカミチが不思議そうな顔をして尋ねてくる。俺は「なんでもないと」一言言っつて、タカミチの頭を軽く撫でる。

そうされるとタカミチはにこりと笑う。

そして嬉しさの隠せない表情で、大きな声でアデアットと叫ぶ。

その声と同時にタカミチの手に現れ、そしてすぐに地面に突き刺さる二振りの夫婦剣

それを見て俺は再び驚くことになった。

そこに刺さっていたのは、冴島 鋼牙の記憶の中で一緒に戦った友の持っていた剣だった。

タカミチは一生懸命になって引き抜こうとしているが一向に抜ける気配がしない。他の面々も同じように引き抜こうとするが、結果は一樣に同じだった。ラカンへこんでいた。

そして最後に俺が剣を掴むと、いとも容易く双剣は地面から引き抜かれる。

やはりこれは……。

俺はおもむろにその双剣で頭上に円を描く。

思ったとおり、眩い光と共に俺の体は銀色の鎧に覆われる。

これは銀牙騎士の鎧。

歴史上無くなったはずの魔戒騎士の鎧の一つ。

全員驚いた顔で俺のことを見ている。

こいつが出てきたって事は、説明する時が来たのかもしれない。

詠春に話した、魔戒騎士の話を今一度。

紅い翼 SIDE

タカミチのアーティファクトの説明を受けた紅い翼の面々は、皆等しく驚愕の表情を浮かべる。特に詠春とゼクトは、魔戒騎士の鎧の結末の詳細を知っているのではなさなかった。

その後、鋼牙の口から語られた魔戒騎士の歴史に、ナギ・ラカン・タカミチは目の前の人物が、自分達の想像していたよりも、遥かに壮絶な人生を送ってきたことを知る。

「てことは、お前今一体いくつなんだ？」

ナギが鋼牙に尋ねる。

「フ……年齢を聞くのはマナー違反だ」

鋼牙は冗談めいた口調で小さく笑みを浮かべながら言う。

「ばーか、それは綺麗なレディ限定で通用するマナーだろうが」

鋼牙の真意を汲み取ったラカンは、大声で笑いながら鋼牙の頭をどつく。

「ちがいねえ」

ラカンほどではないにしても、何かを感じたナギも大きく笑う。

「も、もう不謹慎ですよ！ 真面目な話の最中に！」

慌てて二人を叱るタカミチに、ゼクトが笑いながら話しかける。

「ハッハッハ、やっぱりまだまだ若いのうタカミチは」

外見的には更に若く見えるゼクトがタカミチに言う。

「あれはのう、鋼牙のメッセージじゃよ」

「メッセージ？」

「さよう。話自体は確かにこれ以上ないくらいに真面目な話じゃ。しかしな？ 鋼牙は真面目に受け取ってもらう必要はないと思ってるよっじゃ」

そう言っ て鋼牙に目配せするゼクト。

「そのとおりだタカミチ。今言っ たのは全て過去の話。今の俺は他でもない、紅い翼の冴島 鋼牙だ。それ以上でも以下でもない」

そう言っ て静かに笑う鋼牙。

「ようするにだ！！ 仲間なんだから小難しい事考えて遠慮なんかすんなってこつた！！」

そう言っ てラカン は豪快に笑う。乱暴かつ単純明快な言い方だが、鋼牙の言いたい事の全てはそこに集約されていた。

「まだまだ甘えなタカミチ！」

タカミチの肩を組んで笑うナギ。周りから笑われて少しだけ頬を膨らませて顔を紅くするタカミチ。

「ん？ てことは、タカミチもその剣さえ持てるようになりゃ、あの牙狼になつた鋼牙並みに強くなるって事か？」

「逆じゃ馬鹿弟子。鋼牙並みに強くならんとダメじゃということじゃ」

「ウハハハハハハハ！！　そんなあまだしばらく先になりそうだなー！！」

ラカンの笑い声にへこむタカミチ。そんなタカミチに鋼牙は鎧を送還して対峙する。

「……いいかタカミチ。この剣を形作るソウルメタルという物質は、持つ者の心の在りようによってその重量を変える物質だ」

「心の在りよう？」

「ああそうだ。体だけを鍛えていてはダメだ。一番大切なのは、その剣を何のために、何を思って振るうかという事だ」

「何のために……」

タカミチは鋼牙の手にある自分のアーティファクトを見つめる。

「そうだ。……その心にたどり着けた時、お前は初めてこの剣の所有者として認められたことになる」

そう言っつて鋼牙は双剣を地面に突き刺す。タカミチはその剣を少し見つめた後、カードに戻る。

「……なるほどのう。魔戒騎士が人生をかけて人を守る人間達だったのが分かる気がするわ」

「そういう人間じゃなけりゃ魔戒騎士になれなかったって事だな」

隣でそういつて笑う弟子に、ゼクトは頭が痛くなった。

「……そう、その剣が抜けるようになった時。魔戒騎士の役目はようやく……」

「え？」

その鋼牙の呟きはタカミチにしか聞こえなかった。

タカミチがその真意を聞き返そうとしたとき、その場にいた全員にアルからの魔法による念話が聞こえてきた。

いつもの余裕の無いアルが話した内容は、紅い翼全員に緊張を走らせる。

『完全なる世界の手によって、ウェスペルタイア王国王女 アリカ・アナルキア・エンテオフュシアとヘラス帝国第三皇女 テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアが誘拐された』

……この数時間後。

冴島 鋼牙は紅き翼の初仕事として、とんでもなく重要な任務をおおせつかる事になるのだった。

6： 迷宮

アフリカSIDE

私とテオドラ第三皇女が誘拐されたのは、『完全なる世界』について、秘密裏の会談を執り行おうと、とある場所で落ち合った時だった。

この会談の事を知る人間は連合は勿論の事、ヘラス・オステイア両国にすらない。本国ではそれぞれ影武者が自分達の代わりを勤めているはずであり、本物の王女達が城にいないという事実を知る人間は、自分達の護衛を勤める極少数の私兵のみ。

だが、情報の漏洩を危惧して慎重に慎重を重ねた上での会談は、いとも簡単に破綻することになった。

その結果が、いまの私達の状況。

正直、私には何が起こったのかすら知覚する暇はなかった。

会談へと向かう途中で、護衛の兵達が騒ぎ出したかと思った瞬間、私の意識は刈り取られ、気がついたときには既にこの場所にいたのだ。

王族の暮らす部屋よりは多少狭いが、しっかりと掃除の行き届いている部屋。だが部屋には窓は無く、調度品もクローゼットやベッド、あとは姿見の大きな鏡くらいしか部屋には無い。

そして、ベッドの上に寝かせられていた私の横には、同じくもう

一つのベッドで眠らされているテオドラ第三皇女。

影武者を立てているので、すぐには騒ぎにならないはずだが、これの誘拐が『完全なる世界』によるものだったら（ほぼ間違いなくそうだろうが）、奴らはすでに何らかの行動に出ているはずだろう。

しかし私も、何の保険も無くこのようなところにいるわけではない。

今回の会談に出る前に、紅き翼のアルビレオ・イマからこのような時のために、私の居場所を特定する事の出来る特殊な魔道具を預かっていたのだ。

本来なら、彼らに護衛を頼みたかったのだが、彼らはいまや全国指名手配の身であり、私の立場的に一緒にいる事は、双方にとって不味い事なので仕方が無かった。

私は少しでも痛む頭を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。迂闊な事はできないが、せめてここがどこなのかを把握したかったのだ。

この部屋唯一の扉に近づきドアノブに手をかけると、意外な事に何の抵抗も無くすんなりと開く。しかし扉の先にはトイレと浴室のある別室があるだけで、その部屋にあった出口だと思われる扉には案の定鍵がかけられておりビクとしなかった。

仕方が無く元の部屋に戻った私は、扉を閉めながら重い溜息を吐く。

今の私の中には様々な不安が渦巻いている。国の事、完全なる世

界の事、そして今の私の事。そして、まだ何も知らないテオドラの事。幼いころから面識があったテオドラを通じて、帝国側に完全なる世界の存在について伝えようとしたのだが、結果としてこのような事に巻き込んでしまった。

私はベッドの上で静かに寝息を立てているテオドラに、心の中で謝罪する。

そして私も、ベッドの上にも腰掛けようと扉から離れる。

「？」

今、気のせいかが何かが崩れるような音が聞こえた気がした。

「……いや、気のせいではない！」

今度はハッキリと聞こえた。轟音と、大勢の人間が走り回る足音が間違いなく聞こえてきた。

もしかして紅き翼が助けに来てくれたのか？

いや、それにしては少しばかり様子がおかしい。戦闘をしているにしては、少々音が単調なのだ。

普通は魔法の打ち合いで、もっと激しい音や振動が響いてくるものなのだが、今聞こえてくる音はそれとは違う。いうなれば工事現場の発破作業のような、ただ壁が崩されていくような音だったのだ。

「……むう、なんじゃ一体」

この音で目が覚めたのか、テオドラが目頭を擦りながら起きる。

「おお、ようやく目が覚めたかテオドラ」

「おー、アリカ。……んん？　なんでわしはこんな狭っ苦しい部屋で寝ておるのじゃ？」

私は、自分の状況を理解していない能天気な友人に頭痛を覚えた。

ふと、私は何か視界の片隅に違和感を覚えた。

何なのだろうと考えるとうすぐに分かった。閉めたはずの扉がほんの僅かに開いていたのだ。

立て付けが悪かったのか？　それともさっきの音の振動で開いてしまったか？

私はほんの些細に身構える。

そして、再び違和感。

だが、部屋の中を見渡しても異常らしきものは感じられ無い。私は一体何に違和感を感じたと言っののだろうか？。私は一人首をひねる。

「アリカ。一体ここは何なのじゃ？　さっきからドツカンドツカン五月蠅くて仕方ないぞう」

テオドラが口をとんがらせながら能天気につ。……肝が据わっていると言っか何と言っか。

そして私は何の気なしに、壁に埋め込まれていた大きな姿見の鏡に背中から寄りかかる。

そんな私の姿を、ぼんやりとした眼差しで捕らえていたテオドラの表情がサッと変わった。寝ぼけていたような表情は消え、先ほどとは打って変わって見る見る顔色が青くなっていく。そして、まるで私と部屋の中を見比べるかのように、忙しなく視線を動かしキョロキョロし始めた。

そんなテオドラの急激な変化に、私が違和感を覚えられないわけがなかった。

「どうしたのテオドラ。急にキョロキョロしだして」

そして、再び私に視線を戻したテオドラは「ヒッ……！」と口から小さな悲鳴を洩らすと、震える指で私を指差す。

一体どうしたと言うのだろうか？ 私は自分の体を見ている。が、特に異常は見当たらない。

すると、テオドラは目を見開いて大きな声で叫ぶ。

「ち、違うアリカ！！ 後ろ！！ 鏡の中になにかおるんじゃ！！」

そのテオドラの声で、私はパッと後ろを振り向く。

そして私は、鏡から顔を突き出した『何か』と目が合い、不覚にもそのまま意識を手放す事になった。

アリカSIDE OUT

赤い翼として俺に与えられた最初の任務は、アリカ王女とテオドラ第三皇女の『夜の迷宮』からの救出だった。

勿論他の連中も一緒に来るが、最初に俺に忍び込んで二人を確保して欲しいらしい。ちなみにタカミチは留守番だ。

そしてゼクト曰く

「お前さんの事じゃから、忍び込むのに丁度良い能力だってあるじやろう?」

との事だった。

……確かに無いわけではないが、なかったらどうするつもりだったんだ。俺がそう言くと、ゼクト達は笑いながら声をそろえて。

「そのときは全員で突撃するだけじゃ」

なんて言い放ちやがった。本当によく紅き翼が今までやってこれたものだど頭が痛くなる。

俺達は、夜の迷宮から少しだけ離れたところにある廃屋に忍び込む。そして廃屋の中で俺は一旦『牙狼』の姿に変身すると、更に二段変身で姿を変える。

その姿は赤い色をメインに鎧と兜を被ったような、牙狼とはまた違うタイプの騎士の姿をしたライダー。そう仮面ライダー龍騎だ。

「お前、一体どれだけ引き出しがあるんだよ……」

ナギは少しだけ呆れたように俺に言う。

「沢山、とだけ言っておこう」

そんなナギを尻目に俺はそう言くと、辺りに鏡、またはそれに準

ずるものがないか見渡す。すると床には具合良く、大きめに割られた鏡の破片が散らばっていた。

俺が何をするのかと言うと、この鏡を通じて鏡の世界、通称ミラーワールドに潜ろうというのだ。誰にも見つからずに忍び込んで王女達を助け出すのに、まさにうってつけの能力だといえるだろう。

俺がその事を全員に説明すると、例外なく全員が信じられないというような顔をして俺を見る。

「そんな能力まであつたら、もしあなたがその気になれば要人暗殺から逃亡まで自由自在じゃないですか」

物騒な事を真顔で言つてのけるアル。

「んなこたしねえだろうがな」

ナギのその言葉が胸にしみる。こいつは、単純そうに見えて実に単純だ。だからその分一言一言に曇りが無く、真っ直ぐにこちらに届く。こういったところが、他の人間をひきつけて行く要因の一つなのだろう。

「だよな。そんなことやる人間だったら、とつくの昔に指名手配だぜ」

そう言つて笑う面々。……ハイパークロックアップやらなんやら、もろもろの事は言わない事にしておこう。

「まあ、これでもし誰かに見つかつてしまったら、俺も遂に『紅き翼』の一員として指名手配リストに載せられるんだらうけどな」

「何、遅いか早いかの違いですよ」

そういつて微笑みながらアルが俺の肩を叩く。……まあ、ここま
で来たら一蓮托生だろう。後悔なんかはしない。

そうして俺は、いよいよ夜の迷宮へと出発する。

「それじゃあ行つて来る。姫様達を確保したら合図をする」

俺の言葉に全員がうなずくのを確認してから、俺は鏡に触れる。

そして俺は、まるで鏡に吸い込まれるようにミラーワールドへと
ダイブする。

ミラーワールドは文字通り現実と真逆の鏡の世界。人間などの生
物が存在しない事と全てが左右反対になっている事を抜かせば、現
実世界とまったく変わりは無い。

だがこちらの世界のミラーワールドは『仮面ライダー龍騎』の世
界のものとは、性質がだいぶ異なっている。

俺の中の、創られた記憶の中の知識によるとこのような違いがあ
る。

1 こちらの世界のミラーワールドは時間経過によるライダーの消
滅はない。その代わりライダー以外でこの世界に進入する事は出来

ない。また、この世界でライダーの変身を解くことは出来ない。

2 ミラーモンスターは存在しない。

3 ミラーワールドでの建物などの破壊は、現実世界にも影響を及ぼす。逆も然り。

といったような事だ。特に、制限時間がなくなっているのとミラーモンスターの消滅は非常に大きい。なぜ制限時間が重要かと言うと、本来ならミラーワールドに入るとライダーならば約9分程で消滅してしまうという死のリスクを持っているからだ。なので、この制限時間の消滅と言うのはミラーモンスターの消滅と合わせて、死という最大のリスクが消滅した事を意味するのだ。この能力ほど、単独での隠密行動に適した能力はないだろう。

記憶の中からこれらの事を引き出した俺は、鏡越しに驚いたようにこちらを見ているナギ達を一瞥すると、早々とこの場から立ち去った。

約1時間後、俺は夜の迷宮の内部にたどり着く。

そしてアリカ王女に持てせている魔道具から出ている魔力を辿り、薄暗い迷宮の中をひたすら歩いている。道案内してくれるのは、アールの持たせてくれた魔道具。どうやらアリカ王女の魔道具と二つ一組のものらしく、互いに位置がわかるシロモノらしい。

そして、幸運な事にミラーワールド内ではトラップなどの仕掛けは作動しないようで、だいぶ静かに進んで行く事が出来ている。が、今歩いているのは何を隠そう迷宮の内部。いくら魔力を辿っていたとしても、行き止まりに突き当たったりすれば引き返さざるを得ない。

そんな事を繰り返して更に小一時間。流石に面倒になってきた俺は、陽動も兼ねて少しばかり破壊工作に勤しむことにした。

俺は腰のベルトに付いているカードデッキから一枚のカードを取り出し、腕に取り付けられているドラグバイザーと呼ばれるカードリーダーにセットする。

『ADVENT』

すると、機械の音がドラグバイザーから響くと同時に、迷宮の天井を突き破って一匹の紅龍が鋭い咆哮を轟かせながら、俺の目の前に姿を現す。

『無双龍ドラグレッダー』

本来は、仮面ライダー龍騎と契約しているミラーモンスターなのだが、本来の龍騎ではなく姿を借りているような状態の自分の場合はミラーモンスターとしての側面は消滅し、ただ純粹に自分の戦力の一つとして行使することが出来る。

俺は目の前に現れた紅龍に早速指示を出す。

「……ドラグレッター。陽動代わりに、ここら辺で派手に暴れ回っ

てやれ」

俺がそう指示するとドラグレッダーは大きく一吼えし、口から真っ赤に燃える火球をあたりにばら撒き始める。

辺りの壁は崩れていき、迷宮は瞬く間に炎に包まれていく。

だがそれはミラーワールドでの状況。現実世界のほうでは火の手は上がっておらず、ただ何の前触れも無く壁が崩壊していくだけだろう。

しかし、俺にとってはそれで十分だ。あちらの世界の状況は見ることは出来ないが、相当の混乱がおきている事だけは確かだろう。

そして、ドラグレッダーがここで暴れている間に、俺は急いで壁を蹴り壊しながら先へと進む。

おそらく敵の方も、襲撃者の目的が王女奪還だと予測しているに違いない。少しでもドラグレッダーの起こしている陽動に気が向いているうちに先へ進まなくてはいけない。多少こちらの進行が一直線になろうとも、先に王女達に接触さえすれば、そのまま外壁を破壊して脱出すればいいのだ。

そうして壁を蹴り壊していくうちに、やがて王女達が隣にいてと思われる浴室のような部屋にたどり着いた。

流石にこれ以上蹴り壊していたら王女達が瓦礫に埋もれてしまうかもしれないので、俺は静かに扉を開き、隣の部屋へと進入する。

部屋に入って見ると、そこはベッドが二つと少しの調度品がある

少しだけ広めの部屋。ミラーワールドの中からでは姿は見えないが、魔力反応は確かにこの部屋からのようだ。

そして俺は、嫌が応にも目に付く、壁に埋め込まれてあった大きな鏡を見て

(……鏡のような物が無ければ部屋に出ることが出来なかったな)

と今更ながらに気がつく。

まあもしそうだったとしても、隣の浴槽に溜まっている水からでも戻れたので問題は無かっただろう。

……今更もしもの事を考えても意味は無いな。とりあえず今は部屋の中の状況を確認する事にしよう。

壁に埋め込まれていた大鏡から現実世界の様子を覗いてみると、現実世界の部屋の中には女性が二人。こちらを背にしている女性と、ベッドに腰掛けている褐色の少女だ。

こちらを背にした女性の方の顔は分からないが、魔力の反応位置からアリカ王女だろう。そして褐色の女性の方は、ナギから見せてもらった顔写真にあったテオドラ第三皇女そのもの。

どうやら俺は、ようやく目的の場所まで到達したらしい。

敵のほうも部屋になだれ込んで来ていないようで、俺はホッと息を吐く。そして、あちらの世界に移動しようとゆっくりと歩き出す。

すると、テオドラ第三皇女のほうがこちらの方に気がついたらしく、その顔を青ざめさせた。

ここで新たな発見。ミラーワールドの事を補足しておく、原作において通常はミラーワールドの住人を見ることは出来ない。例外としてライダーと、ライダーの持つカードデッキに触れた人間のみがミラーワールドの中を見ることが出来る。だが、こちらの世界ではどうやら誰からでも鏡越しであれば、こちらの世界の様子を見ることができらしい。という事は、ナギ達も鏡の中に入った後の俺の姿が見えていたわけか。

補完された記憶には無かった情報だったので少し驚いたが、これもある意味収穫だろう。

そして俺は、顔を青くしているテオドラ第三皇女を見て、少しだけしまったかなと思う。確かに、鏡の中からこちらに歩いてくる得体の知れない奴を、怖がるなど言う方が無理な話だ。

早急にあちらの世界に出て誤解を解こう。そう思って、俺はミラーワールドからあちらの世界に顔を出した。

それと同時に、アリカ王女と思われる人物がこちらを振り向いた。どうやらテオドラ第三皇女が俺の方を指差したらしい。

……そして、大変遺憾な事ながら。

俺と目が合った瞬間、アリカ王女は見事に気絶なさってしまった。

気持ちは分かるが、ショックだ……。

……俺はこの世界に来て初めてヘコんだ。

7：正義

夜の迷宮でのアリカ・テオドラ両姫の救出任務は実にあっさりと成功した。

迷い込んだら二度と日の光を浴びる事は出来ないとまで恐れられた迷宮は、壁をぶち抜かれて一直線に進むという暴挙とも呼べる方法によって、およそ一時間と少々で攻略されてしまったのだ。

鋼牙は早速アルの魔道具に合図を送り、救出成功を紅き翼のメンバーに知らせる。おそらくあちらでは、陽動開始の合図をすっ飛ばしていきなり救出完了の合図が出たので、ナギとラカンあたりは不満たらたらでブーブー言っているだろう。まあ、思いのほかアツサリと任務達成してしまったのでこれも仕方が無い。

「そういうわけで、早急にここから脱出する」

鋼牙は気絶しているアリカ王女を担ぎ上げると、いまだ腰を抜かして床にへたり込んでいるテオドラ皇女にそう言った。

「え……っと。何にも説明をしてもらってないんじゃないが、お主は妾達を助けに来てくれたという事で良いのかの？」

困惑気味にテオドラが鋼牙にそう尋ねる。そう言われて鋼牙は、自分が何も説明をしていないことに気がつく。

「ああ、説明を忘れていたな。俺は紅き翼の人間で、二人の救出のためにここに来た。」

鋼牙はそう言いながら、腰を抜かしているテオドラもヒョイと小脇に抱える。

「ちよっ！？ い、いきなり抱き上げるでない！！」

「それは悪かったな」

鋼牙は、全く反省しているようには見えない謝罪の言葉を言つとおもむろに部屋の壁に思い切り蹴りを放つ。

壁はその蹴りの一撃で見事に粉碎されたものの、その先に見えたのは岩盤。どうやら壁を蹴破って外に脱出、というわけにはいかないうつだ。

鋼牙は少しだけ考えると、担いでいた二人を一旦床に降ろす

「すまないが、少しだけ離れてくれるか？ …… ああ、その辺りでいい」

テオドラがアリカを引きずりながら離れたのを確認すると、鋼牙はデッキから一枚のカードを取り出す。

まるで燃えているかのように揺らめく一枚のカード。それと同時に鋼牙の手に龍の顔を模したようなハンドガンのようなものが出る。

鋼牙はその龍の口にある装填口に引き抜いたカードを差し込んだ。

『サヴァイブ』

するとまるで龍の口から発せられたような電子音声とともに、鋼牙の姿が変化する。龍騎の強化変身体であるサヴァイブだ。

なぜこの姿になる必要があるかといえば、理由は簡単。サヴァイブ状態の時にデッキに現れるストレンジベントのカードを使いたかったからである。

このカードはその場に適したカードに変化するという特性を持っており、今の龍騎の状態では使えないカードが必要な時に使用されるカードだ。

まあ、鋼牙の場合別の姿になればいいだけの話ではあるが、他の姿になるには一旦変身を解かなければいけないという条件があるわけで、顔をなるべく表に出さないという枷を負っている鋼牙はわざわざこういう手段をとったのだ。

そんな一連の流れをテオドラは、まるでテレビのヒーローを見る子供のようなキラキラとした目で見つめている。

「なんじゃお主！ カッコいいぞそれ！」

最初の頃の驚きと不安の混ざった表情は消え、そこには目の前に現れたヒーローに心躍らせる少女の姿があった。

どうやら外見同様の幼い精神年齢の持ち主、つまりは子供らしい子供のようだ。

（完全なる世界を崩す為とはいえ、こんな幼い子供まで巻き込まねばならないとはな……）

仕方の無い事とは分かつてはいた。戦時中、ましてやその渦中の国の皇女。巻き込まれないと思う方がどうかしている。

それでも鋼牙は、戦争に幼い子供達が巻き込まれていく事に憤りを覚えずにはいられなかった。

サヴァイプに変身した鋼牙は、興奮したような目で自分を見つめるテオドラの頭を優しくなでる。

「お姫様を助けに来たんだ。カッコよくて強いのは標準装備だ」

冗談めかしてそう言葉をかけると、テオドラは嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「……つと、それよりも早いところここから脱出した方がいいな」

僅かに耳に入ってくる足音に気がついた鋼牙は、再びテオドラと気絶しているアリカを担ぎ上げると、ストレンジベントのカードをカードリーダーに挿入する。

『ストレンジベント』

電子音声でそう言ったかと思うと、再び鋼牙手の中に一枚のカードが出現する。そのカードを今度は側面部にあるカードリーダーにセット。

『クリアーベント』

その電子音声と共に鋼牙達の姿は、まるで空気に溶けるかのように姿が消えていく。

「うおおー！ なんじゃこれは！ 透明になったぞー！」

「……テオドラ皇女、頼むから逃げてる時は喋らないでくれないか」

せつかくクリアーベントの能力で透明になっても、声を出されては一発で分かってしまう。

「むむ、わかったのじゃ。……それはそうと、主の名をまだ聞いておらんかったぞ」

たしかに紅き翼の人間だという事は話したが、自己紹介をした覚えはなかった。しかし、今のタイミングでそれを普通聞こうとするだろうか？ 鋼牙は本能的に、この子は将来……というか現在進行形で唯我独尊の道を歩きつつあると悟った。

「……俺の名前は冴島 鋼牙」

「うむ！ 妾の名前はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。知つての通りヘラス帝国第三皇女じゃ！ テオと呼んでもいいんじゃないぞ？」

「さっそく脱出するぞテオドラ皇女」

テオドラの言葉は無視して、さっさと走り出す鋼牙。スルーされた事にプクーっと頬を膨らませるテオドラだったが、鋼牙の走るスピードの速さに目を回しそれどころではなくなってしまったのだ。た。

……脱出の途中で、陽動の合図を出していないはずなのにナギと

ラカンの二人が迷宮のなかで暴れまわっている姿を見かけた気もしたが、面倒くさいのでとりあえず無視して脱出を優先する事にした。

後で聞いた話によると、どうやら二人は迷宮中の警備兵を殲滅するまで、丸一日近く迷宮内で暴れ続けていたらしい。アルもアルで、撤退の合図を出す事を忘れて普通にアジトに引き上げてしまった。たのだから、いい性格しているといったところだろうか。

なにはともあれ、こうして鋼牙に与えられた救出ミッションは拍子抜けするくらいにあっさりと終了。気絶したアリカと目を回したテオドラを抱えてアジトへ帰還したのだった。

それから約半年後。

S I D E 鋼牙

荒野に乾いた風が吹いた。

俺の眼前に広がる光景は、まさに死屍累々。硝煙と血とが混ざり合った吐き気のするような臭いを、砂煙を立ち上らせながら風が運んでくる。

ここは戦場。

命の消える場所。

そして俺自身も今、命の奪い合いに身を投じている真っ只中だ。

「……ライドルホイップ！」

俺は手に握った、打鞭とフェンシングを足したような剣・ライドルをXを描くように振るう。

金属で出来ているはずの鎧は、まるで布を裂くかの如くいとも簡単に引き裂かれ、それを纏っていた将は四分割の肉片へと変わった。

これが最後の一人。これで戦場に立っている生きた人間は自分一人になった。

ライドルを一振りし血糊を飛ばすと、そのままベルトの収納部へ収める。銀色の体は返り血で真っ赤に染まり、もはや銀色の部分は見えなくなっていた。

「これで全ての膿は出し切ったか……、それともまだ見えない闇があるか」

日も暮れかかり、沈もうとしている夕日を見つめながら俺はそう
呟く。

俺の今の任務。

それは『完全なる世界』の尖兵として、各陣営に潜り込み戦況を
混乱させている部隊の排除だった。

各国の上層部にまで食い込んでいる『完全なる世界』ならば、こ
れくらいの工作をするのも容易いのだろう。その数は大小含めると
実に30を超える部隊数となり、その配置も戦域全体満遍なく及ん
でいた。

おかげで俺も、ここしばらく他の連中とろくに顔も合わせられな
いでいた。

たまに顔を合わせたかと思えば、話題になるのは戦場での俺のこ
と。

曰く『戦場に現れる仮面の死神』といった感じで、都市伝説のよ
うになっているらしい。……まあ、都市伝説も何も実際にここにい
るわけだが。

ナギ達が話すには、

『戦場ならばどこにでも現れる』

『目をつけられたら最後、部隊ごと皆殺しにされる』

『姿は戦場ごとに違う』

『もしその姿をみたら、土下座しながら自分の国の国家を歌えば助かる』

といった類の噂らしい。しかも、戦場ごとに姿が違うので同一固体と認識されておらず、本格的にそういった精霊や死神の類だと信じられているらしい。

その話を聞いたとき最初に思ったのは、「ああ、時々みかける土下座して歌い出す連中はそういう意味だったのか」だ。

ちなみに、『完全なる世界』の尖兵の連中は、何故自分達が狙われるのか心当たり120%なのでそんなことしないで襲い掛かってくる。なので後半あたりは色々と手間が省け、仕事がとても楽だったのを覚えている。

そんなことを考えているといつの間にか夕日は沈み、戦場は闇に包まれた。

俺は今の姿、仮面ライダーXの変身を解除しようと人目のつかない場所に移動しようとする。……たとえ誰もいないと分かっているけど、ゼクトから耳にタコが出来るくらいに正体を見せないように言われているので、十分に警戒する。ちなみにアリカ・テオドラ両姫にすら変身前の姿を見せた事が無い。

そして俺がこの場から離れようとしたその時。

「……！」

微かな魔力のうねりを感じ取った俺は、すぐさま今立っている場

所から飛び退く。すると、先ほどまでいた地面が隆起し、たちまち
槍のように変化し襲い掛かってくる。

「……チィッ！」

俺は何とかそれを回避するものの、地面から生えた石槍は止まる
事無く次々とまるで俺を追跡するように、地面から際限なく生
えてきては俺目掛けて飛んでくる。

ガロの姿の時だったら魔法攻撃を無効化してやることが出来るの
だが、今の姿では回避・防御するしか手立ては無い。

どこの誰だかは知らないが、今まで相手をしてきた連中とは比べ
ようも無い実力者なのは言うまでもないだろう。

その証拠に、俺は遂に敵からの攻撃をかわし続けるのが困難にな
り、先ほど収めたばかりのライドルを再びベルトから引き抜く羽目
になった。

「ライドルスティックー!!」

俺はライドルの握り部分にあるSのボタンを押し、剣状のライド
ルホイップから棒状のライドルスティックに変化させた。

「はあああああぁっ!!」

そして、そのままライドルの中央部を持ちプロペラのように超高
速で回転させる。飛んできた石槍はその回転に弾かれてそのまま粉
砕されていく。

俺はそうして防御している最中に、この攻撃の大本である（おそらく）魔法使いを探すべく、Xライダーの聴覚に装備されているソナー機能を使用する事にした。

（これだけ正確に追尾してくるような魔法だ。術者は近くにいます……）

もしもこれが超遠距離からの攻撃だとしたら、あとは撤退という手段しか残っていない。そんな不安を抱きながら、鋼牙はまるでマシンガンの掃射の如く襲い掛かってくる石槍をライドルで防ぎ続ける。

そうしてソナーを使用し探索する事数秒。遂に、何も無いはずの空の一部分から人間と同じ大きさの何かの反応を捕らえることに成功した。

「なるほどな。姿を消しての奇襲というわけか……！」

俺は回転させているライドルの速度を更に上げる。すると、そこにはもはや突風とも呼べるべき大きな風のうねりが砂塵を舞い上げ巻き起こった。

その突風は迫り来る石槍を最早近づけすらせず、そのまま勢いを殺し停止させる。そしてその停止して地面に落下する一瞬、鋼牙はその中の一つを破壊しない程度に上空目掛けて蹴り上げる。

石槍は矢の如く風を切り裂いて空に向かって飛んでいく。

すると飛んでいった石槍は、まるで何かに叩き壊されたかのように粉々に砕け散り、そのまま荒野の砂へと還った。同時に、鋼牙を

襲っていた無数の石槍も次々にその動きを止め地に落ち砂へと還っていた。

「いやいや、なかなかの腕です。流石は『仮面の死神』といったところでしょうか？」

そんな声が聞こえたかと思うと、空間の一部がグニヤリと歪み、そこに白髪の青年が現れる。

「お前がさっきの魔法の術者だな？」

「ご明察です。そしてあなた達が追いかけている『完全なる世界』の一員、名前はフェイト・アーウェルックスといえます」

フェイトと名乗った男はそう言うのとゆっくりと地上に降りてくる。

「『紅い翼』の死神の顔を見るついでに、どれほどの実力が拝見させていただこうと思ったのですが。まさか、ここまでとは思いませんでした」

「悪いがこちらでも簡単にやられてやるほど甘くはないんでな」

「でしようとも」

そういつて顔に微笑を浮かべるフェイト。何なんだこいつは？
ついさっきまで俺のことを殺そうと襲ってきたのに、今は殺気の欠片すらも無い。

「……ただ世間話をしに来たわけでもないだろう？」

「……いえいえ、今となつては半分は世間話ですよ」

そうして静かにこちらに歩いてくるフェイト。

「さきほど、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアがクーデターを起こしました」

「……！　なんだとっ！？」

「我らの傀儡だった現王を殺害し女王に即位。おそらく全てを知り、我らとの最終決戦を始めるおつもりなのでしょうね」

……ここしばらく連絡を取り合っていなかったが、まさかそこまです展開が進んでいるとは思っていなかったな。

「だったら、なおさらここで俺と話している場合じゃないんじゃないかな
いか？」

「それは違いますね。今だからこそあなたと話をしなければいけないんです。今が、あなたと話が出来る最後の機会なのですから」

「……」

「貴方にお聞きします。正義とは一体何なのでしょう？」

「正義？」

「ええ。正義です。……私達『完全なる世界』の最終目的はこの世界を終わらせる事。確かに傍から見れば世界を滅ぼす大罪人でしょう。……しかし、我々が何の意味も無くこの世界を滅ぼすと思いま

すか？ 答えは否です。……この世界、魔法世界はそう遠くない未来に魔法力の枯渇により滅びます。我々がしようとしている事は、その真の破滅が始まる前にこの世界を救うための通過点なのです」

「……その話が本当だとして、何故それを俺に話す？ 敵であるこの俺に」

「……なぜなのでしょうね？ 私にも分かりません。ただ……」

「ただ？」

「貴方の存在を知ったとき、どのような結末に転ぼうと、この世界の真実を伝えておくべきだと、そう思ったのですよ。魔法使いとも呪術師とも違う、強大で底の見えない力を持った貴方なら、全てが消えた最後にも希望が残る。そう思ったのですよ」

「そんな考えが出来るのなら、何故他の魔法使い達と手を結ばない？ 何故共に世界を救おうとしない？」

「いいのですよ、これで。私達の取る行動は世界を救う無数の方法の中の一つ。……たとえ悪だと言われようと、これが最善だと私達は信じているのですよ」

風が吹いた。

二人の周りを、乾いた風が静かに吹いた。

「……この世に」

「？」

「この世に悪は無い」

「……」

「あるのは自分の信じた正義だけだ」

俺の言葉を聞いて、フェイトは少しだけ黙り込み、再び口を開く。

「……今からでも、こちらの側に来てはくれませんか？」

フェイトの表情は真剣そのものであり、そこに嘘・偽りは微塵も感じられない。

「悪いが、先約があつてな」

「……そうでしょうとも」

「……最初に会ったのがお前だったら、俺はそっち側にいたかもしれない」

「……ありがとうございます」

フェイトはそう俺に言うと、軽く頭を下げる。

「では、名残惜しいですがこれでお別れです。……次に会うのは戦場ですね」

「……ああ、歴史が動く決戦の場、だ」

「……そういえば、あなたのお名前をお聞きしていませんでしたね？」

「……次の次に会った時に教えてやる」

「フッフ、それがあの世でないことを祈っています」

最後にそう言つと、フェイトは自分の影の中に溶けるかのようにその場から消えていった。

風は、止んだ。

大分烈戦終結の2日前の出来事であった。

8： 大戦（前書き）

結構短いですが、なんかここで切ったほうが綺麗につながるかな
と思ったもので。

8： 大戦

フェイトがこの場を去ってからしばらくして、アルが慌てた様子で念話をよこして来た。もちろん内容は、アリカ王女のクーデターの事だろう。アルの話からすると、敵の本拠地というのも判明し、何とそこにはアリカ王女の妹が世界崩壊の術式の鍵として拉致されているらしい。

おそらく前王を操っていたのも、妹君を怪しまれる事無く確保するための手段だったのだろう。

何はともあれ、早くても明後日には決戦が始まる。

俺は他のメンバーと合流するべく、アジトへと帰還する事にした。

「というわけで鋼牙。俺と仮契約しろ！」

俺がアジトの扉を開けると、ナギに出会い頭にそう言われた。

「ナギ、何も聞いておらん鋼牙にいきなりそんなことを言っても通

じるわけが無いじゃろうが」

「あ？ ああ、それもそうだな！」

ゼクトが呆れながらナギに言う。……言いたくは無いが、ナギという人間は本当に馬鹿だ。

「あー、えーつとだな。つまり『完全なる世界』との最終決戦なんだから、鋼牙の奴がもっと強くなっても損は無いだらって話で」

「……ナギの説明では決戦に間に合いそうに無いので、私の方から説明します」

「……頼む、アル」

アルの説明を掻い摘んで説明すると、少しでも最終決戦での勝率を上げるために、俺にもアーティファクトを持たせようという事なわけだ。

「それで、おれはナギと仮契約をすればいいって事でいいんだな？」

「そういうことだ！」

そういうわけで、どうやら俺はナギの従者になるらしい。たしかラカンのアーティファクトもナギと仮契約して出たもののはずだ。確かにアレクサスのアーティファクトが出てくれば戦力強化になる事は間違いない。……逆にとてつもなく癖の強いのが出てきたとしたら、正直本番まで使いこなせるようになるのか微妙だ。タカミチの時のようになったら正直涙目だ。

「ところでタカミチ」

「はい？」

「銀狼剣は持てるようになったのか？」

「うっ……」

……この様子だと、まだまだ修練が必要なようだ。

「すみません、こんな大事な時にお役に立てなくて……」

タカミチは意気消沈してみるしおしおに萎れていく。

「気にする事はない。お前にはお前の任務があるんだ、そっちの方に専念してくれば俺達も安心して前線に出られる」

先ほどのアルの説明の中で聞いたのだが、今回の決戦でのタカミチの仕事はテオドラ皇女と共にヘラスから戦力を引っ張り出して来る事だ。そのため、これからすぐにヘラスに飛んでいかねばならないため、もしかしたらこれが今生の別れになりかねないのだった。

「あの……、鋼牙さんも皆さんも、生きて帰ってくださいね？」

不安そうにタカミチが、アジトにいるメンバーにそう言う。この場にはオスティアでアリカの護衛をしているガトウを除いた全員が揃っている。

「バーカ。俺達を誰だと思ってやがる。泣く子も黙る『紅い翼』だぜ？」

「おうよ！ ガチンコの勝負だったらどんな奴らにだって負けやしねえよ！」

ナギとラカンがタカミチの不安を吹き飛ばすかのように力強く言う。

「それによ、こっちには鋼牙がいるんだ。こいつの負ける姿が想像できるか？」

ラカンはそう言っただけで俺の肩を組む。

「そ、そうですね！ 鋼牙さんが負けるはずありませんよね！！よ、よーし！ 僕も頑張っただけでラスの軍艦を根こそぎ引っ張ってきますから、みなさんも頑張ってくださいね！！」

どうやら気合が入ったらしく、タカミチは大きな声でそう叫ぶと勢いよく扉を開けて外に出て行ってしまった。……どうやら、本当にそのままヘラスへと向かって行ってしまったらしい。

「若いのう」

「ああ……俺らには無い輝きだ」

「俺よりも若い見た目してて何言っただお前らは」

ラカンは大声で笑いながら俺とゼクトの背中をバシバシ叩く。……仕方ないだろうが、設定上俺はもの凄い年齢なんだから。

「それにしても、タカミチには少し酷な仕事かもしれんのう……」

「ああ、まあ確かにテオドラの嬢ちゃんがいるつつても交渉なんかやった事も無いだろうしな。何で行かせたのかが不思議なくらいだぜ」

頭に？を浮かべながら首を捻るナギ。

「うむ、おぬしもそこまで考えられるようになったか馬鹿弟子よ。

……タカミチの本当の仕事は交渉なんかではない」

「？だつたら一体」

ナギの？は更に増えるばかりだ。

「……見届けさせる事、だろ？」

「そのとおりじゃ」

俺のその一言に、ゼクトは深い溜息を吐き答える。

「……もしも、わしらが全滅した時。わしら『紅い翼』の一人という面でのこの戦争を知る人間を残しておかねばならん。いうなれば、全てが失敗になった時の保険じゃな」

「……そしてそれと同時に、あいつはその『もしも』を最後まで見届けなければいけない」

そう、たとえ眼前で俺達が死んでいったとしても、タカミチは戦艦の中から出ることは出来ない。それが役目だからだ。そしてタカミチは戦場の中で自分がこの任務を任された理由に気がつくだろう。

他のメンバーが全滅した相手にタカミチが向かったところで結果は見えているのだ。だからこそ見届けなければならぬのだ。

「……させるかよ」

「ん？」

「んなことさせるかよ！！ 俺達は戻って来るんだよ！！ 一人も欠けずに全員でよ！！」

ナギの声は言うまでも無い、メンバー全ての願いだ。

「……勿論だ。俺達は全員で未来を——」

……俺の脳裏にフェイトの顔が過ぎる。

そう、この世に悪は無い。

ぶつかり合うのは形の違った正義。

もし、俺達が敗れたとしても、フェイト達のやる事で世界は救われるかもしれない。

後の世でフェイト達が英雄と呼ばれるかもしれない。

だが、それでも俺達は剣を取り戦わなければならない。

俺達はお前達と違って、この先世界で何が起るのかも、そのために何をするべきかも分からない。

それでも、俺は可能性に賭けたいんだ。

犠牲の上で掴み取る未来よりも、犠牲にする事無く掴み取る未来に。

フェイト、お前は綺麗事と言っかもしれない。

だけど、おまえも望んだはずだ。そんな綺麗事みたいな理想の未来を。

俺達は、お前達の捨てた理想の未来を――

「――掴むんだ……！」

9： 開戦

1983年 9月29日（木） ウェスペルタイア王国・王都
オスティア最深部「墓守り人の宮殿」

S I D E 鋼牙

今ここでは、俺達『紅き翼』のメンバーと帝国・連合・アリアドネー魔法騎士団の混成部隊、そしておよそ十数の戦艦が、暗雲立ち込める空の下でその時を待っていた。

その中で、『紅き翼』のメンバーとアリアドネー魔法騎士団のリーダーであるセラスは、敵の大群を高さ百m程の、わりとなだらかな崖の上から見下ろしていた。

「うはぁ……何だよコレ。見ろよ、まるで地面が蠢いてるみたいじゃないか」

ラカンが眼下に広がる光景を目に思わずばやく。それも無理は無いだろう。敵の数は最早目視では確認不能なほどの数に及んでおり、数を数えるという行為そのものが最早無意味なレベルにまでなっていたのだから。

「ここまで来るともうギャグじゃのう」

ハッハッハと余裕ありありといった風にカラカラと笑うゼクト。

「狙いをつける必要が無くて楽なもんだらう」

詠春もそう言いながら、夕凧を刀を手入れするあのポンポンで手入れをしている。

「ま、雑魚が何万いようと無駄無駄無駄ッっていうやつだな」

ナギにいたっては某奇妙な冒険のマンガを読んでいる始末。という年代的にまだ出版されてないんじゃないか？ そのマンガ……。

そんな『紅い翼』のメンバーの緊張感皆無な様子を口をポカンとさせて見つめているのは、何故自分がこの場にいるのかを理解していないアリアドネー魔法騎士団リーダーのセラス嬢。

「あ、あの。これって最終決戦に挑むっていう凄く真面目で格好いいシリアスな場面ですよ？ これからあの頭おかしいんじゃないのってくらいの数の敵と戦わなきゃいけないんですよ？ 私、変なこと何も言ってますんよね？」

目の前数メートルと数百メートル先の光景のギャップに、いささか混乱気味になっているセラス嬢。気にしなくても、それが一般的な人間の意見だらう。むしろこっちが異常なことは言わずもがな。

「気にする事はない。今はアホみたいでも、やる時はしっかり仕事をする連中だ。お前もそう気を張り詰める事はない」

「は、はい。ありがとうございます……。で？　あなたは一体どちら様で？　『紅い翼』のメンバーに貴方のような人はいた覚えは……」

俺の顔を見て不思議そうな顔をするセラス嬢。無理も無い、今まで素性が割れないように行動してきたのだから。これで『あ、冴島鋼牙さんですね？』なんて言われたら、今までの苦勞が水泡に帰すはめになってしまう。

「おお！　そういえば鋼牙の顔がメンバー以外の人間に知られるのって、このセラスって娘が始めてじゃないか？」

ナギはそう言ってポンと手を叩く。ちなみにセラス嬢はナギのファンだったらしく、さつきサインをねだられていた。なんでもファンクラブまであるのだとか何とか。

「それもそうじゃのう。いやいや、アリカ・テオドラの両姫にすら見せなかったのにのう。お嬢ちゃん、お主数年分の運を使い果たぞ？」

「ええ！？　この人そんなに凄い人なんですか！？　……確かに凄そうなオーラのようなものは感じますし顔の方も少し怖いですがキリッとして十中八九イケメンな方ですが……」

……まあ、確かにテレビの中の冴島　鋼牙は格好いいけれども、自分に向けられた言葉だと思つと非常に小恥ずかしい。

「あんたも見たことは無くても聞いた事はあるだろう。戦場に現れる仮面の死神って奴を」

「ええ。噂程度には。あ、でもウチの騎士団の子がその死神に助けられたって話を聞いてから、魔法騎士団ではあまり怖がられてはいないですね。むしろ、その助けられた子がもの凄いキラキラした目でそのときの事を言って回るのに加えて、どうやらその死神が相手にしているのは戦況を混乱させているスパイ部隊のみだったらしく、逆に騎士団の中では好感度が高くファンクラブまで結成されてますよ。ちなみに私も入ってます。会員ナンバー栄光の二桁07です。あ、ちなみに私が一番好きなのはニヤンドマ南西の戦線に現れたらしい赤い目で白い体をした中国拳法を使うタイプですね。各国の同士達が独自のルートを駆使して写真を入手してくるんですけども、動画だったらさらにレアですね。どんなに安くても40万ドラクマで取引されてるって言う噂ですし。ああ！ そうそう、この間その動画の一つが戦場資料の一つでウチの騎士団に一つ回ってきたんですけどアレは興奮しましたね！ 赤い体の死神なんですが、旧世界のシノビの技を使うんですよ！ シュリケン投げたり分身したり！ ほかにも……」

……噂ってレベルじゃないだろ。話を振ったラカンも若干引いてるぞ。ナギのほうは何だかニヤニヤしながら俺の方を見ている。……この先の展開を考えると、当事者でなかったら俺もあんな顔をしたのだろうか。いや、俺にはあんな意地の悪い顔は出来ない。せいぜい邪魔にならないように席を離れるぐらいだ。

「えー、ゴホン。興奮しているところ悪いんだがー」

「——だから私はやっぱり……。え？ あ、はいなんでしょうか!？」

ナギの棒読みの台詞に反応して、セラス嬢がようやく我に返る。

「あんたが熱弁を振るってくれた死神の正体がその冴島 鋼牙さん

だ

「え？」

セラス嬢の時間が止まった。色も抜けてモノクロになっている。

そして、ギギギギとさび付いたような音を立てながら首をこちらに向けてくる。

（あ、これは終わったな）

何が終わるのかは不明だが、俺の頭に何故かそんなセリフが浮かんだ。

そして時は動き出す。

目の前からセラス嬢が消えた。

[illegible]

そして次の瞬間、クロックアップも真つ青の速度で俺の胸倉を掴んで、まるでマシンガンの如く俺に問いかけてくるセラス嬢。

俺は、戦場では感じる事の無かった謎の恐怖を覚え、背中から冷や汗が出てくるのを自覚する。

「あ、ああ。お前達の予想通り、各軍に潜んだ『完全なる世界』の

尖兵を潰す目的で戦場を歩き回らせてもらった」

「そそそそれじゃああの死神様は全部貴方なので!？」

「……偽者が混じってない限りは全部俺だな。……あと、その『死神様』はやめてくれ。一応、アレには仮面ライダーっていう通称があつてだな」

「うわわわわわわ!! 聞いちゃった! 正式な名前聞いちゃった! じゃああれ、あの格好一つ一つにもちゃんと名前があるんですか!? 他にも別の姿になれるんですか!？」

「ま、まあそうだな……」

「あ!! そ、そうだ!! サ、サインを貰わなくちゃ!! ナギさんに会えるからと思って念のため余分に色紙を持ってきててよかった!!」

そう大声でいうと、どこからともなくサイン色紙とマジックペンを取り出すセラス嬢。……魔法って便利だな。

「サササササササイン下さいませんか!?!」

……どーしたもんだろうなあ。とりあえずペンと色紙を受け取った俺は少々頭を悩ます。

「……俺の本名とライダーの名前どっちがいい？」

「両方で!?!」

速攻で答えたよこの娘……。

「あ、セラスさん江つてのもお願いします」

……今更俺がいうのも何だが、これが決戦前の光景でいいのだろうか。

俺は今まで書いたことも無いサインを書きながら、周りで俺のこのを見て爆笑するメンバーを恨めしそうに見つめる事しか出来なかった。

「……来ましたよ！」

セラス嬢にサインを書いてから数十分。未だにセラス嬢からの質問攻めにあっている最中に、今まで無言だったアルが声を上げる。

その声に反応してメンバー全員が立ち上がり、緩んでいた空気が一気に引き締まる。

「帝国と連合からようやく引つ張り出せたか」

コレ幸いばかりにそれに答える俺。アルは今の今まで、タカミチ・ゼクトの双方から帝国・連合の主力艦隊の出撃の承諾の知らせを待っていたのだ。今、この場にいる戦力はあくまで各軍からの義勇兵やオスティアの保有する艦隊だ。

「ええ。……ですが正直な話、帝国の方はテオドラ皇女の進言で早々に準備は出来ていたようですが、連合側はおそらく間に合うかどうかといったところでしょね」

「それも仕方があるまい。どの道作戦は決行される予定だったのじや。今更、艦隊が増えたところでどうにもなるまい」

「えええええ！？ 変わりますよ！？ 連合と帝国の主力艦隊ですよ！？」

セラス嬢が大声で疑問の声をあげる。

「まあ、普通の作戦だったらそうだな」

そう、今回は普通の作戦ではないのだ。俺達は、未だに俺達『紅き翼』の今回の役割について説明されていないセラス嬢のために、今一度作戦の確認をすることにした。

「今回の作戦は単純明快。奴らの宮殿まで突っ込んで、そのまま中にいる連中を撃破。奴らがしようとしている『世界を崩壊させるための魔法』を食い止めることじゃ」

「ええええええ！？ それって作戦って言っんですか！？」

……普通は特攻と言うかもしれないな。

「それにアレ見てくださいよ！？ もう大地全部が敵ですよ！？ おまけになんか滅茶苦茶でつかいのもいますし！！」

セラス嬢の指差す先には、まるで天をも突かんばかりの大きさの召喚魔が数体。それこそ艦隊が相手にしなければならぬレベルの大きさだ。

「おう、だからチャンスは一回こっきりだな」

「ああ、途中で止まったらお仕舞いって奴だ」

「だからってそんな作戦！！」

セラス嬢は、無謀としかいえない作戦に納得がいかないようだった。

「私達も、ゆつくり攻めて行きたいのは山々なんですがね。残念な事に今回はタイムリミットがありましてね」

「タイムリミット？」

「そうです。具体的には分かりませんが、どうやら敵さんは世界を滅ぼすための魔法を発動させるようでして、流石にこれ以上時間をかけるわけにも行きませんので仕方が無いでしょう」

そう、今はもうすでにカウントダウンが始まってしまっている状態なのだ。帝国と連合の説得に時間がかってしまったので余計に時間は無い。

「……わかりました。そこまで言うならば私も言う事はありません。……それで？ 私の役目は一体なんですか？ ……正直な話、貴方達と比べてしまうと実力はだいぶ落ちてしまうのですが」

「それは俺が説明する」

そう言うて俺はセラス嬢の前に立つ。

「さつきも言った通り、ここから宮殿まで一点突破して宮殿に行くわけだが、そこまでの道を俺が切り開く。他のメンバーはなるべく温存して敵の本陣まで行ってもらいたいからだ。そしてセラス嬢には宮殿まで他のメンバーを魔法障壁での防御をお願いしたい。宮殿にたどり着いたら、俺はそのまま宮殿外部の入り口で、敵が宮殿内になだれ込み内部の敵との挟み撃ちになるのを防ぐために防衛に当たる。セラス嬢はその後、ここにおいてあるポータルを目印に魔道具を使って退避してもらう。……以上が作戦の全てだ」

「……待ってくださいよ」

「どうした。何か質問が――」

「質問かじゃありませんよ！！ なんですか！？ 貴方は死ぬつもりなんですか！？ 敵の中心でたった一人で孤立して！！」

セラス嬢は叫ぶ。

「無事でいられるわけじゃないですか……！！ そのくせに。私一人だけ逃がす手はずは整えてるなんて……。そんなのっておかしいじゃないですか！！」

セラス嬢の声は震えていた。手は蒼白になるまで握り締められており、うっすらと血すら滲んでいる。彼女は悔しいのだろう。目の前にいる人間の死を分かっているながらも止められない自分を。そして何よりも、己の死を天秤にかけることが出来無い不甲斐無さに。

俺は静かにセラス嬢の肩に手を置いた。彼女は俯いた顔を上げ、俺の顔を見つめる。

「俺はこんなところで死んでやるつもりはない」

「でもっ……!!」

「俺はお前達が創っていくであろう未来を見てみたい。俺達の次の世代が笑って暮らす世界を見届けたい。……それまで俺はこの世界に命を還してやるわけにはいかない」

俺は身を翻し、敵で埋め尽くされた大地を望む崖の切っ先に立った。

そう、俺はまだ死んでやるわけにはいかないんだ。

魔戒騎士は己の守り者の為に戦う……。

たとえ偽りの魔戒騎士でも。たとえ偽りの牙狼の称号だとしても

……！

俺は叫ぶ。戦場に轟くように、世界に響き渡るように

「聞け！！この戦場にいる全ての命ある者達よ！！」

魔法は一切使っていない。使っていないはずなのだが、その声は戦場に響くどんな音も掻き分け、戦場に立つ全ての者の耳に届いた。戦場においてありえない光景。全てが静まり返るという、時が止まってしまったかのようなその光景の中、まるで冴島 鋼牙という存在だけがこの世界で命を持っている、そんな光景だ。

そして、鋼牙はその静寂を切り裂くかのように言葉を紡ぐ。

己の全てを言葉に乗せて。

「我が名は牙狼！！黄金騎士だ！！」

S I D E 鋼牙 O U T

戦場に一人の男の咆哮が響き渡る。

男の言葉の意味を理解できたものは誰一人として存在しない。しかし、その男の言葉にあるものは希望を抱き、あるものは恐怖を抱いた。

そして、その声の主である冴島 鋼牙は手に握った魔戒剣で天空を切り裂いた。

天は裂け、そこからは眩い光が鋼牙に降り注ぐ。

そしてその光の中から、まるで髑髏のような顔をした天使達が黄金に輝く鎧のパーツを持ち、次々に鋼牙へとその鎧を身に着けさせてゆく。

そして最後に猛々しい狼の兜を被せると、鋼牙の背中に漆黒に黄金の紋様の入ったマントが風にたなびきながら出現する。

この光景を初めて目にしたセラスは目の前で起こった出来事に絶句した。そして心の中で、目の前にいる男が、本当に自分と同じ人間であるのか分からなくなった。それほどまでに、セラスにとって目の前に光景は神々しく映ったのだ。

「……今から突撃を開始する。全員俺の後ろを全力で着いて来るんだ」

そう言つて鋼牙は一枚のカードを取り出す。

「おお、そいつを今使うのか!!」

ナギの言葉に鋼牙はコクリと頷く。

鋼牙が手にしているのは、ナギとの仮契約によつて手に入れたカード。アーティファクトの名は『英霊の記憶』。読み仮名は魔戒文字で書かれており鋼牙にしか読めない。

その能力は『英雄の記憶から力を召喚する』こと。

「……アデアット!」

鋼牙のその言葉に反応しカードが光の粒子になる。そして、魔戒剣の変化した牙狼剣に吸い込まれるように消えていく。

外見には何の変化も見られないが、これが鋼牙のアーティファクト『英霊の記憶』である。

そして鋼牙は、アーティファクトと融合した牙狼剣を構えると、目の前の空間に横に三度、縦に一度、まるで漢字の王という字に似た紋様を描くと、それを囲むように円を描く。

剣の切っ先は光の軌跡を描き空中に紋様を描いていく。そしてその紋様が出来上がると、鋼牙は思い切り剣を振るい、紋様を斜めに切り裂く。

刹那、眩い光がナギ達の視界を覆つ。

誰一人として目を瞑るものはいなかった。例外なく目の前の光景に目を奪われ、瞬きをも忘れていたからだ。

目の前には漆黒のマントをたなびかせた黄金騎士が、それと同じくらい眩い黄金の輝きを放つ鎧馬に跨り、手には巨大な斬馬刀を携え戦場を見据えていたからである。

「……綺麗」

セラスは誰に言うわけでもなくそう呟いた。まるで神話や御伽噺の光景を目にしているような感覚に、そう呟かずにはいられなかったのだ。

「そついや、その格好で戦う姿を見るのは初めてだな」

ラカンはい出ししたようにそう言う。

「……牙狼というのは俺達の世界では、英雄のそのまた上の雲の上の存在だからな。おいそれと姿を見れるものじゃない」

まるで神棚を拝むかのように、牙狼の後姿に手を合わせる詠春。

「ということは、これが鋼牙の全力を見る初めての機会って事になるのか？」

「といっても、すぐに別行動ですけどね」

「全く惜しいのう」

相変わらず暢気な発言の多い『紅い翼』メンバー達だが、一方で

セラスは目の前に現れた黄金騎士を前に、もしかして自分とはとんでもない人にサインを強請ってしまったのではないかと、今更ながらに縮み上がってしまった。

「……冗談はそこまでだ。全員突撃の準備を」

鋼牙の声に、『紅き翼』のメンバーは「応っ！」と答えるとそれぞれ得物を構える。

「嬢ちゃんはこっちだ」

「え？ きゃっ！？」

何が何だか分からないうちに、ラカンに抱きかかえられるセラス。

「俺が抱えて走るからよ。嬢ちゃんは魔法障壁の方に集中してくれや」

「は、はい」

一瞬、抗議の声を上げようとするが、ラカンの真面目な声に、遂に今から決戦が始まるんだと改めて思い、自分の頬を両の手でパシッと叩き気合を入れるセラス。

「アル、混成部隊に連絡を」

「了解。それで、内容はどうしますか？」

「
” 大地が割れたら決戦の始まりだ” と伝えてくれ」

S I D E ? ? ?

我々は信じられない光景を目にしている。

目の前に広がる無数の敵。召喚魔や自動人形、それにおおよそ考えられる全ての魔物達がひしめく、最早それ自体が一つの生き物だと思わんばかりの一つの大きな”うねり”

飲み込まれれば、まるで大海に漂う木っ端の如くいと容易く飲み込まれてしまうであろう、そんな巨大な波の中に、光り輝く何かが迫っていくのだ。

遠視の魔法でよくよく見れば、それは黄金の馬に跨った、これまで黄金の鎧を纏い、その手には巨大な斬馬刀を携えた一人の騎士。そしてその後ろには、あの有名な『紅き翼』の面々と、その中の一人に抱きかかえられながら魔法障壁を張る、アリアドネー魔法騎士団リーダーのセラス隊長。

無謀

普通ならばその二文字の後、

死

の一文字だけが浮かんでくるのだろう。

しかし、今の私。いや、私を含む混成部隊の面々の胸中にそのような言葉は無いだろう。ただただ、目の前に映る光景を見守ってい

るのだ。

そして私達の目にした光景。

それはまるでモーセが奇跡を起こした光景のようだった。

そうその光景を気の利いた言葉で表すとしたら――

「大地が……真つ二つに……割れていく」

奇しくもその一言と、その後指揮官によって伝えられる決戦開始の狼煙は同じものとなったのだった。

S I D E ? ? ? O U T

轟天に跨った鋼牙、いや今は牙狼と言ったほうが良いだろう。轟天に跨った牙狼はまさしく黄金の風の如く崖から駆け下りると、敵の大群へと一直線に突撃していった。

敵の方も少々の戸惑いはあったものの、自分達の突っ込んでくる得体の知れない存在を黙って放置するような愚かなことはしない。向かってくる牙狼を迎撃すべく、考えうるありとあらゆる遠距離攻

撃をまるで雨霰のごとく牙狼に撃ち放っていく。

爆音が戦場に響き、砂煙が視界を遮る。

『完全なる世界』の兵達は思った。幾ら高名な騎士や魔法使いであつても、あの攻撃からは逃れるわけは無いと。舞い上がる砂埃と煙を前にそう思った、いや思いたかった。

何故断言できないか？ それは未だに自分達を取り巻いている、死という名の恐怖がベツタリと背中に張り付いたまま離れようとなないからだった。

ゆえに最前線の兵達は、未だ晴れぬ砂煙目掛け攻撃の手を止めようとはしない。

ゆえに気がつかない。

その死を運ぶ黄金の風が、ほんの目の前まで迫っている事に。

おそらくここで近接戦闘に体勢を変えたのなら、戦局は違っていたかもしれないしそうでないかもしれない。

一瞬の出来事だった。

砂煙を切り裂いて、巨大な斬馬刀が前線にいた兵を数十人まとめて二分割の肉片に変えたかと思うと、そこから黄金の鎧馬が前足の蹄で敵の頭を踏み潰しながら道を開いていく。

牙狼は瞬く間に周囲の敵を切り伏せながら文字通り道を切り開いていく。敵方の方も、数の有利さで回りから押しつぶそうとするも近づく傍から切り払われる上に、驚異的な速度で進軍していくので後方になればなるほど対応に遅れるうえ密集陣形なので下手をすれば味方を巻き添えにするので迂闊に手を出せずにいた。そもそも、こんな密集している中で単機で特攻し、更にそれを成功させるなどと誰も考えるはずがなかったので仕方が無いことだろう。

牙狼達の後ろには『紅き翼』の面々は魔法障壁に加え認識阻害の魔法を使って追走している。例え、認識阻害の魔法を使っていたとしても、ここまで存在を隠しているのは牙狼のインパクトが強く、完全にそちらに注意がいつてる為だろう。先ほどの名乗りも実はそれが狙いだったりする。

そして更に後方では、味方側の混成部隊が戦闘を開始したらしく激しい怒号が響いてくる。これで更に『紅き翼』達の注意はそらされたであろう。

牙狼の方も更に加速し、体には烈火炎装の緑の炎を纏わせながら敵陣を切り裂き、一直線に墓守の宮殿の入り口へと突き進むのだった。

10： 戦友

SIDE 鋼牙

握り締めた剣から、肉を絶つ鈍い感触が伝わってくる。しかしそれも一瞬の事。その一瞬を無限に繰り返し、身に纏った炎で焼き尽くし、俺は無数の屍の上を駆け抜ける。

目の前に広がるのは人の姿をしたものから獣、果ては命の無い機械達。

無数の怒号が耳を劈く。全方位から殺気を浴びせ掛けられる。俺は後ろから追従してきているだろう仲間達のために、ただただ道を切り開くだけ。

そう、俺の今していることは、これから彼らがやろうとしていることに比べたら微々たる事。俺がここで倒れたとしても、彼らだけは何としても宮殿の中まで送り届けなくてはいけない。

宮殿まではもう僅か、ほんの目と鼻の先だ。敵からの攻撃もそれに比例しどんどん苛烈になっていくのが身を持って分かる。

背後に仲間達が追従してきている事すら確認する事が出来ないほど、四方八方からの敵の攻撃が容赦なく体に降り注ぐ。しかし、魔法の類はこちらの世界に来た際に、本来のソウルメタルの能力と入れ替える形で付与させた魔力拡散能力のおかげで、その大半が無効化させられており、物理攻撃の方も接近してくる敵は一人残らず叩き斬る上に、轟天の速度も相まって大半が回避出来、ダメージと言

えるダメージを負うには至っていない。

俺は手にした牙狼斬馬剣に緑の炎を纏わせ、それを思い切り振るう。魔導火を纏った斬撃は、剣先に触れたものを塵すら残さず焼き尽くし、剣圧だけで周囲の敵を切り刻む。

剣に触れた敵達が、俺の体に触れた敵達が。そのまま緑の炎に包まれ塵も残して燃え尽きていく。駆け抜ける旋風が、戦場を包み込むこの空間が。塵になって行った者達をそのまま置き去りにしていく。塵になったものを振り返る暇を与えない。

戦場は戦わぬ者に、散っていった者に、この上なく無常だ。

「轟天ッ！！」

俺がそう叫ぶと、轟天はそれに答えるように短く鳴くと、四肢に力を込め大きく跳躍。そのまま、敵を押しつぶしながら着地する。すると、その衝撃が空気を震わせ、さながら力を持ったかのように周囲の敵を吹き飛ばしていく。同時に轟天の蹄の音で、俺の手にした牙狼斬馬剣は更に巨大な牙狼斬馬剣に姿を変える。その大きさは自分の背丈のゆうに倍はあるだろう。それでもその重量は羽毛よりも更に軽い。これが人の心に反応する金属・ソウルメタルのなせる業である。加えて自分の意思で数トンまで重くすることも可能なので、切りつける際には瞬間的に威力を上げる事も出来る。無論、元々の切れ味も言うまでも無い。

轟天の跳躍で一気に入り口までたどり着くと、そのまま俺は180度向きを変え入り口に背をむける。それと同時に、俺の切り開いてきた道から認識障害を解除した『紅き翼』のメンバー達が俺の横を走り抜けていく。

すれ違い様にナギと視線が合ったが、互いに何も言わずにその姿は背後の宮殿の中へと消えていった。あいつらの事だ。きつとやつてくれるだろう。ならば自分のやるべき事は一つだけだ。

目の前では無数の敵が切り開いてきた道をも埋め尽くし、こちらを牽制するかのように距離をとりながら武器を構えている。

「悪いが、もう少しばかり付き合ってもらおうか」

俺は轟天に跨ったまま、視線を埋め尽くす敵の大軍に大牙狼斬馬剣を向ける。

だがそれにしてもこの数は些か……いや、些かどころではなく多い。流石にこの数相手に強がってはいられない。本物の牙狼も同じような事をしたことがあるが、あちらと比べて数の方はこちらの方が圧倒的に多い。もっとも、あちらの場合は敵を無限に召喚するトークンがあつたのだが。それでもトータルで見たら難易度は同程度だろうか。

兎に角、今は持てる手段を全て使ってここからの敵の流入を阻止しなくてはいけない。幸いナギから貰ったアーティファクトのおかげで出来る事は多い。

「とりあえず、頭数を少しばかり増やさせてもらう……！」

俺は頭の中にイメージを描きながら、手にした大牙狼斬馬剣に力を込める。

イメージしたのは2体の異なる竜。さながら天と地のような両極

端の、牙狼の世界の竜を頭に思い描く。心の絵筆は、その姿を現実という名のキャンバスに余す事無く描いていく。

大牙狼斬馬剣は眩い光に包まれ、次第にその光は俺の両隣に粒子となり分かれて行き、この世に新たな力を呼び込んだ。

『GUOOOOOOOOOOOOOOOO!!!!!!!!!』

空に現れた何かによって日が遮られ、大地に巨大な影が落とされる。

突如現れたそれに、敵達は空に目を移す。

そこにはこの世界における金魚型飛行魚に非常に似通った生き物が一匹浮かんでいた。しかしそれは金魚型飛行魚に比べ遥かに巨大であり、先ほどの咆哮は勿論の事、雰囲気も比べるべくもなく全くの別のものと分かるだろう。

魔界竜。

その名の如く魔界に生息する竜のことなのだが、無論こちらの世界には存在しない。詳細は不明だが、強大な戦闘能力と移動手段にも利用されるほどの航行速度を有した竜であることは間違いない。

そして、俺を挟んで反対側。そこには竜の名を冠した戦闘機械が竜のような長い首を俺に向けている。

『久しぶりだな魔戒騎士よ』

「グラウ竜よ。すまないが昔話をしている暇は無い。力を貸してく

れないか？」

グラウ竜。

それは昼夜問わずホラーの出現する紅蓮の森の奥深くにあり、ホラーを狩るためだけに生み出された存在。

四脚型の足の上に台形方の体、そしてその上部に竜のような長い首を持った、おおよそ普通の生き物には見られない機械の体を持った竜だ。

『言わずもがな。今の我は、我であって我で無し。この戦場にてお主に力を貸し与えるために生まれし存在よ。本来の我がホラーを狩るだけの存在だったのと同じように、今の我もこの戦場にて力を振るうのが存在の証』

そういつてグラウ竜は体から歯車の回るギシギシという音を響かせ、体の背部から一對の大きな翼、そして両側面からは長いアームを出し戦闘体制に入る。

「礼を言う」

これで大分戦局は変わる。少なくとも、ここを守りきる時間を稼ぐくらいは出来るだろう。

あとは仲間たちを信じるだけ。魔法世界の破壊を食い止めてくれるのを祈るだけだ。

俺の物語の主人公は俺だ。だがこの世界の主人公は俺じゃない。俺のすべき事は、この世界の主人公達の後ろをほんの少し押してや

る事。

物語のエンディングは主人公が世界を救ってハッピーエンドと決まっているものだ。

なあ、そうだろう？ ナギよ。

SIDE 鋼牙 OUT

SIDE ???

私の中の天使が囁く、「一刻も早く手を貸しに赴きなさい」と。

私の中の悪魔が囁く、「一刻も早くここから立ち去りなさい」と。

私は宮殿の入り口の影で、外の様子を伺いながら一步も動けずいた。『紅き翼』の皆さんを防御しながらここまで何とかたどり着いたのですが、皆さんは私を地面に降ろすと「気をつけて帰れよ！」

と言って早々に奥へと進んでいってしまいました。

残された私はそのまま外にいる鋼牙さんの応援に向かおうとしたのですが、外の光景を目にした瞬間、足はまるで鉛を付けたかのようになり、私の動きは止まってしまいました。

来る時は障壁を張るのに必死で気にする余裕が無かったのですが、眼前には今まで見たことの無い密度の壁とも呼べる敵。

炎、氷、雷、暴風、刃……。考えられるあらゆる魔法と物理的な攻撃の全てが降り注ぐ最悪の戦場。今まで私の経験してきた戦いというものが見戯に見えてくるほどの激しさの攻撃の嵐。

そんな嵐の中を駆け抜ける黄金騎士がいた。

群がる敵を切り払い、緑の炎で焼き尽くし、降り注ぐ魔法の一切を物ともしない。そして、彼の近くでは超怒級の飛行型金魚がリング状の光線で敵を吹き飛ばし、竜の顔をしたような機械が鋼鉄製のアームで敵を薙ぎ払っていく。

コレは映画や漫画のようなフィクションの光景なんかではない。彼らは本当にあの大軍の中で戦っているのだ。尽きる事の無い敵の中で、ナギさん達のために戦っているんだ。彼らを信じて戦っているんだ。世界のために戦っているんだ。

私は何をしている？

ここで何をしている？

見ているだけか？

惚けているだけか？

違うだろう？

私は何のためにここに来た？

私は……

「私は……」

懐に入っている瞬間転移用のガイドポータルに手を伸ばす。

「私は！！」

私は手にしたガイドポータルを思い切り握りつぶす。粉々になったガイドポータルを投げ捨てると、外に飛び出す。

外は空気が震えており、肌がピリピリとひりついた。耳を劈く爆音が絶え間無く響き、コンマ単位で命が減っていく場所。

「援護します鋼牙さん！！」

飛び出した私は、あらん限りの声を振り絞りそう叫ぶと、そのまま呪文の詠唱を開始する。

私はアリアドネー魔法騎士団。この世界に危機あるかぎり、それが立ち向かう理由になる。

そして生きて帰って自慢してやろう。私はこんなに凄い人と一緒

に戦い抜いたんだって。

そんな両極端な理由のため私は戦う。だから生きて帰るんだ。私も死なないし、鋼牙さんだってきっと死なない。

私の放った爆炎が敵を包み込む。敵の注意がこちらにも向いてくる。

しかし、その一瞬について鋼牙さんがその敵達を一刀で斬り捨てていく。

鋼牙さんと一瞬だけ視線が交差する。

まるで、背景が灰色になり全てがスローになったような錯覚を覚えた。

鋼牙さんは何もいう事なく、静かに私の顔を見て頷いてくれた。

それだけで、私は十分だった。

戦場に色が戻る。

戦いはまだ長い

S
I
D
E

セ
ラ
ス

O
U
T

11： 烈火（前書き）

11： 烈火

紅き翼の面々は墓守の宮殿の内部を駆けていた。

宮殿の内部は真新しく、そう遠くない昔に何らかの改修が行われた後が目立つ。それに伴ってか、宮殿内部は侵入者用の物騒極まりない罠で埋め尽くされており、容赦なく彼らに襲い掛かってきていた。

が、そんな数多くの罠を持つてしても、彼らの進軍を阻むには役者不足としか言いようの無い成果しか上げられずに、彼らの通った跡で沈黙するしかなかった。

具体的には、アルの重力魔法で宙に浮いたまま移動しつつ、襲ってくるトラップをそのまま反重力で弾き飛ばし進んでいるのだ。

そしてナギとラカンを前衛で、殿を詠春とゼクトが守りつつも襲い掛かってくる敵兵達を次々に打ち倒しながら、少しも速度を緩める事無く宮殿の深奥を目指す。

迷宮とは異なり、ほぼ一直線とも言って良い内部構造だが、それゆえに通る道も一つしかなく迎撃も徹底的に集中されていた。

「アル！！ あとどれ位だ！！」

通路を埋め尽くす敵に雷を浴びせながらナギはアルに大声で問いかける。

「もう少しです！　おそらくコレを越えれば……」

アルのその言葉の続きを示すかのように、先行していたラカンが手にした大剣で、大量の敵ごと扉を吹き飛ばす。

そこは今まで突破してきた扉とは異なり、奥には大きな空間が広がっていた。

明らかに概観からはありえない広さ、ゆづに闘技場一つは楽に収まってしまっただろう。

「ここにラスボスと黄昏の姫御子がいるんだな……！」

「間違いありません。ここがこの神殿でもっとも魔力の集中している場所です！」

全員にかけている重力魔法を解除しながら、アルがナギの言葉に答える。

アルのその言葉を聞かずとも、メンバー全員がこの場所に満ちる禍々しいまでの魔力の渦に息苦しさを覚えずにはいらなかった。

そんな中で、殿を務めていた詠春は自分の目に移る奇妙な事柄を口にする。

「……おかしいぞ。背後からの追撃が急に無くなった」

詠春が夕風を構えながら、今しがた通ってきた扉を見据える。その視線の先の通路では追撃どころか、倒してきた敵の骸すらも消え

失せており、先ほどの戦闘がまるで無かったかのようだ。

「簡単な事じゃ。ここまで来てしまえば、最早雑魚が足止めなどしても無意味なんじゃろって」

「ご明察です」

聞きなれない声が巨大な空間に響く。

「……っ!!」

詠春はその声に雷光の如く反応し、飛ぶ剣撃・斬空閃を声のした方向へと放つ。

だが、その斬撃は空中で一瞬だけ歪むとそのまま空気のように霧散する。

「おやおや、そちらの剣士さんは手が早い。人の話は最後まで聞くのが礼儀ですよ?」

空間の一部がグニヤリと歪む。

そこに現れたのは言わずもがな。フェイト・アーウェルンクスその人である。

「手前えが『完全なる世界』の親玉か!!」

「いえいえ、そんな大層なものではありません。私の名前はフェイト・アーウェンクス、ただの露払いにすぎません。我が『完全なる世界』の頂点に立つのはたった一人、偉大なる『造物主』ライフメーカーただ一

人」

フェイトは天を仰ぐように手を大きく広げ、まるで神を崇め奉る信者の如く名前を口にします。

「悪いが、相手が何だろうとここまで来ちまえばやるこたあ一つだけだ」

「……あんとその『造物主』ライフメーカーとやらを叩き斬って、この術式を止めるだけだ」

ラカンと詠春が剣を構えフェイトを睨み付ける。

「フフフフ……」

その二人を目にして、フェイトはまるで冗談を聞いているかのように口から笑みをこぼす。

「……何がおかしい？」

そんなフェイトの態度に怒りではなく、逆に奇妙さを感じ取ったのはゼクト。

「……最初に教えてあげましょう。貴方達は既に最初の一手で既にチェックメイト。詰んでしまっています。ここに来るべきなのは貴方達ではなく……。そう、今外で何万とも言える大軍を相手にしている黄金騎士であるべきでした」

フェイトのその言葉に、メンバーの全員が例外なく驚きを感じる。何故鋼牙の事を知っているのか。確かにあの戦場にいれば彼の強さ

は分かる。しかし、そもそも鋼牙が魔法世界において牙狼の姿で戦闘をするのは今回が実質初めてのことであり、その実力を事前に把握しておく事など不可能に近い。それが把握できたのだとすれば、それは戦場に現れていた仮面ライダーと牙狼がイコールの線で結ばれていなければそのような結論は出ない。

その事から導き出せる回答は一つ。このフェイトという男は鋼牙と面識があるという事だ。

「彼でしたら私を倒したでしょうが。さて、貴方達ではどうでしょうか？」

フェイトはそう言い放つと、笑みを崩さないままに凄まじいまでの魔力を放出する。

「くっ！？ これは……！？」

「きゃっつめ、ここの術式から溢れる余暇エネルギーを自分の魔力に転化しておる……！」

フェイトの体が膨大な魔力の影響で、まるで魔力の固まった結晶の如く眩い光を放つ。

「こいつぁ口だけじゃねえな……！！！」

ラカンの言う通り、単純な魔力量ならばフェイトは既にナギの持っているそれを遥かに上回りつつあった。

「へっ……！！ 上等だぜ！！ こうなりや速攻でやるっきゃねえ！！ みんな！！ 稲妻重力落とした！！！」

ナギの声で全員が武器を構える。

稲妻重力落とし。それは紅き翼の全員が仕掛ける連携攻撃の一つ。

その合図に合わせて、アルが呪文の詠唱を開始する。

「母なる星に逆らいし枷よ 全てを飲む込む暴虐の王よ 汝らを縛るものは無し 思うままに猛り狂え 重力崩壊”^{ブラックホール}”！！」

アルの詠唱した術式、それは彼の持つ最強の魔法にして最大の禁術。重力を操作し文字通りブラックホールを作り出す魔法である。無論、少しでも術の操作を誤れば相手だけではなく自分までも飲み込まれてしまう諸刃の剣。

術式の完成と同時に、フェイトのすぐ近くにまるで空間をそのまま削り取ったかのごとくポツカリと黒く小さな穴が開く。直径50cmほどのほんの小さな穴。これがアルの制御できる最大の大きさである。

「これは……！ ブラックホールですか……！」

フェイトは内心少しだけ驚いた。このブラックホールを生成し制御しようとしたものは星の数ほどいた。しかしその多くが、自身の作り出したブラックホールに飲み込まれこの世から姿を消した。飲み込まれる事の無かった者達も、その危険性から術式を完成させる事無くこの魔法の研究を諦めた。

ゆえにこの魔法の最大の特性を知るものは、使用者であるアル以外に知る事はない。

フェイトはすぐに己の異変に気がついた。あの黒球はまだ小さく吸い込む力も強くは無いが、それよりももっと厄介な性質を秘めていた。

「これはまさか！ 魔力まで吸い込んでいるというのか……！！」

そう。この魔法の最大の特徴は周囲から魔力まで吸い込んでしまうという事である。ゆえにこの魔法はもっぱら、敵を吸い込んでしまうという事よりも、敵の動きを極端に制限するというのが真骨頂なのである。

「続くぞ馬鹿弟子よ！！」

「おうよ師匠！！」

身動きの叶わなくなったフェイトに向けて、今度は師弟コンビが杖を向ける。

「“集え雷光 我らの敵は唯一つ 手を取り重なり万魔を穿て
一の千雷”！！」

その詠唱を終えた瞬間、フェイトを中心に取り囲むかのように球状の魔方阵が出現した。

「千の雷の超圧縮版だ！！ 喰らいやがれ！！」

ナギの叫びが引き金になったかのように、魔方阵から耳を劈く雷鳴と直視できない程の眩い光が溢れ出す。

この呪文は先ほどナギが言ったとおり、広域殲滅魔法である”千の雷”を、対象を一つに絞り威力を集中させる事によって、威力だけを見るならば数ある攻撃魔法の中でも最大級の攻撃力を得る事に成功したものの一つだ。しかし、その代償として術者二人がかりで出なければ制御できない事に加え、攻撃魔法としては極端に狭い射程に効果範囲、追尾能力も無く動かない敵に対してしか命中させることが出来ないという多くの致命的な欠点から、実践ではほぼ使用する機会の無い浪漫志向の魔法である。なのでナギ達は、アルの重力崩壊からの連携で利用価値を見出していた。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

フェイトは侮っていた。よもやここまでの魔法を使ってくるなど考えもしなかった。所詮一山幾らの魔法使い達だと思っていた。

(考えを改めなければいけないようです……)

紅き翼の最大のミス。それはこの時点で、一の千雷の魔力まで吸われない様に重力崩壊の魔法を解除してしまっていた事だろう。そのせいでフェイトにつながっていた魔力供給のライフラインが復活し、ギリギリのところまでフェイトを”一の千雷”から耐えさせていた。

だが紅き翼もそんな事は百も承知だった。

「悪いがこれで止めを刺させてもらっ」

「今宵の斬艦剣は血に飢えてるっ……てな!!」

ラカンと詠春が剣を構えて宙を舞う。ただし、詠春の手に握られ

ているのは愛刀の夕風ではなく、ラカンの手にする物と同じ、巨大な剣。ラカンのアーティファクトで呼び出した剣だ。

「喰らいやがれ!!」

「これが必殺の……!!」

「ダブル斬艦剣だ!!」

二人は思い切り横に剣を振りかぶる。

圧倒的な速度、質量。それが生み出すものは圧倒的な破壊力。

フェイトは魔法陣ごと思い切り吹き飛ばされ、広間の壁に叩きつけられる。

重力崩壊による魔力と体の捕縛、一の千雷による追撃、そして最後にダブル斬艦剣による止め。これが紅い翼必殺の稲妻重力落としである。

……実践での使用は初めてであったが。

しかしそれでも、その威力は最早言わずもがなである。ただの相手であつたらオーバーキルも良いところの酷いリンチだが、無常な事に今回の相手はただの相手ではすまない相手であった。

「おいおいマジかよ……」

ラカンは信じられないような目で、先ほど自分が吹き飛ばした相手を見る。

叩きつけられた壁面は大きく窪み、一部が瓦解している。本来だったら、高密度の電撃で跡形も無く蒸発してしまうはずなので、そもそも固体の状態を保っている事自体が異状であった。

ところが目の前の男は何なのだろうか？

右の腕が二の腕から下がなくなっではいるものの、他は体の所々が炭化している程度で、立ち上がっているではないか。

いや、体が炭化しているのも十分に重傷といえるのだが、本来はそんなレベルですむ魔法ではないのだ。

「ッ！？ みんな下だ！！」

ナギの声で、全員が反射的にその場から飛びのく。

すると足元から、紅き翼のメンバーを串刺しにしようと、巨大な石槍が床を突き破り生えてきたではないか。

「……ま……ただ……よ」

大ダメージを負って息も絶え絶えのフェイトは、消え入りそうな声でそう呟くと、小さな声で詠唱を続ける。

すると、生えてきた石槍からまるで枝……いや、根を伸ばすかのごとく次々に別の石槍が際限なく生えてゆき、ターゲットを追いかけて行く。

避けても避けても次々に、それこそ無限に生えて追いかけてくる

石槍。しかも、それは鼠算式に数を増やしてゆき、次第に回避する場所すら奪っていく。

「やべえぞナギ！！こいつ叩き壊す度にどんどん頑丈になってやがる！！」

向かってくる石槍を大剣で薙ぎ払っていたラカンだが、壊す度にその耐久性を増していく石槍に武器の方が根を上げ始める。それは詠春の方も同様らしくどんどん引き手になり始めていた。

ナギ達魔法使い組も、次第に魔法だけでは威力も詠唱速度も追いつかなくなってきたおり、まさしくジリ貧の状態になりつつあった。

そして遂に石槍がメンバーを捕らえた。

ラカンは腕を貫かれ武器を落とし、アルも貫かれはしないまでも次々に体を石槍が掠め体中を血で濡らしていた。

そして石槍は物理的な防御に乏しい魔法使い、取り分け厄介だと思われるナギに集中し始める。

「ナギ！！」

詠春がナギのフォローに回ろうと、向かってくる石槍を斬ったその刹那。

「ぐっ！？」

詠春の腹部に鋭い痛みが走った。

それは全くの奇襲。詠春の思考の裏からの襲撃だった。幾度も斬り飛ばされた石槍の進化とでも言えるだろうか。

なんと、斬り飛ばしたただの破片に成り下がったはずの石槍が、空中でさらに根を伸ばし詠春に襲い掛かったのだ。ここまで進化してしまった石槍に対して最早回避の手段など無いも同然だった。

あとは手負いの得物に一気に飛び掛るだけ。

詠春の脳裏に死が過ぎる。

（こんなところで俺は死ぬのか？）

そう、ここで死ぬかもしれない。

（何も出来ずに死んでいくのか？）

そう、何も出来ずに死んでいくかもしれない。

詠春の体に無数の石槍が襲い掛かった。

ここはどこだろう？

真っ白い　ただひたすらに真っ白い

俺は一体どうなった？

死んだのか？

ならばここはあの世なのか？

俺は何も出来ないまま死んでしまったのか？

全て終わってしまったのか？

「否、まだ終わってはいない」

あなたは誰だ？ここは一体どこなんだ？

「我は無数に存在する英霊のうちの一人。そしてこの場所はお前の心の内にある、お前の世界だ」

何故俺はここにいるんだ？

「お前は今、とある分岐の先に立っている。しかも一択と言っても良い選択肢を迫られて」

どういうことだ？

「お前に問う。ここでこのまま何もせずに朽ち果てるか？ それとも、更なる苦痛の果てに死に絶えるか？」

俺はどの道死ぬのか？

「なに、どの道を選んでも誰もお前を責めたりはしない。お前の選んだ選択肢だ。ならば苦しくない方が良いだろう」

一つだけ聞きたい。

「なんだ？」

苦痛の果てにある未来は、光り輝いているか？

「……ああ、何もせずに朽ちた未来よりは遙かにな」

ならば答えは決まっている。

俺はあいつと約束したんだ。俺達の次の世代が笑って暮らして
ける未来をつくろうと

「ならば託そう、守りし者よ。その剣に紅き炎を灯すが良い。そし
て……」

「息子を頼む」

無数の石槍が、紅い炎に包まれて塵と化していく。

詠春は腹から鮮血を迸らせながら、右手一本で夕風を振るう。

襲い掛かってくる石槍はその一振りで容易く塵と消える。

紅き翼のメンバーは知っていた。この炎は間違いない。色は違えど鋼牙の使う烈火炎装だと。

「みんな！！これから俺が道を切り開く！！」

そう叫んだ詠春は夕風を正眼に構える。

正直、刀を構えるだけで限界だった。この烈火炎装はそれほどまでに消費する。目が霞、手からは感覚がどんどん失われていく。まさに、己の命を削っているようだった。

（だが、その命で道を切り開けるのなら……！！）

紅い炎は更に輝きを増す。

「神鳴流……裏奥義……」

夕風に、魔力・気そして烈火炎装の紅い炎が集まり出す。そして、夕風を覆うかの如く光の刀身を形成し、巨大な刀に姿を変える。

「天魔覆滅の太刀!!」

光の刀は石の槍など物ともせず、全てを光の粒子に変えていく。根元から切られた石槍は、やがてその存在そのものを消滅させられて、一つ残らず消えていった。

天魔覆滅の太刀。それは自らの命を削り、対象を存在ごとこの世から消滅させる、神鳴流の奥義においてその存在そのものを秘匿させられている奥義の一つである。

石槍を消滅させた詠春の手から、光を失った夕凧が音を立てて落ちる。同時に詠春も力なくその場に膝を着いて倒れこんだ。

（あの男までは届かなかったか……）

フェイトに届いていれば、あの男ごと消滅できたかもしれない。そう頭に過ぎったが、今更意味の無い事だと考えるのをやめた。

視線を上げると、ナギが必死な顔で走ってくるのが見えた。

「詠春!!」

「く、来るなナギ……!」

駆け寄ろうとしたナギを、詠春が止める。

「俺よりも……あいつを……あの男を倒すんだ」

詠春はそう言って、自分と同じく満身創痍のフェイトを指差す。

「せつかくのチャンスを……逃すんじゃない……」

詠春は内臓を傷つけられた事による吐血で咳き込む。真っ赤な血が地面を染める。

「ああ……分かった！！ だから、全部終わるまでくたばるんじゃないぞ！！」

ナギは詠春の意志を汲み、杖を構えてフェイトに向けて大きく跳躍する。

その後姿を見つめて、詠春は静かに笑い

その瞳を閉じた

11： 烈火（後書き）

12： 魔麟

宮殿内での戦闘が佳境を迎えようとしていたのと同時刻。宮殿外での戦闘の方も、一つの山場を迎えようとしていた。

『完全なる世界』の軍勢は焦っていた。ほんの片手の指でも足りないほどの戦力なのにも関わらず、宮殿の入り口を陣取り、かつ自軍の兵を瞬く間にその数を奪っていく黄金の騎士達に。

加えて、外からの攻撃もまた苛烈であり、艦隊や鬼神兵などの巨大戦力達も徐々にその数を減らしつつあった。

しかし、焦っているのは何も『完全なる世界』の陣営のみではなかった。同じように連合軍の側も焦りの隠せない状況にあった。

艦隊は既に全体の6割が航行不能に陥っており、兵の方も敵の圧倒的物量の前に魔力と体力、そして何よりも心が折れそうになっていた。しかしそれでも、宮殿内での最重要任務に赴いている『紅き翼』と、最前線で奮闘を続ける黄金騎士の姿に鼓舞され、ギリギリの精神力で何とか戦いを続けていた。

この苛烈ながらも膠着した状況を打破すべく、遂に『完全なる世界』陣営は奥の手を戦線に投入する事になる。

突如虚空に、巨大な魔力のうねりを伴い、巨大な召喚陣が出現した。その巨大さは尋常なものではなく、それに比例し呼び出される者の巨大さをも物語っている。

そしてそれは、連合軍に警戒させる暇さえも与えずに攻撃を開始

召喚陣から突如として、山が一つ現れたのではないかと思つてしまふほどの巨大な何かが、まるでゴミを払うかのごとく連合軍の戦艦をその腕で叩き落す。

そしてその咆哮は大気を震わせ、もはや物理的な兵器の様に、兵達を吹き飛ばしていく。

セラスは思わず戦いの手を止め、いきなり現れた反則級の敵に嫌な汗をかかずにはいられなかつた。目測でおよそ700mは越えよつかと言つほどの大質量。あれはまさしく山であつた。

セラスは迫り来る敵を剣で切り裂き、魔法で焼き尽くし、グラウ竜や魔界竜との連携で何とかこの場を乗り切っていた。が、アレばかりは何をどうしても自分の力でどうにかできるものではなかった。それ以前に、セラスは既に体力・魔力共に限界近くまで消費しており、もはや満身創痍といっても差し支えの無いような状態であった。

171

だが、新たな手札を切ったのは『完全なる世界』だけではなかった。

『隊長！！ヘラス帝国の主力艦隊が到着しました！！』

セラスの耳につけられた通信機から部下の叫ぶ声が響いてくる。それと同時に、連合軍側の空から無数の光が『完全なる世界』の戦艦や鬼神兵を貫き、戦場に更なる爆音を轟かせていった。

「ぬははははは！！戦いはまだまだこれからなのじゃ！！」

「姫様。舌噛みますから座っててください！！」

ヘラス帝国戦略艦隊旗艦ゲルベンシュダットのブリッジでテオドラは高らかに笑い声を響かせた。傍に控えるタカミチとこの艦の副長は必死に大人しくさせようと頑張っている。

「艦長！！次の主砲の発射時間までどれくらいかかりますか！？」

「うーむ、あのドデカイのに思いつきりブチかましちまったから、最低でも3分は無理だな」

タカミチの声に、無精髭を生やした艦長は唸りながらそう答える。一応、この艦隊の総合司令官的な役割を持った人物なのだが、その威厳はあまり無い。

「いやあ、まさかあんなデッカイ化けモンが出張ってきてるなんてなあ。おっさんマジビツクリ」

艦長はやる気のなさそうな声でそう言うとハッハッハと笑う。

タカミチはこの人物に不安以外のものを覚えずにはいらなかった。

「ま、あんだだけデカイ上に雑魚の数も多いんだから、撃ちまくってりゃ時間稼げるでしょ」

「というわけじゃ！！ 全艦出し惜しみせずに副砲・ミサイル・機雷、何でもかんでもとりあえず敵陣にぶち込むのじゃ！！」

テオドラの号令に、全艦から通信で『イエス・マム！！』と非常に元気良く返事が返ってきたのを聞いて、タカミチは頭痛を覚えずにはいらなかった。

ヘラス帝国の主力艦隊の参戦により、戦場はさらに混沌と化した。まるで嵐のように艦隊から降り注ぐ弾幕に兵は勿論の事、戦艦や鬼

神兵も次々に落とされていく。しかし、それと同時に『完全なる世界』の巨大召喚魔も次々に戦艦を叩き落し、遂には連合側の増援を抜きにした艦隊の全てが航行不能に陥ってしまった。

ゆえに、否応にも無くヘラス帝国艦隊と巨大召喚魔、そしてその他同士の戦いという図式が出来上がってしまった。

だがそれも仕方のないことであった。白兵戦であの召喚魔をどうにかできるようなものではないのだから。

そして、ヘラス帝国の砲撃によりその数を大幅に減らす事になった『完全なる世界』の兵達を突破し、遂に連合の兵たちが宮殿前の牙狼・セラスの二人に合流する事に成功した。

「大丈夫ですか！！隊長！！」

突破してきた小隊の中の一人がセラスに駆け寄っていく。セラスの部下の一人でアリアドネーの人間である。

「問題ない！ それよりも戦局は！？」

口では強気で返すものの、既にセラスは血濡れの体で立っているのが不思議なぐらいの状態だ。

「はい！ 現在、帝国からの援軍でこちらが有利になっています。が、初期艦隊は全滅、死傷者とその救護に当たってるものを含め、兵の役4割が戦闘不能です……。加えて、やはりあの巨大な召喚魔の対応に兵力を削がれつつある状況です」

「艦の主砲は!!」

「チャージまで数分。それでもあの召喚魔を倒せるかと言われれば……」

女性兵士は声と視線を地面に落とす。初撃の一発でも対して効き目があったようには思えなかったのだ。おそらく、もう一度撃つたところで変わりはないだろう。

「くっ……! 宮殿内で術式発動を止められればこちらの勝ちだが、あんなのに攻め込まれたら術式関係無しに都市の一つや二つは容易く落とされてしまう……!!」

そう、たとえ術式の発動を阻止したとしても、敵がそのまま武力行使で攻め込んでこない保障は無い。この場で出来る限りの戦力を削ぎとっておかなければならないのだ。

「あれを何とかすれば、どうにかなるか？」

その声にセラスと女性兵士は後ろを振り向く。

そこには返り血を浴びてなお輝きを失わない黄金の騎士が、同じく光輝く黄金の鎧馬に跨りこちらを見据えていた。

初めて身近でこの黄金騎士を見た女性兵士は、多分に漏れずその姿に息を呑んだ。

「……あれを倒した場合、戦局はどうなる？」

セラスは牙狼を見て固まっている自分の部下に尋ねる。

「え？あ！？は、はい！！あの召喚魔を無力化できれば、敵側に更なる隠し球が存在しない限り、こちらの勝利は確定的と言えます！！！」

『紅き翼』の皆さんが成功なさればですけど。そう付け加えて女性兵士は緊張したように背筋を伸ばして敬礼する。

「鋼牙さん……、あれを何とか出来るのですか」

不安そうな声でセラスが鋼牙に尋ねる。

鋼牙は召喚魔を見やる。

相当の距離があるにもかかわらず、とてつもない威圧感を出しこちらを圧倒してくる。

「……何とかしなくては、いけないだろう」

黄金騎士は静かに剣を構え直し、そう呟いた。

SIDE 鋼牙

体が鉛のように重い。

この牙狼の力は確かに絶大だ。しかし弱点が皆無なわけではない。そのひとつに、俺自身の体力の枯渇が挙げられる。

残念ながら、俺の体力は常人よりも遥かに多いとはいえ無限ではない。戦闘が始まってからおおよそ1時間も経過してはいないだろうが、その密度が通常の戦闘と桁違いだった。例えるならば、20mのシャトルランの速度でフルマラソンを走るようなものだと思う。良い。気を緩める暇なんてあるはずも無い。

無論、敵からの攻撃のダメージも決してゼロではない。魔法攻撃は弱いものならば黙っていても無効化できるが、強力なものだったならば意識をそちらに向けて防御しなければならぬ。この鎧の特殊能力はあくまで魔力を霧散させ散らすことであり、無効化させるのとは厳密には違う。霧散させることの出来る魔力は鎧のみの防御ならば限度があるものの、剣で魔法ごと切り裂いたならば、それは攻撃力に比例しより強力な魔法をも無力化できるようになる。逆に言ってしまうと、意識外からの強力な魔法攻撃はダメージは普通に通ってしまうのだ。

しかしそれよりも更に恐ろしいのは、純粹に強力な物理攻撃に他ならなかった。何が恐ろしいのかと言うと、あまりに強い攻撃を貰ってしまえば、この鎧は装備を解除させられ送還させられてしまうという事だ。この戦場の真っ只中で素の状態になるのは流石に御免被りたかった。それでも、鎧を解除させられるほどの強力な攻撃は何とか回避しており、事なきを得ているのだが。

俺は遙か眼前にそびえる巨大な召喚魔を見上げる。確かに強そう
でデカイ。

だが、それだけだ。

俺の中にある冴島鋼牙の記憶には同じく巨大で、更に恐ろしい敵
と戦った記憶がある。

あれと比べてしまったら、あんなものはデカイだけの張子の虎で
ある。

しかし、そんな張子の虎とさえど、今の俺の状態からすればギリ
ギリだ。体力的にチャンスは2度はない。

だが、あんなのを倒すだけでこの戦いの雌雄が決するといふのな
らば、自分のやるべき事は唯一つしかないだろう。

「セラス嬢、この場は任せた。俺はあのデカイのの首を取りに行っ
てくる」

「……そう言うのだと思ってました。……止めもしませんし心配も
しません。でも、お氣をつけて」

そう言っただけ俺に敬礼をするセラス嬢。

「それに、貴方にはまだ色々頼みたい事が沢山ありますしね」

笑顔でウィンクするセラス嬢に最大級の不安を覚えるが、俺は体
に残っている氣力を振り絞り、轟天の腹を蹴り戦場を走り出す。

あのデカイのを倒すだけならば難しい事ではない。が、何度も言うように問題は自分の残りの体力だ。今更言うのもなんだが、自分が使っているアーティファクト『英霊の記憶』は体力を大分食う。轟天・グラウ竜・魔界竜の三体を呼び出しているのでその消費量も結構なものだ。それを踏まえて考えると、三体を送還したとしてもこのアーティファクトで呼び出せるのはあと精々1つか2つ程度だろう。

俺は巨大召喚魔と戦闘を繰り返している帝国艦隊に目を向ける。

「少しばかり協力を仰ぐしかないな」

俺はそう呟くとアーティファクトの宿った大牙狼斬馬剣に念を込める。すると、それに反応して今迄空中で戦闘を繰り返していた魔界竜が地面すれすれに滑空しながらこちらに併走してきた。

俺は走る轟天の背に立ち、そのまま併走してくる魔界竜の背に飛び移る。

「戻れ轟天！！」

そしてすぐさま轟天を送還。轟天は光に包まれ瞬く間に戦場から姿を消す。

俺はそのまま魔界竜の背に乗ったまま、巨大召喚魔の元へと飛んでいく。

そして、魔界竜の航行速度もあって瞬く間に眼前には巨大召喚魔の足。間近で見て実感するが、これはやはり白兵戦を挑んでどうにかなるレベルの相手ではない。この足一本見るだけで、お釈迦様の

指を目の当たりにした孫悟空の気持ちだ。

「とはいえ、やるだけやって見ないとな……！」

俺は握り締めた大牙狼斬馬剣に更に力を込めると、魔界竜から思い切り跳躍し壁のような足に切りかかる。

思い切り剣を叩きつけると、手に伝わってくるのは生き物を切るような感触ではなく、何か岩や金属のような硬い何かを殴りつけたような鈍い感触。硬いとかいうレベルではない。幾らこの剣の切れ味が良くとも、この圧倒的質量差では精々紙で手を切ったレベルのダメージしか与えられない。

「やはり無理、か……」

現に、目の前の巨人は俺に切られた事にも気がついていないだろう。

俺は突き刺さった剣を抜き去る反動で、そのまま魔界竜の背に飛び移る。

「……大技で急所を一撃、しかないだろうな」

たとえ奴にとって、小さな針の一撃だとしても、それが脳や心臓に突き刺さったのならそれは致命傷となりうる一撃である。

となると、的が絞りやすい脳天にお見舞いするのが一番やりやすいか？

そうと決まれば、あとは準備をするだけだ。俺は魔界竜を巨大召

喚魔から離し、そのままもつとも近い場所で戦闘をしている戦艦に近づくように促す。

魔界竜は短く咆哮すると、身を翻し一番近くの戦艦目指して飛んで行く。

俺達が飛び交う弾幕を掻い潜りつつその戦艦に近づくと、突如その戦艦の外部スピーカーから大音量で聞いたことのある声が俺の耳に飛び込んでくる。

『おおー！！鋼牙ではないか！！何をしとるんじゃこんなところで！！！！』

……このいかにも空気を読みそうに無い無駄にデカイ声の持ち主を、残念ながら俺は一人だけ知っている。

「……何故テオドラ皇女がこんな最前線で、しかも最も危険な場所にいるんだ？」

『うははははは！！気にするでない！！勝利の女神に危険の二文字は存在せんのだ！！！！』

……すっかりこっちの音声も拾ってるのか。しかも、普通自分で勝利の女神とか言うか？ 相変わらずの思考回路というか何というか。

「……まあそんな事はどうでもいい。すまないが、これから俺を乗せてあのデカブツの目の前まで上昇して貰いたい！！頼めるか！？」

『そのでかい金魚じゃ行けないのか？』

「こいつは俺の能力で出しててな、少しでも消耗を抑えたいんだ！
」

『そういう事ならお安い御用じゃ！！　おい！！　あの金ピカが甲板に着艦したら、あのデカブツの顔面まで急速上昇じゃ！！』

スピーカーの向こう側から野太い男たちの大きな声が聞こえてきた。確かタカミチもあそこにいると思うんだが、大丈夫なんだろうか？色々な意味で。

そう思いながら俺は魔界竜から飛び降り、テオドラの乗る戦艦の甲板に着地する。そして役目を終えた魔界竜を送還。ついでに地上に残っているグラウ竜も送還する。援軍も合流した事だろうし、恐らく入り口の防衛も大丈夫だろう。

「とりあえずここから離脱した後、高度をあいつの頭にまで上げてから限界まで接近してくれ」

『了解じゃ！！』

俺の声に、戦艦は急速後退する。

「ッ！？」

ほんの一瞬だけ地に足が着いた事で気が緩んだのか。不意に体から力が抜け、地面に片膝を着く。

……思いのほか、体が限界まで行使されていたらしい。脳内麻薬という奴だろうか、精神的には不思議と充実している。だが肉体的

な疲労は如何ともし難かったようだ。

俺は大牙狼斬馬剣から元の牙狼剣に戻した剣を杖に立ち上がる。
こんな格好をあんまり長々と晒すわけにもいかない。敵にも味方にも。倒れるのはもう一仕事やり遂げさせて貰った後でも遅くは無い。

俺は恐らく最後になるであろうアーティファクトの使用に、手にした剣に力を込める。すると、牙狼剣は一瞬光り輝いたかと思うと俺の手の中でその姿を変える。

手の中には、法具の独鈷を更に鋭くしたような武器がある。

『おつりん
鷹麟の矢』

かつて牙狼の世界において最強のホラーと呼ばれたレギュレイスを、レギュレイスが作り出した結界ごと破壊した強大な力を秘めた武器である。

本来は結界を破壊するためのものだが……。

俺は迷う事無く、鷹麟の矢を自分の胸に突き立てる。

『うぐおっ……！！』

鋭い痛みが全身を駆け巡る。神経を直接切り裂かれたかのような痛みに、思わず意識を手放してしまいそうになる。

しかしそれも、ほんの数秒の事。

膨大なエネルギーの波が周囲に巻き起こり、俺の体を眩い光が包みこむ。

体はまるで、残りの力を全て燃やし尽くすかのように気力が満ちる。真正正銘、命を燃やしているかのような状態だ。

光が収まると、俺の背には巨大な光輪状の装飾が三つ新たに出現し、手にした鷹麟の矢も巨大化し刃の枝分けれた槍のような形状へと姿を変える。

『鷹麟・牙狼』

鷹麟の強大な力をその身に宿した、黄金騎士のもう一つの姿。

万魔を穿つ鷹麟の矢に貫けないものは無い。

「さあ、いい加減幕引きだ」

俺は静かに右手に持った鷹麟の矢を構えた。

鋼牙SIDE OUT

大戦は『紅い翼』、『黄金騎士』、両者の局面において終わりを迎えようとしていた。

しかし

未来は

運命は

両者をあざ笑うかの如く

その両の手を、決して緩めようとはしないのだ。

13： 終戦

宮殿内部・大広間。

フェイトと『紅い翼』の戦いは佳境を迎えようとしていた。

詠春の捨て身の攻撃で、自身の魔法を破られたフェイトは焦っていた。万全の状態ならば兎も角、満身創痍の状態で放った上位魔法は予想以上に体の自由を奪うものだった。

「……障……壁……突破……石の……槍」

殆ど生きも絶え絶えの状態でフェイトは呪文を詠唱する。それに呼応し、無数の石槍がフェイトに向かって突っ込んでくるナギに殺到する。

「しゃらくせえっ！！魔法の射手！！光の百矢！！」

ナギは臆する事無く、止まらずに向かってくる石槍を破壊しながらフェイトへ突撃する。数発ほど体に命中するが、流れる血も痛みも無視してナギはただ一点を目指して駆ける。

自身の肉体が引き起こすあらゆる不具合を一切無視して、ナギは最後の一撃の詠唱を開始する。

「……来たれ……グ………虚……空の雷……薙ぎ………払え………！！」

口から喉から逆流してきた鮮血が溢れ、最早血にぬれていない場所の無い体に降り注ぐ。

「雷の斧…程度の魔法など……！」

フェイトが静かに詠唱すると、その目の前に真つ黒な岩盤が隆起し2人の間に壁のように立ちはだかる。フェイトが呼び出したのは、自身の持つ対物用の最硬防御である超高密度の石の一枚岩である。範囲は広くは無いが、正面の攻撃だけならばラカンの斬艦剣すら容易く防いでしまう代物である。

「舐める……な……よ……！ こいつは……この一撃は……！！」

ナギの右腕に集まった稲光は、一際輝きを増したかと思うとナギの掌に集中してゆく。その発する熱で周囲の空気が歪みプラズマ化しつつあった。

「この一撃には……！！ 数え切れねえ未来が乗っかってるんだ！！」

ナギの手刀が空気を引き裂くような音を立てながら勢い良く真つ直ぐに突き出される。

「極式・超電刃拳^{デンジエント}」！！」

その右腕は、両者を阻んでいた黒き壁を、まるで豆腐を崩すかのごとくいとも容易く突き破ると、フェイトの右胸を貫いた。

「ゲ……フ………」

フェイトの口なら大量の血が吐き出される。

最早、フェイトにはこれに抗う力は残っていなかった。

「フ……フフフ……」

フェイトが目を閉じ静かに笑い出す。

「何が……可笑しい……ってんだよ……」

同じく、息も絶え絶えのナギが黒い壁の向こうから聞こえる笑いに反応する。

「いえ……こういう結末も……悪くないと……思いまして」

「……」

「あなたや、あの黄金騎士が……この世界の未来を考えている者がいるのなら……」

「……」

「この世も……中々捨てたものじゃ……ありません」

「……鋼牙」

「？」

「黄金騎士の名は……冴島 鋼牙だ」

「そう……ですか……フフ……最後に……良いことを……聞き……まし……」

黒い壁の向こうからの声は、そこで絶えた。

ナギは胸の中に、ほんの少しだけ悲しい風を吹くのを感じた気がした。

残るは、黄昏の姫御子を探し出し世界を破滅させる術式を止めるのみ。魔力の反応から見て、その場所はこの大広間の真下であることが判明する。

すぐにでも向かいたかったのだが、如何せん『紅い翼』のメンバーはその殆どが満身創痍、取り分けナギと詠春の様態が思わしくなかった。

しかし、時間的な余裕も最早残されておらず、負傷を押して挑むしかない。

最終的に、意識の無い状態の詠春をアルが外へ運び、残りが階下に降りる事になった。

ラカンの怪力で床を叩き壊して崩すと、そこにはまるで台座の上に生贄のように浮かぶ一人の少女の姿が確認できた。

言うまでも無く黄昏の姫御子こと、アスナ・ウェスピーリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアその人に他ならなかった。

「恐らく、あの子を台座から外してしまえば術式は止まるじやろう」

そう言っ てゼクトは、ナギをおぶったラカンを引きつれ台座へと近づく。

「……それにしたって、『完全なる世界』の親玉は一体どこ行っちゃったんだ？」

ラカンは未だに姿を現さない『完全なる世界』のボスと言われている『造物主^{ライフメーカー}』の存在に不信感を隠せない。

それはゼクトも思うことであつたが、今は兎に角術式を止めることが最優先事項であつた。

ゼクトは台座の目の前に立つと、短く呪文を唱え台座にかけられていたプロテクトの魔法を解除する。このプロテクトも今に思えば嫌に簡単なものであつた。

ゼクトはその小さな体で、浮かんでいる少女を台座から外すために手を伸ばした。そしてその手が少女に触れようとしたその刹那。

「!？」

今まで閉じられていた少女の瞳が、まるでゼクトの気配に反応したかのように大きく見開かれる。そしてまるで、得物を目にした狩人のように口の端を思い切り吊り上げ、壮絶な笑みを浮かべたのだ。

「マジッ!? 引けッ!! ゼクトオッ!!」

ラカンのその声が響いたとほぼ同時。

少女の腕が、ゼクトの腹を貫いた。

巨大召喚魔から距離約3000。ヘラス帝国戦略艦隊旗艦ゲルーベンシュダットの甲板の上で牙狼は右手に持った鷹麟の矢を構える。鷹麟の矢の力は凄まじく、持っているだけで甲板の表面は融解し始めており、船員たちはそれを含め目の前の状況に冷や冷やしなから事の成り行きを見守っていた。

「姫、あの旦那はやってくれるんですかねえ？」

目の前の光景に流石の艦長も冷や汗を流しながら、仁王立ちして牙狼を見守るテオドラに向かって尋ねる。

「あやつに出来何だら他に出来る奴はおらんわー!!」

「大丈夫です!! 鋼牙さんならきつとやってくれますよ!!」

テオドラに続いてタカミチも大きな声で言う。艦長は、あの黄金

騎士がいかにかこの二人からの信頼を得ているかを思い知った。

この二人が信用しているのならば、こちらにも信じる以外の選択肢は無い。

「安心して下さい！！ 旧世界最強は伊達じゃありません！！」

「ああ、そいつあたいたいした肩書きだぜ」

嘘か真か、艦長に確かめるすべは無い。しかし、そのような事は確認せずともあの黄金の騎士は間違いなく、この戦場では最強だろう。

「たのんだけ……最強さんよ……」

艦長はそう呟くと、ブリッジに全速全身の号令を、今までに無い艦長らしい貫禄をもって出すのであった。

巨大召喚魔の肩の上に、一人の人間の姿があった。仮面とマントを羽織ったいかにも怪しい人物。

この人物こそ、何を隠そうこの巨大召喚魔の召喚主である、『完全なる世界』幹部の一人であるデュナミスという男であった。

デュナミスは召喚魔の肩の上で、一人冷や汗を流していた。原因は勿論遙か先にいる黄金の騎士である。

旧世界の裏の歴史に度々現れる、伝説の騎士。敵対したならば最期、その命を諦めろという言い伝えさえ伝わっている存在。その伝説の騎士に関する資料に唯一現存していた、その姿を描いた絵画。それに描かれていたものと瓜二つのものが、この戦場に現れた。

初めのうちは強者と戦える事に血が震えた。が、ここは戦場。そのような私情を挟んでいる場合ではなかった。それに、たとえ本物の伝説の騎士であったとしても問題ではない。この数の前では大海に浮かぶ木っ端の一つ。

そう思っていた自分を酷く愚かしく思えた。あれは、手加減やし惜しみなどをしていてどうにかできる相手ではない。勿論、そのような事をした覚えは無い。だが、戦場でのあの黄金騎士の働きは、恐怖を通り越した神々しささえ感じられる感情を覚えずに入られなかった。あれはこの世の生き物ではない、それこそ自分たちの崇める『造物主』と同じように、神域にいるような存在。

アレを相手にするには、こちらで最後の切り札を切るしかなかった。それがこの超怒級の巨大召喚魔。

しかし……。

「魔力ではない……何なのだ、あの強大なエネルギーは……！！」

今まで感じた事の無い、不可思議な力の反応にデュナミスは狼狽する。その力は間違いなくこちらに矛先を向けている。

耐えられるか？

その自身の問いの答えは、何度繰り返してみても。

否、であった。

甲板の上は殆ど崩壊しているといっても差し支えなかった。ギリギリのところでは足場が残っているような状態で、航行に必要な機関が艦後方にあつたのが幸이었다。

「充電は完了……」

牙狼は姿勢を低くし、まるで弓の如く鷹麟の矢を後ろへと引き絞る。

一瞬の空白。力が頂点に達し、臨界を表した証拠。ここより先はただ放つのみ。

牙狼は、思い切りその手に掴んだ鷹麟の矢を投擲した。

衝撃。

放たれた鷹麟の矢は艦の前面をその衝撃で完全に吹き飛ばす。

音を。光を。あらゆる物を置き去りにして、鷹麟の矢はまさしく光の矢となつて一筋の軌跡を残していく。

その光景を目撃したものは多い。

だが、なにが起きたかを理解できたものはごく僅かであつた。

一瞬だけ。耳を劈くような高い音が聞こえたかと思うと、これまた一瞬だけ空中で何かが光つた。

だが、それが何かを思い返すような暇は無かつた。

次の瞬間、天をつく程に巨大な召喚魔の頭部が、まるで風船が破裂するかのようにいと容易く弾けて消えてしまったのだから。

「……………」

この戦場にいる者は、例外無く口を大きく開け呆けた。

当然、セラスもその中の一人であつた。全ての者が戦いの手を止め、その光景に一瞬我を忘れた。

そしてその光景は、あの巨大な召喚魔が光の粒子になり強制送還されるまで続いた。

「ハ……ハハハ……本当に倒した……鋼牙さん……本当に倒してく

れた……！」

この光景を目の当たりにして、最早『完全なる世界』の兵達に戦意は残されているはずも無かった。

そして再び宮殿内部。内部には既に、多数の連合兵が突入しており、アル・詠春の回収と敵の残存兵の駆逐を行っていた。

やがて、小隊の一つがナギ達のいる大広間前へと到着する。そして、突入しようとしたその時、中の床に開いた大穴から少年と少女を担いだ大男が飛び出して来た。

「あ、あなたは『紅き翼』の……！」

「おい……詳しい話は後だ……！急いでこの中から脱出しろ……！もうすぐここは崩れちまう……！」

大変慌てた様子で、ラカンが声をかけてきた小隊の一人に大声で叫ぶ。

「わ、分かりました……！……こちらデルタチーム……！目標を確保に成功……！なお、宮殿はもう間もなく崩壊するとの事。宮殿内にいる者に敵味方問わず撤退勧告を……！」

その小隊員はどこかに通信をすると、ラカンに敬礼をし自身も撤退していく。

ラカンが背負っているナギと少女を確認すると自分も脱出すべく走り出す。

「ナギが気を失ってくれて幸いだったか……でなきゃ、こいつまであそこに残るって言い出しただらうからな」

ラカンは、一瞬悔しそうに顔を歪めると、少しだけ大広間を振り返りその場を後にした。

一方、宮殿内からの作戦成功の知らせを受け取った連合軍は、完全に勝利した事と、世界を救えたという事実に湧いた。

その歓声は、戦艦の甲板で大の字で倒れる牙狼の耳にも届いた。

「そうか……全部終わったか……」

『勝ったぞ！！聞こえるか鋼牙！！妾達世界を救ったぞ！！』

『鋼牙さん！！やりました！！終わっただんです！！戦争が終わりましたよ！！！！』

スピーカーから大音量でテオドラとタカミチの声が聞こえてくる。タカミチは明らかに涙声で、スピーカーの向こうでどんな顔をしているのかが、手を取るように見える。

牙狼は仮面の下で笑った。これで、とりあえず大きな戦争が終わった。こちらが勝ったからには、フェイトとの約束どおり、俺たちのやり方で未来の魔法世界を救わなくてはいけない。やらなくてはいけない事はまだまだ沢山ある、それこそ戦争をしていたときよりも更に多く大変なことが。

そんな事を考えていた牙狼の耳に、突如大音量の警報が響き渡る。

「何だ……！？」

戦艦からのスピーカーではない。これは、宮殿から聞こえてくる音だ。

それから広域魔法で一人の男の声が戦場に響く。

『この戦場にいる全ての者よ！！直ちにこの戦場からなるべく遠くへ離脱するんだ！！私は『完全なる世界』のデユナミスという者だ！！詳しい説明は省かせてもらうが、何者かが宮殿内にあったBCTLという広域兵器の発射スイッチを押した模様だ！！繰り返し！！敵味方関係ない、直ちにこの放送を聴いている全兵は戦線から離脱してくれ！！』

そついい終えるとデユナミスと名乗った男の声は聞こえなくなる。

当然、次に続くのはパニックとなった戦場だ。こんな状況に加え、負傷者もいる中で、迅速な退却行動など取れるはずもない。

「テオドラ皇女……今の男に連絡を取る方法はないか」

『そう言うと思って、さっきの放送の魔法の周波数を記録しておる。今相手に通信を繋いでる最中じゃ』

そう言っただけで、どうやら繋がったらしくこちらの声が届くように、回線を切り替えてくれた。

「聞こえるかデユナミスとやら」

『貴方が俺に話したいという男が。言っておくがさっきの話は嘘ではないぞ』

「分かっている。俺が聞きたいのはその兵器の詳細だ」

『それを聞いてどうする？』

「……やれる事はやろうと思ってな。問答をしている暇はない」

『……良いだろう。発射のスイッチを押されたのは強制時間跳躍弾、通称BCTIといわれる兵器だ。詳しくは俺にもわからんが、着弾範囲の周囲半径数キロを強制的に未来へと転移させるということでもない兵器だ。加えて、未だ未完成の試作品でどの程度の未来に飛ばすのか不明、そもそも本当に未来に飛ばすのかすら疑わしい。下手をしたら半径数キロの物を空間ごと消滅させるだけかもしれない』

「とんでもない兵器を作ったもんだな……」

『知るか、兵器開発部の連中は気違いが多い上に、今回の旧世界の技術も取り入れた代物らしいからな』

「それで、発射まではあとどれくらいの猶予がある？」

『……あと2分を切った。悪い事は言わない、誰だか知らないがお前も早く逃げる事だな』

「お前もな」

『兵が全員逃げたのを確認してから逃げさせてもらっ』

「戦場を見てみる、あの兵たちが後二分で全部逃げられると思っているのか。お前のしようとしている事に意味は無い。ただ無駄死にするのが一人増えるだけだぞ？」

『意味は無くとも、俺にはまだ意地が残っている。残念ながら俺は幹部だ。大将と違って必ず生き延びる必要は無いんでな。ならば最期くらい、俺達に従って着いて来た奴らが全員逃げ延びてくれるのを見届けても罰は当たらないだろう』

デユナミスの言葉に、牙狼は静かに剣を握りなおす。

「……ならば、俺ももう少し頑張らなくては罰が当たるな」

『何？』

牙狼は答えを言う前に、ブリッジに合図を送り通信を切断する。

『……鋼牙さん?』

心配そうなタカミチの声がスピーカーから流れてくる。

「……………」

牙狼は何も答えない。ただ静かに牙狼剣を構える。

『馬鹿者、鋼牙!!お主もう動く力も!!』

牙狼は剣を振るい、衝撃波で外部スピーカーを破壊する。

後ろをチラリと振り返ると、ブリッジで二人が何かを叫んでいる様子が見える。もたもたしていたら、タカミチが壁を壊してでもやって来かねない。

だが、こちらの声は聞こえるだろう。

「テオドラ皇女。世の中には全ての人間を救う手段なんて存在しない。時には10人を救うために1人を殺すような判断も必要だ。あんたのような立場の人間なら、なおさらそれを貫き通さなければならぬ」

牙狼はアーティファクトに意識を集中する。

「……タカミチ、お前はあの殺さなくてはいけない一人を救えるような人間になれ」

自分の体の中の、もう殆ど燃えカスのような力を全て掻き集めてもなお足りない。体を引き裂くような、焼け付くような形容しがたい痛みが襲う

意識が霞んだ。体から力が抜けていく。

しかし、決して諦めるわけにはいかなかった。俺の背には足元には。

この世界を作る、無限の未来達がいるのだから……………！

声が聞こえた。

どこかで聞いた事のある、何故だか心安らぐ懐かしい声。

ロナレバ ヤカチオ ラリツム ソゴノ ガリチャルブ ババザ
ラアカヨ ナノツケラゼム

お前は私の愛する子ども。大丈夫。母があなたを守ってあげる

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおっ！！」

牙狼の咆哮が木霊する。

その背には新たに金色の翼。

翼人牙狼。

本来の力とは別の、思いの力によって姿を変えた牙狼の姿。牙狼の心に降り注いだ、最期の力の一雫。

やがて、宮殿の方角から轟音を響かせ、まるでICBMのような巨大な弾頭がこちらに向かって発射されるのが見えた。

牙狼はその背に現れた金色の翼をはためかせると、崩壊した甲板から飛び上がる。

そして風を斬り、瞬く間に弾頭に接近すると、その腹に剣を突き立ててしがみ付く。

正真正銘最期の力を振り絞り、弾頭の方角を変えようと思い切り押し上げる。

弾頭はゆつくりと、しかし確実に上へと持ち上がっていき、遂にはその方向を完全に上空へと向け飛び上がっていったではないか。

そして、地上遙か高く成層圏にたどり着いた時。

牙狼はその剣で思い切り、弾頭を切り裂いた。

テオドラSIDE

鋼牙が羽ばたいた。

それからは一瞬の出来事だったかのようだった。

遙か空の彼方で、何かが爆発したような轟音が響いたかと思うと、空一面を真っ黒い何かが覆う。

そして、そのあとにはまるで切り取ったかのように灰色の空間が広がっており、しばらくして雲の無い赤みがあった夕焼けの空に戻った。

わたしたちは待った。

待った。

待った。

まった。

しかし、黄金騎士が空から落ちてくる事は遂になかった。

そして、その後。

宮殿から脱出してきた『紅き翼』のメンバーの方からもまた、ゼクトが消息不明になったとの報告を聞いた。

戦場では、我が連合軍と投降してきた『完全なる世界』の兵が未だに空を見上げている。撤収の命令を出しても、誰一人としてその場を動く者はいなかった。

戦争は終わった。

しかし、その傷跡は大きい。

取り分け、『紅き翼』のメンバー達にとっては。

妾は空を見上げる。

夕闇が空を覆い、今日が終わりを告げようとしておった。

こうして空を見上げてみると、まるで何事も無かったかのように鋼牙の奴が戻ってくるような気がしてならなかった。

おそらく、戦場にいる兵達も同じ気持ちなのだろう。

「……何が十人救うために一人を殺せ、じゃ。言った本人がその一人になるなんて冗談にもならんぞ」

妾は空を見上げる。

空を見るの止めてしまったら、瞳に溜まった涙と共に、鋼牙がいなくなってしまったという事実を受け止めなければいけなくなってしまうから。

「馬鹿者が……。妾は……。妾はまだ、お主の素顔すら見せてもらってやらぬのじゃぞ……」

やがて涙は溢れ、妾は声を上げて泣いた。

S I D E
テオドラ
O U T

第壹部
了

14： 白夢

大戦の終わりは、この世界にほんの僅かの幕間の時を与えた。

争いの終結を喜ぶ者の歓喜が響けば、更に多くの悲しむものの者の慟哭が魔法世界に響く。

しかし世界は、その喜びや悲しみを、その胸に抱きしめる時間すら与えてくれない。

なぜなら今は、ただの幕間。

世界という名の大きな舞台は、止まる事無く廻り続ける。

ゆっくりと上がり始める幕の向こうに、どんな未来が待っているのか。

それは神でさえも知る由のない事。

ただ一つ確かな事は、開幕のベルが高らかに鳴り響いているという事だけだった。

【第二部 始】

S I D E ? ? ?

夢を見た。

酷く曖昧でばやけていて、それなのに頭の中にこびりついて離れない鮮明な夢だ。

私はその夢の中では幼い子供の姿だった。もともと、この夢の中の私はその幼子そのものであり、姿自体は見ることはできないが、私は感覚としてそう捉えていた。

私は真っ暗な闇の中で、一人しゃがみこみ泣いていた。

自分の掌すら見えない暗闇の中、心細くて、怖くて、寒くて。幼い私はその事に耐えられずにただただ泣きじゃくっていた。

何故私はこんなところにいるのだろうか？ 何故私は一人ぼっちなのだろうか？

夢の中の幼い私は、そんな理不尽な自分の境遇に、怒りと悲しみ。自分の知っている限りのありったけの負の感情を胸に抱えていた。

自分以外の全ての物が、世界の全てが憎らしかった。

『どうして泣いている？』

不意に声をかけられた。顔を上げると、いつの間にか私は暗闇の中をスポットライトのような光で照らされており、そして私の前には一人の男が立っていた。

その姿は霞がかかったかのようにぼやけており、声を聞いてからうじて男と分かった。

「みんな、わたしをおいていなくなっちゃう。もう、さびしいのはいやなの。ひとりぼっちは……いやなの」

私はそう呟くと、再び胸にこみ上げてきた悲しさで涙をこぼす。

すると、男は私に目線を合わせるかのようにしゃがむと、私の頭を優しく撫でた。

『寂しくても、辛くても、おまえが前を向いて歩いている限り、必ずおまえと共に歩いてくれるものが現れる』

「……ほんとうに？」

『ああ、本当だとも』

男は笑った。表情は分からないが私には確かに笑っているように

見えた。

『ようやく笑ったな』

男の声に、私は自分が笑っている事に気がつく。私は喜びで胸がいつぱいになった。

男はそんな私を見て微笑むと、私の頭をもう一度撫でてからスツと立ち上がると、私に背を向ける。

すると今まで真っ暗だった世界は、一面真っ白な光に覆われる。

男は私に背を向けたまま、何も言わずに歩き出す。

私はその背中を追いかけようとするが、足が動かない。声も出ない。

まるで、石像にでもなったかのようにその場にしゃがみ込んだまま固まっていた。

「○○○!」

私は思い切り叫んだ。出ない声を振り絞って。

私の知らない、知っているはずのない男の名を。

男は立ち止まる事無く光の中に消えていく。

私の目に最期に映ったのは、遠い記憶の片隅にある父の姿と重な

る、白いコートの後姿だった。

『オイ御主人。イイ加減起キネート脳味噌腐ッチマウゼ』

私はチャチャゼロの口の悪い声でハッと目を覚まし、ベッドから跳ね起きた。そして、運悪く私の目の前にいたチャチャゼロに思い切りヘッドバッドをお見舞いして、頭を押さえる羽目になる。チャチャゼロのほうは壁に叩きつけられて床に沈んでいた。

「~~~~~っ!!」

いくら私でも、多少は痛い。がおかげで頭は完全に覚醒した。

窓の外を見ると夕闇が迫る逢魔が時。吸血鬼の私だが、生活のリズムは普通の人間となんら変わらない。なので、この時間に起きるという事の意味は、一般的な人間の寝坊のアレと変わりはない。

私は、先ほどの夢を思い出す。夢は潜在意識の現われだといわれる。

私は寂しいのか？ 悲しいのか？ 否、そのような甘ったれた考えはとうの昔に置いて来た。

私は誇り高き吸血鬼の真祖、エヴァンジェリンA・K・マクダウエルだぞ。

そう考えると、次第に腹が立ってきた。何故かは分からない。夢の中であれ、弱気な姿を見せた幼い自分に対してなのか。それとも……。

「……あの男は一体なんだったのだろう」

見たことも、ましてや会った事も無い。しかし、どこか懐かしい雰囲気を感じさせる男だった。思えば何時だっただろう、最後に私があのように笑ったのは。

夢の中の自分は笑っていた。嬉しそうに輝くような笑みで。

今の私は、少なくともこの吸血鬼の体になってから、一度もあのように笑った事など無い。笑う余裕などなかった上に、余裕が出来た頃には、すでに笑い方なんて忘れてしまっていた。せいぜい嘲笑くらいのものだろう。

私がそんな事を考えていると、チャチャゼロが復活したらしく、ふらふらとこちらに飛んできた。

『ヒデーゼ御主人。折角起コシテヤツタテノニ、頭突キ御見舞イシテクレルナンテヨ』

「あー……スマン」

それに関してはこちらが全面的に悪いので、流石に謝る。

『……ソレニシテモヨ御主人』

「……なんだ？」

『顔、洗ッテキタ方が良イゼ？ マルデ泣キ腫ラシタミテーナ顔シテルゼ』

「!?!」

私はベッドから飛び起きると、化粧台の鏡に顔を写す。……ちなみに吸血鬼が鏡に映らないなんてデマにすぎん。生物学的にありえんじやろう。

鏡に映った私の顔は、それは酷いものだった。目は真っ赤になって腫れている上、頬は涙を流した跡がくつきりと残っている。

私は恥ずかしさと屈辱感で一気に顔が真っ赤になった。そして、思わず鏡を思い切り聖拳突きで叩き割ってしまった。

顔を真っ赤にし、肩で息をしている私の後ろで、チャチャゼロが『ケケケケケケ』と笑い声を上げていたのが更に腹が立った。

腹いせに奴との魔力のリンクを解除して、しばらく身動きできないようにしてやった。

『ハツ当たり反対』

と最後に言っていた気がするが、完全に無視してやった。

その後私は、顔を洗ってから、もはや夕飯となってしまった朝食を取った。

日は既に落ち、辺りが暗闇に包まれる頃。まさに吸血鬼にとっては活動時間であるその時間、私は書庫でランプの明かりに照らされながら、古く変色してしまっている書物に目を通している。インクも掠れてしまっているので、拡大用の眼鏡も忘れてはいけない。1ページ捲るのも丁寧に慎重に、本を破損させないようにゆっくりと本を読み進めていく。

本には、過去があった。

遙か昔に私が通り過ぎてしまった過去が。

私が本当に生きていたであろう、あの頃が。

感傷というには古すぎる記憶。写真も存在せず、最早自身の記憶をも信用できぬほどに風化した家族の姿。

……やはりこれは感傷だ。

私は、読んでいた本を静かに閉じ、そっと元の場所へと収める。

背表紙には数百年前に書かれた童話集のタイトルが書かれている。

私の持つ唯一の、家族からの贈り物だ。

私は、ランプの炎をフツと吹き消すと、静かに書庫から出て行く。

ああ、起きたばかりなのに何もする気が湧かない。

私の足は行き先を定めぬまま、廊下をただ歩く。

賞金首で追われる身なのだが、別段魔法協会が恐ろしくて逃げているわけでもない。一々、やってくる賞金稼ぎや魔法協会の魔法使い共の相手をするのが面倒なのだ。

骨のある相手とやりあうのはまだいい。問題なのは半人前にもならないような頭の悪く血気盛んなヒヨッコ共が、名を上げたいばかりに挑んでくるのが煩わしいのだ。

大体私は、自分から人間を襲うなんて真似はしないのにもかかわらず、あつちが吸血鬼退治と言う名目で問答無用に襲い掛かってきては返り討ちに合い、私の悪名を大きくして広げていく。

全く、これではどちらが怪物なんだか。これでは人間と吸血鬼の違いは寿命だけで、やってる事は吸血鬼のやる吸血行為が生理現象な分マシじゃないか。

そんな事をグダグダ考えていると、周囲の魔力が波打つような感覚と共に、地震のようにほんの少し空間が揺れる。

これは珍しい。こんな所で魔力震が起きるのか。

魔力震とは、理由ははっきりとは解明されていないが、大気中に漂う魔力の源であるマナが、何らかの理由で反応を起こし、地震のように空間を振るわせるという現象だ。

自然現象の一つなのだが、原因は解明されておらず、いまだ各地の魔法協会によって観測が行われている。唯一分かっているのが、地震と同じように余震と本震があるという事と、魔力の濃い地域で頻発する事。それと運がよければ、まるで上等の花火のような魔力の連鎖反応現象を見る事が出来るという事くらいだ。

今起きたのが余震という事は、もう10分もしないうちに本震が近い所で起こるな。

どれ、暇つぶしの余興としては十分なイベントだ。ワインでも持って見物にでも行くとしよう。

おそらく魔法協会の人間も来るだろうが、どうせ魔力震の観測に来る奴らは、今年入ったばかりの新人だ。そう構える事もないだろう。

さて、せっかくだからチャチャゼロの奴もリンクを繋ぎ直して、荷物持ちに使ってやろう。

ワインも花火が出た時のために、少しばかり上等なヤツを持っていこう。

さて、今夜は良い夜になると良いものだ

SIDE
エグザウト

そしてこの日、世界は再び廻りだす。

15： 手記

1985年5月27日 セラスの手記より。

あの戦争が終わり、一年と数ヶ月の月日が過ぎようとしている。時が流れるにつれ、人々の心からあの忌まわしき戦火の傷は癒えつつある。しかし、決して忘れてはいけない、風化させてはいけない記憶まで消してしまわぬよう、私の中の私怨の炎が収まりつつある今、あの戦争の終わりにあった出来事を書き残しておこうと思う。

後に『大分烈戦争』と呼ばれるようになったあの戦争が終結したあの日、結果として世界を破滅させるとしていた術式『反魔法場』の阻止は不完全なものであり、最終的にはウエスペルタティア王国を犠牲にその完全な事態の終息を迎えるに至った。

が、不謹慎ながらもその日は、4年にも及ぶ長い間争い続けたヘラス帝国とメセンブリーナ連合が、停戦合意の記念式典が執り行われた記念すべき日でもあったのだ。

私も、全身を包帯で巻かれ、まるでミイラのようになりながらも式典に参加していた。

式典では、大戦終結の立役者として『紅き翼』が帝国・連合から勲章を授与され、反逆者から再び英雄へと返り咲いた。もっともその場には、代表としてガトウさんが登り、残りのメンバーは負傷のために式典には参加していなかったが。

そして同時に、この戦争の犠牲になった数多くの罪無き命と、戦

場に散つていった英霊達のために黙禱が捧げられた。

あの戦場にいた者は、恐らく例外無く、戦争の終わりのあの光景を思い出していたことだろう。あの光景は、今になっても私の網膜に焼き付いて離れる事は無い。

あの人が空に消えた時、私はなにが起きたのか理解できなかった。いや、理解したくなかったのかもしれない。私は頭の中が真っ白になり、ただただ雲ひとつ無くなったあの夕闇を見上げ続ける事しか出来なかったのだ。

私は式典の黙禱を捧げる時になり初めて、あの人がいなくなってしまったという現実をこの身に受け止めるに至ったのだ。

私は自身の目頭が熱くなるを感じた。体が震えた。

そう、私はその時。戦争が終わった嬉しさとは別に、涙を流したのだ。

周りの部下達が心配して駆け寄ってくるのも構わず、私はその場に崩れ、両の手で顔を覆うようにしながら震えるように泣いた。

共にした時間はほんの数時間にも満たない。交わした言葉は友人と呼ぶにはあまりにも少ない。なのに、何故私はこんなにも悲しいのだろうか？

そんな事は考えるだけ無駄な事だった。あの時間は、あの戦いの中で一緒にいた時間は。どんなに長い時間よりも、遥かに深く濃密な時間だったのだから。

そして式典は終わり、その約10時間後。王都オスティアは、まるでその戦いの後を全て消し去るかの如く、海の藻屑に消え、この世から姿を消したのだった。

それからおよそ二ヶ月後。メガロメセンブリア元老院から驚くべき発表が公布された。

その内容は二つ。

一つ目は、アリカ王女を大分烈戦争を引き起こした黒幕として逮捕。ケルベラス無限監獄に収容後、二年後に処刑するというもの。

元老院はあの戦争の責任の尻拭いをアリカ王女にさせようというのだ。元老院曰く、オスティア王国は中立の立場で帝国・連合の双方に関与しつつ、その裏で戦争を操り世界を破滅させようとした、という事らしい。おそらく『完全なる世界』の本拠地が王国内にあったのが災いしたのだろう。この公布がされていた時点で、すでにアリカ王女は捕らえられておりケルベラス無限監獄の中だったのは、後に『紅き翼』の面々から聞いた事実だった。

そして2つ目は、黄金騎士・牙狼を戦場を混乱させ、双方に甚大な被害を与えた永久戦犯として指名手配するというものだった。

どうやら元老院は、少しでも多くの責任を他人に擦り付けたかったらしい。あの最終決戦の戦場において、もっとも多くの人間に知

られ、なおかつ生死不明になっている事から、責任を押し付ける矛先としては格好の対象だったのだろう。そしてすで『紅き翼』という英雄がいる以上、英雄を祭り上げる必要も無い。英雄は一人で十分だが、悪役は少しでも大いに越した事はないという事だった。

私はその時、アリアドネー騎士団本部の会議室で格部門の代表達と共にこの放送を見ていたのだが、怒りのあまり見ていたテレビの画面を殴り壊してしまった事を覚えている。

正直その時の事は、怒りのあまり記憶が定かでは無いが、その場に居合わせた同僚によると、元老院の連中を皆殺しにしてやると怒り心頭の様子で叫びながら部屋を飛び出そうとするのを、他の団員に押さえつけられて、それでも暴れるので魔法で眠らされてようやく収まっただけらしい。

今も昔も、アレほどまでに怒りに燃えたのは初めてだった。腹の底から怒りの炎が燃え上がり、はらわたが煮えくり返り沸騰してもまだ足りない。それくらいの怒りだった。

何故……何故よりもよってあの人を悪者に仕立て上げなければならなかったのか。あの方は他の誰よりもこの戦争の終結を望んでいた。あの方は誰よりも危険なところで戦い続けていた。そして最後にはあの戦場に生き残っていた何万の命を救って消えていったのだ。

それを言うに欠いて永久戦犯だと？ あの時戦場にいもしなかったカビの生えた老人達に何が分かるというのだ。

そのような気持ちを抱いたのは私だけではなかった。

何も知らない市民達ならばその言葉で騙せただろうが、あの戦場にいた人間にとって、この二つの発表はまさに逆鱗と言っても差し支えなかった。

すぐさま、この発表の撤回要請が各所からそれこそ大量にメガロメセンブリアへと殺到したのだが。元老院の意思は変わることはなく、この訴えはあっさりと取り下げられてしまった。

勿論それを大人しく受け入れるなどできるわけも無かった。遂には兵を集めてメガロメセンブリアまで攻め込もうかという一触即発の事態にまでなりかけたのだが、それに待ったをかけたのが何を隠そう、あの『紅き翼』の面々と、あの人の最後の姿を見たはずのテオドラ第三皇女様だった。

彼らは言った。ようやく終わった戦争の火を再び燃やしてはいけない。あいつは自分のために再び世界に血が流れる事を決して望んではないはずだ。アリカ王女は必ず自分達が助け出す。だから今はその怒りを抑えてくれ、と。

そして、テオドラ第三皇女様が言った。あの人は死んでいない。きつとまた私達の前に現れてくれる。それが何時になるかはわからないが、それまで戦う事以外にしなければいけないことが沢山あるはずだ。だから今はその矛を収めてくれ、と。

そう言いながら、テオドラ第三皇女様は涙を流しておられました。彼女もまた、あの人がいなくなってしまい悲しんでいる人の一人なのでした。

結局、『紅き翼』とテオドラ第三皇女様の説得によって、元老院に対してのクーデターは避けられる形になった。

その後『紅き翼』の方々はそれぞれ別行動で動いており、戦後の復興や、『完全なる世界』の残党狩りなどで各地で活動されているようです。

私はと言いますと、相変わらずアリアドネー騎士団で杖を振るう毎日です。

あの日のことは、間違いなく私の中で消える事無く刻み込まれた記憶の一つで、忘れる事など出来ないでしょう。

しかし、今の私は昔の私とは違い、それを悲しい記憶だとは思っていません。テオドラ第三皇女様が仰ったように、あの人は必ず戻ってくる、そう信じるようにしたのです。

そう、たとえ私が老いて天に召されるその時まで、私は信じ続けるのです。

あの人が帰ってきてくれる、その事を。

16： 道標

『紅き翼』のアジトの一つにて。

人のごった返すとある街の、少し裏に入ったところにある暗く人通りの少ない路地の片隅にそのアジトはあった。英雄という身分に戻った彼らであったが、現在自分たちのやろうとしている事を思えば、あまり姿を見せるという事は得策ではないと感じたのだった。

彼らが一体何を企てているのかと言うと、何を隠そう、もう数カ月後にまで迫ったアリカ王女処刑の阻止に他ならなかった。

いや、阻止と言っては少々語弊がある。正確には、アリカ王女を死なせない事が目的である。

処刑自体は全国放送で中継される上、それまでの護送もかつてないくらいの厳重な警備体制が取られる事は明白である。それに、戦争が終わったとはいえ、未だ各地に残る戦火の後は消えず、人々の心には再び戦争が起きるのでは無いかという不安も少なからずあり、それを煽るような事体だけは避けたかった。

ではどうすればいいのか？ 民衆の不安を煽る事無くアリカ王女を助け出す手段はあるのか？

それは一つだけあった。

ケルベラス無限監獄に収容されるのは、確実に抹殺しなければな

らない死刑囚や終身囚のみ。そしてその処刑が執り行われるのが同じくケルベラス地方に存在するケルベラス渓谷である。

なぜわざわざこの場所で処刑が執り行われるのか？ それはこの渓谷が、魔法世界において他に類を見ない魔力の枯渇した土地。つまりは魔法の使う事の出来ない場所なのである。

魔力というのは空気と同じである。大気中に一定量が存在し、それを体内に取り入れ蓄える事で初めて魔法が使える。これは魔法世界も旧世界も変わらず、あつて当然のものなのである。

しかし、何故かケルベラス渓谷だけは、そのあつて当然なはずの魔力が存在せず、ゆえにそこでは独自の生態系が作られ、どの生き物よりも強靱な肉体を持ち、かつ非常に獰猛な魔獣たちが闊歩するというまさに死の谷と言うに相応しいような場所であつた。

ここに落とされて生き残るものはいないとして、遙か昔から罪人の処刑として使われてきたこの場所は、逆にこの場所に落とされたのだから生きているわけが無いと、その生死の確認もされる事の無い場所でもあつた。

つまり、この場所から助け出す事が出来たとしたら、アリカ王女は公式には死亡したと記憶され、追っ手が掛かる心配も無くなる。

だが、それは勿論生易しい事ではない。その勝算は限りなくゼロに近いと言っても過言ではないのだ。

『紅い翼』の面々は現在、三手に分かれて行動をしている。

ラカンとアルの二人は戦後復興と『完全なる世界』の残党狩りとして各地を歩きつつ、情報収集や物資調達等をおこなっている。

ガトウとタカミチは現在、とあるモノを旧世界に届けるべくゲートに向かっているはずだ。

そして残ったナギはというと、一人このアジトに籠っているのだった。

S I D E ナギ

戦争が終わってから、俺は考えるようになった。

自分は一体何のために今まで戦ってきかを。

まほら武闘会で優勝して、グレートブリッジの戦いで英雄として持て囃されて、俺は自分の事を英雄なんだと思い込んでいた。

だけど、俺はそんな大層な人間なんかじゃなかった。昔も今も、魔法学校を中退するほどの馬鹿で、あの時から何も変わっちゃいなかったんだ。

俺は何も考えちゃいなかった。世界を救うなんて言っておきながら、俺はその本質について何も何も考えちゃいなかったんだ。

俺はそれを、模範とすべき二人がいなくなってから初めて気がついた。

未来を救う。

それは、どんな事よりもつらく難しく、そして先の見えない果てしない目標だ。

あの二人は、その先の見えない未来を照らす光だった。あの二人の歩いた先を俺達は迷う事無く付いていく事が出来た。

今度は俺達の番なんだ。

俺達が、光にならなければならぬんだ。

それが、『英雄』と呼ばれる人間の役目なんだ。

暗い部屋で俺は目を開ける。

元々日の差し込んでこないこの部屋は昼夜問わず薄暗く、時の流れも定かではない。外の喧騒も入ってこないのも、瞑想するには持つて来いの部屋だった。

今俺は、あの処刑の日までの日々を、ひたすら自己鍛錬に明け暮れている。

勿論、あのケルベラス溪谷に乗り込んで姫さんを助け出すためだ。

本来だったら、メンバーで一番身体能力の高いラカンや、魔力の影響を受けないで戦える詠春の方が遥かに適任だ。しかし、あいつらは口を揃えて「こいつはお前の仕事だ」と、俺に向かって言ってきた。

俺は戸惑った。どうしてだ、俺よりもお前らのほうがよっぽど適任だろう？　そう言っと、俺はラカンから思い切り頭に拳骨を喰らった。

そしてラカンはどう言った。

「馬鹿野郎、お姫様を他人任せにする騎士がどこにいんだよ。それになあ、何より姫さんが待っているのは俺や詠春なんかじゃねえ。誰よりもお前を待つてるに決まってんだろうが」

俺は言葉が出なかった。

「そして、何よりもお前が一番姫さんを助けたいんだろうが、シャーンとしやがれ！！」

そう言っ てラカンは思い切り俺の背中を叩きやがった。

あの時のラカンの一言で、俺は息を吹き返したんだ。

そうだ、俺は姫さんを助けたいんだ。死なせたくないんだ。他に理由は無い、それ以外の理由なんて必要ないんだ。

俺は、姫さんと一緒に未来を歩きたいんだ

俺は薄暗い部屋から出ると、外へと繰り出した。日はとくに暮れていて、もう空には月が昇っている。

今の時間、このケルベラス地方周辺の渓谷付近の荒野は、渓谷の魔獣よりも劣るがそれに近いレベルの魔物が現れる。

俺は鍛錬として、毎晩そいつらと魔法抜き of 戦いを繰り広げている。こいつらに楽に勝てるようにならなければ、渓谷の魔獣共を相手になんて出来ない。

……時たま、もしもあいつがいたのなら、いとも簡単に渓谷の魔獣共を蹴散らすんだろな、と思ってしまふ時がある。

そう思ったび、俺は自分の頬を叩いて気合を入れなおす。

こんな腑抜けた事を考えてたなんて、二人が帰ってきて知ったら
きつと笑われてしまう。

お師匠もあいつも、二人とも死んでなんかいない。きつとそのうち
ヒョッコリと何食わぬ顔で俺たちの前に現れる。

だから今は、二人が帰ってきた時に胸を張っていられるような、
そんな人間になるために、俺は……。

遠くから魔物の遠吠えが聞こえてきた。

今日も夜は長い。

S
I
D
E

ナ
ギ

O
U
T

XX(前書き)

設定みたいなもんです

XX

【旧世界における魔戒騎士についての記録】

・魔法とは？

旧世界と呼ばれる世界には、魔法世界から魔法というものが伝わる以前より、その国独自の魔法に類する文化が発達していた。陰陽道を使う日本の東西呪術組合・武術を基にした仙術を使う中国の梁山泊・錬金術と魔術を使うドイツのローゼンクロイツァー等、世界各地に魔法と呼べるであろう技術は存在した。彼等はその力をもつて、時には世を治め、また時には混乱させた。この旧世界における魔法と、魔法世界における魔法も、その根幹は同じであり、この世界に満たされている魔法の源『マナ』により作用される。この『マナ』を体内に取り込むことで魔法の力を発揮するのである。しかし、この『マナ』の力は時に魔物と呼ばれる存在をこの世に作り出す。ある時は生き物の肉体を変異させて、そしてまたある時は生き物の心に反応し、この世に魔物は生み出されるのだ。

・魔物

現在より遥か昔、世界は今よりももっと高濃度の『マナ』で覆われており、人間達を脅かす存在・魔物も数多く存在し、常に人間達は危険と恐怖に晒されていたという。世界各地の魔法文化も、元々はこの魔物達に対抗するために発達していった文化である。

・魔戒法師

数多く存在する魔法組織の中に、日本の呪術組合の中の一集団で

ある『魔戒法師』と呼ばれる集団が存在した。『魔戒法師』は西洋でいう錬金術師に近い存在である。魔物を倒すための道具作りを専門としており、有事の際には自らその道具を手に取り戦場に赴くのだ。しかし、ある時期を境に『魔戒法師』は殆ど前線に赴く事は無くなり、後方支援に従事するようになる。そう、この世に『魔戒騎士』が誕生したのである。

・ソウルメタル

魔戒騎士がこの世に現れる最大の原因として、『ソウルメタル』の誕生がある。『ソウルメタル』は、魔戒法師が作り出した特殊な金属である。特性として、持った者の心に反応しその重量を変えするという性質ともう一つ、マナの効果を薄め、魔法を無力化するという性質がある。特に後者の性質は、魔法使いにとって天敵というべき性質であり、これが魔戒騎士が後に最強と呼ばれる所以の一つである事は間違いないだろう。

・魔戒騎士

『魔戒騎士』とは、ソウルメタル製の剣と鎧を身に纏い、魔物たちから人々を守るために人生を捧げた者達である。多くの場合、幼少の頃より厳しい訓練を開始し、青年になる頃には超人的な身体能力を身に付ける。それと同時に、師となった人物から『守りし者』としての心を受け継ぐ。この『守りし者』としての心を理解できて初めて、ソウルメタルで出来た剣『魔戒剣』を持ち上げる事が出来るのだ。その『守りし者』としての心というのは口伝されてはならず、その詳細は不明である。

こうして『魔戒騎士』達は人々を魔物達から守ると同時に、その性質から、魔法を使う者達を律する者として、戦い続けたのだった。

しかし、その『魔戒騎士』の歴史にも幕が下りる時が来た。旧世界と魔法世界が繋がり、それを機に世界中の魔法組織が手を組み合い、より強固なネットワークが組み上げられたのだ。

そんな世界の動きに、『魔戒騎士』達は自分達の時代に幕を引くべきだと考え始めていた。『魔戒騎士』の魔法を無力化する力は、魔法を使うものにとって脅威以外の何者でもなく、マナの濃度も低下し、魔物の出現頻度も昔に比べ格段に減った。そして何よりも、自分達の次の世代である子供達に、人間らしい普通の生活を送ってもらいたかったのだ。『魔戒騎士』として、人々を守り戦い続ける事は重要な事である。だがしかし、生まれてくる子供達には、戦いのない平和な暮らしをして欲しいと言うのが本心だったのだ。

そして『魔戒騎士』達は一つの決断をする。それはまさしく、『魔戒騎士』の終わりとも言える決断であった。

その決断とは、『黄金騎士を除く全ての魔戒騎士の除名、及びソウルメタルの封印』だった。

ソウルメタル封印の儀式には、旧世界・魔法世界の各代表魔法使いが集まり、その顛末を見届けた。

そして儀式の最後に、『魔戒騎士』の最高位である『牙狼』の称号を持った男が言った。

「世界は魔法で包まれ魔法で守られている。だがもしも、その魔法が誤った使い方をされ、人々に不幸が降りかかったのなら……」。

覚えておけ、ここに集まる全ての魔法使い達よ。そして伝えるのだ。もしも、魔法使い達がその力を無益な争いに使うのならば、黄金の狼がその喉元に喰らい付くだろう、と」

男はそう言うと、音も無く闇の中へと消えていったという。後にこの儀式のあった日の事は『陰我消滅の夜』呼ばれ、歴史の1ページに刻まれる事になる。

こうして世界から、たった一人を除いた全ての『魔戒騎士』が姿を消したのだった。

・牙狼

『牙狼』とは、魔戒騎士の最高位の者が持つ称号である。そして、この世に唯一残った魔戒騎士である。この、最後の牙狼の称号を持った魔戒騎士は、己の体に他の魔戒騎士達の『魔戒騎士としての人生』を呪術により背負い、それを使い切るまで老いによる死は迎える事は無くなった。

ソウルメタル封印の儀式後に生まれた魔法使いの子供達は、親から「悪い事に魔法を使うと、金色の狼に首を落とされるぞ」と言われて育ってきたという。魔法世界では半ば御伽噺のような存在になっているが、旧世界の魔法使い達にとっては、ナポレオン等のように歴史の教科書に載っている英雄のような存在である。

陰我消滅の夜からその姿を見せる事は無く、最早この世にはおる

まいと思われていたが、突如魔法世界に出現。大分烈戦争に介入し、先の言葉の通り魔法を争いに使う者達の喉元に喰らい付いた。だが、その戦争の最終局面において、敵側兵器から戦場にいる全ての者を守るために、敵側兵器と相打ちになり、その後消息不明となる。

< 極秘情報 >

・ 冴島 鋼牙

性別：男

年齢：25（外見上）

身長体重：178cm / 60kg

髪：茶色

能力：牙狼に変身できる。仮面ライダーに変身できる。

基本的に一度牙狼に変身してから、二段変身でライダーになる。しかし、牙狼の姿に変身しなくてもライダーの姿になることは出来る。が、代わりに制限が付く。

・パターンA

鋼牙 牙狼 ライダー 鋼牙 牙狼……（出せる力は100%）

・パターンB

鋼牙 ライダー 他のライダー 他のライダー……（出せる力は40%）

パターンAの場合は上記の順番で無ければ他のライダーに変身できないが、100%の力が出せる。パターンBの場合、牙狼を介さずに直接変身すれば他のライダーに自由に変身できるが、その性能は40%ほどで、牙狼になる場合は変身を解除しなければならない。

パターンBの制限については、身体能力は勿論の事、特殊能力の機能低下や使用不可になる物もある。

例：クロックアップの速度の大幅低下・マーキュリー回路の作動不可。等々

アーティファクト：英霊の記憶（契約者：ナギ・スプリングフィールド）

自身の記憶の中から、牙狼の世界やライダーの世界から力を召喚する事が出来る。いずれの場合も戦闘に使用するものしか召喚できない。

性格：普段は冷静で口数も多くは無いが、無口なわけではない。実は世話焼きで、面倒見が良い。

17： 銀狼

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグは元メセンブリーナ連合の捜査官であつた。

かつての大戦時において戦災孤児となっていたタカミチを拾い、ほぼ同時期に紅き翼へと参入した。捜査官としての諜報能力と隠密性を買われてのスカウトだった。

そして、戦乱の世の中、幼いタカミチに自衛の手段を覚えさせるべく、自身の使う無音拳の技術をタカミチに教えた。無音拳とは、ポケットやそれに準ずるものに手を入れ、それを居合い切りの要領で加速させる事により衝撃波を発生させ、対象にぶつけ破壊する技術の事である。

ガトウには離婚した妻と、母親側に引き取られた子供が一人いた。思えば、タカミチを拾ったのも、自身の子の姿を重ねたからかもしれない。今では連絡を取り合うことも無く、またその行方も知らないのだが。

そんなガトウが、幼いアスナの面倒を見ることになった事に対し、ガトウ自身、何か因果めいた事を感じずにはいられなかった。

大戦が終結し、アリカ王女がケルベラス無限監獄に閉じ込められた際に、妹であるアスナはどういうわけかその身柄を拘束されるわけでもなく、何の干渉も無かった。これは、アリカ王女が王国の滅亡と自身の処刑の事を予期し、その火の粉がアスナに降りかからぬように『アスナは世界崩壊の術式と共に封印された』という偽の宣言を大戦集結直後に出したからであつた。これで戸籍上、アスナは

この世からいなくなったと同意義になり、今後その『黄昏の姫御子』としての力を悪用される事はなくなった……はずであった。

しかし最近になり、メガロセンプリアの諜報機関が『アスナ生存』の可能性を嗅ぎ付け、裏で暗躍し始めたのである。

紅き翼のメンバー達は、メガロセンプリアの詮索からアスナを逃がすため、その手段の話し合いを行った。そしてその結果、アスナを魔法世界からは干渉出来ない旧世界へと逃がすという結論を導き出したのだった。

そのため、旧世界の出身で、関東魔法協会の理事である近衛 近右衛門と面識のある詠春が、一足先に旧世界へと赴き、彼女を近右衛門のお膝元である麻帆良学園都市で保護してもらうように願い出に行き、その了承を取り付けることが出来た後に、ガトウとアスナ、そしてタカミチの三人でゲートに向かい旧世界へ渡るという段取りを組んだ。

麻帆良学園都市にさえ送り届けさえすれば、メガロセンプリアもおいそれとアスナに手出しが出来なくなる。

だが、その件とは別にガトウには不安な事が一つだけあった。

それは他でもない、タカミチのであった。

SIDEガトウ

戦争が終結しおよそ一年と数ヶ月。当初は目に見えて気の沈んでいたタカミチも、ようやく外見上は立ち直ってきたかのように見えた。だがそれと引き換えに、まるで何かから急ぎ立てられるかのように、完全なる世界の残党や、指名手配されている賞金首などの戦いに明け暮れるようになった。それは、タカミチの経験の低さという面を解消するという点ではプラスになるだろう。だがしかし俺の視点から言わせて貰えば、この変わりようは異常と言っほか無かった。

あの子は本来闘争を望むような子ではない。例え敵であっても命を奪う事を躊躇うような、そんな子なのだ。それが今ではどうだろうか？

あの子は変わってしまった。あの男の最期を目にして、何も出来なかった己の不甲斐なさを悔いてか、あの子は力を欲するようになってしまったのだ。

俺はとある宿屋の一室で、タバコに火をつける。部屋には俺一人

しかない。以前、子供の前でタバコを吸うのは控えた方が良く、と鋼牙の奴に窘められてから、タバコは一人のときに吸うことにした。まあ、禁煙を勧められるよりは100倍マシだろう。

吐き出した灰色の煙が部屋の中に渦巻く。……愛煙家には住み難い世界になるな、これからは。

アスナは別室で昼寝中。幼い子供には睡眠は何より大切な仕事だ。体の成長に睡眠は欠かせない。……そしてタカミチは、例によってギルドに行き賞金首の確認だ。

俺はあの子の行動を黙って見てやる事しか出来ないでいる。あの子は今、自分の心にポツカリと開いた大きな穴を、必死で誤魔化そうとしている。

俺があの子を拾ったのは、1981年、あの戦争の初期の頃だった。戦争で住んでいた町を焼かれ、両親と思しき死体の傍で、まるでその両親に守られるかのように抱かれ気を失っていた。当時のあの子は、確かに悲しみはしたもの、子供とは思えない程早く立ち直った。おそらく、当時の情勢を把握し自分の境遇にある意味納得し、その境遇を受け入れたのだろうな。そして、紅き翼に入った事で、世界を救うという目的も出来、そして何よりも牙島 鋼牙という存在に出会えた事が、あの子の心の穴を埋める事になったのだろう。

俺は、あの子の保護者にはなれても、あの子の親代わりにはなりきれなかったようだ。

そしてあの戦争の最後で、あの子は遂に自身の心の支えを失ってしまったのだ。戦争が終わり、平和な世の中が訪れる。だが、代わ

りに悲しみのやり場も同時に失ってしまったのだ。おそらく、両親を失った分の悲しみも一気にその心に押し掛かったのだろう。

その心の鬱積の矛先を、あの子は戦いに求めた。

確かにあの子は経験を積み、確実に強くなりつつある。そして、鬼気迫るあの子の精神もそれを後押ししている。だが、本当にそれで良いのだろうか？

以前、あの子を鍛えるにあたって、鋼牙がこう言っていた。

『人は、何のために強くなろうとするか。その心構え次第で強くも弱くもなる。魔戒騎士は、人を守るために戦う者だ。……憎しみや復讐の心で強くなったとしても、その後に残るのは虚しさだけだ』

……あの子は今、心にお前を失った事への後悔と、憎しみが渦巻いている。

……教えてくれ鋼牙。俺は、あの子に一体何をしてやれるんだ？

タバコの灰が静かに音も無く崩れる。これが最後の一本だったか……。

俺は立ち上がると、銜えていたタバコを灰皿に押し付け、そのまま部屋を後にした。

SIDEガトウ OUT

SIDEタカミチ

僕は羨ましかった。前見て歩いていられるナギさんが。

戦争が終わってからの僕は、まるで抜け殻のようになっていた。人は絶望を知った時、膝から力なく崩れ立ち上がる事は出来なくなる。昔読んだ本にそう書いてあったのを思い出して、本当にその通りなのだと思います。

両親が死んだ後、僕は生きようと必死で恐怖も悲しみも無かった。そして鋼牙さんと出会った後、戦争を終わらせようと紅き翼で懸命に頑張った。

そして、鋼牙さんがいなくなってしまった後、僕には何も残っていなかった。

いや、僕の手には一つだけ、契約失効となり白紙になった仮契約カードが一枚残されているだけだった。

仮契約カードが白紙になるのは、この世から契約者がいなくなつた時だけ。みんなはきつと生きていると言っているが、僕は知っているんだ。この世に鋼牙さんがいないという事実には。

僕は無力だった。ただひたすらに無力だった。

僕にもっと力さえあれば、鋼牙さんは死ななくても良かったかもしれない。僕はどんな形であれ、鋼牙さんに生きて帰ってきて欲しかった。僕は鋼牙さんみたいな立派なことなんか言えない、僕は例えあの場で見ず知らずの人達が犠牲になつたとしても、鋼牙さんに生きて欲しかった。僕は、奇麗事なんか言えやしない。僕は……僕は……。

僕は、力が欲しい。

じめじめとした森の奥、ここはギルドで害獣指定された魔物が巢食っているらしく、駆除の依頼が結構な金額で出されていた。

受付の人に「坊や一人で行くつもりか!？」と驚かれたが、こちらの身分を明かすと再び驚いた顔をしてあっさりと承諾してくれた。

対象になっているのは、体長2mになる巨大蠍。基本的には森から出る事はないのだが、繁殖期のこの時期になると、森の外にも出てくるようになり人間を襲うようになるので、定期的に駆除の依頼が出てくるらしい。

森の奥へと進んでいくと、何か金属のぶつかり合うような音が近くに聞こえてきた。茂みに身を潜ませてその様子を伺うと、巨大な蠍二匹が互いの鎌をぶつからせ争っている最中だった。おそらく縄張り争いなんだろう。

都合の良い事にこっちに気がつく様子も無く、戦いに集中している。僕はしめたと思い、二匹の蠍の頭に狙いを定める。

そして、思い切り居合い拳を二匹の蠍目掛けて打ち出した。虫の類は外皮は強靱なのが多いけれども、その関節などのつなぎ目が脆い。巨大な蠍達もその例に漏れず、あっさりとそのそつ首を落としてしまった。

思ったよりもあっけなく依頼は終わってしまった。この依頼は公的事業の一部として国から依頼されているものであり、また生態系の保護のためあまり多くの数を殺してはいけない。そのため例外を

除いて、依頼一件で2匹までの討伐になっている。しかし、それでこの依頼が消えるわけではなく、国が定めた数に依頼が達するまでは幾らでも受ける事が出来るらしい。

依頼報告の際に引き渡すアイテムは、蟪蛄の触覚を一匹につき二つつづ。僕はそれを回収すると、来た道を引き返す。……あんまりこの森は長居したいような場所ではないし。

森から出てしばらく歩くと、周囲に不穏な気配。……殺気といつても過言ではない気配を感じた。ここ一年近くの実戦経験で、ようやく僕にも気配や空気を感じ取れるようになってきた。

「……出てきてください。隠れているのは分かっています」

僕の呼びかけに、返って来たのは数十本の投げナイフだった。そのナイフを避けながら、飛んできた方向目掛けて居合い拳を放つ。居合い拳はそのままナイフの飛んできた場所、木の上へと叩き込まれ、そこから襲撃者らしき人が落下してくる。

右の腕が折れている様子で、変な方向に曲がっている。顔の方は覆面をしていて分からないが、どうやら男の人らしい。

「僕の事を付けねらうという事は、完全なる世界の残党か、それともメガロメセンブリアのスパイか」

僕の言葉に男の人は答えず、黙って僕の事を睨み返すだけ。

「……話すつもりが無いなら、このまま気絶してもらってガトウさんからの尋問を受けてもらいます」

元捜査官のガトウさんは戦闘だけでなく尋問も得意だ。……見ているこっちが痛くなるような尋問だけだ。

僕は襲撃者を気絶させるべく、もう一度威力を弱めた居合い拳を打ち込もうとした。

「っ！？」

すると突然、目の前の襲撃者が勢い良く立ち上がると、折れているはずの右腕をこちらに構えた。すると、なんとその折れている右腕の肘から先がこちらに向かって勢い良く発射されて、僕のお腹を思い切り殴りつけてきた。

「ぐっ！？」

肺の中の空気が全部吐き出せられ、そのまま数メートル吹き飛ばされる。

「残念ダガ、私ノ体ハ、君ノ、居合い拳デハ、だめーじヲ、受ケル事ハ、無イ」

襲撃者の口から出た言葉は、おおよそ人間の声ではない、機械的な声だった。

「……ま、まさかお前は……！」

「ソウダ、私ハ、人間デハナイ。君トがとう、コノ二人ヲ始末シ、

君達ノ連レテイル少女ヲ確保スルノガ、私ノ使命」

という事は、メガロセンブリアからの……！ やっぱリアスナちゃんの情報漏れていたんだ……！！

「そんな事は、させるもんか！」

そう叫びながら、横っ飛びに居合い拳を繰り出す。

しかし居合い拳は、襲撃者の体を少しだけ揺らすだけで、ダメー
ジは全く感じられない。

「無駄ダ。私ハ、君トがとうヲ始末スル為ニ、特別ナちゅーにんぐを受ケタ戦闘人形。私ノ体ハ衝撃ヲ吸収シ、君トがとうノ使ウ居合イ拳ヲ無効化スル、特殊ナ素材で作ラレテイルノダ。ソシテ……」

襲撃者はそう言うのと、僕に向かって残った左腕を向ける。すると、音も無く、目にも見えない衝撃波が僕の体に思い切り叩きつけられ、僕は再び吹き飛ばされて宙に舞った。

「か……は……っ」

衝撃波と、地面に叩きつけられた時の二重の衝撃で、僕は痛み
体を擦れさせる。

「コレハ、君ガ打ツタ、居合イ拳ノ衝撃ヲ吸収シ蓄エ、ソノママ君ニ返シタダケダ。自分ノ攻撃デ苦シム気分ハドウダイ？ 君ノ葬ツテキタ、数多クノ者達ト同ジ痛ミヲ感じナガラ、朽チ果テルガイイ
……」

なんていう事だ。僕とガトウさんを始末する事に特化しているなんて……！！ 居合い拳が通用しないんじゃないや万事休す、僕に戦う手段は残されていない……。

襲撃者が、腕にナイフを構える。僕にはすでに戦意は無く、もう既に己の死を待つばかりだった。

……それも良いかもしれない。

父さんや母さん、そして鋼牙さんと同じところへ行くのも……

「タカミチ、諦めるのは心臓が止まるその時でも遅くは無いんじゃないか？」

そんな声が聞こえたかと思うと、僕の真横を、何かが空気を震わせて通り過ぎていった。

「ナ、何！？」

その衝撃に襲撃者は手にしたナイフを弾き飛ばされる。

馴染みのある匂いがした。そう、これはマルボロの……。

「生きてるかタカミチ」

視線を後ろに向けると、そこにはタバコを啜えたガトウさんが立っていた。

「ガ、ガトウさん……！？ どうしてここに……」

「何……ちょっと散歩にな」

そう言つとガトウさんは、襲撃者のほうに視線を移す。

「ウチの弟子が世話になつたな」

「気ニスルコトハナイ、イズレオ前モ始末スル予定ダツタノダ。手間ガ省ケル」

「ぬかせ、ポンコツ人形が」

そついうや否や、ガトウさんは目で追えない様な速度で、居合い拳を何十発も一気に襲撃者に向けて放つ。

が、しかし予想通り、居合い拳は全て襲撃者の体に吸収されていく。

「ガトウさん……あ、あいつの体は衝撃波を全部吸収して……しかもそれを全部こっちに跳ね返すんです……！！」

「……なるほど、確かにこいつは、今のお前には少しばかり早い相手だな」

……僕は情けなかった。強くなって経験を積んだはずなのに、たった一人の敵に手も足も出ない。

「……勘違いするなよタカミチ」

「え？」

「お前が恥じるべき事は、決して自分の力が弱い事じゃない」

ガトウさんは再び右の拳をポケットに入れる。

「お前が恥ずべき事は、諦めて道を閉ざそうとしてしまった事だ。諦めなければ、死にさえしなければ、その次の瞬間お前の目に映るのは新しい未来だ。目を閉ざした者に、未来は決して見えやしない」

「ハハハ、何ヲ言ッテイル。才前達ノ未来ハ、死シカ残サレテハイナイノダー!!」

襲撃者が、その機械的な声を大きく張り上げて僕達に言う。

ガトウさんは左の手で、啜えていたタバコを持つを、大きく息を吐き出す。

「少し黙ってな」

殺気の籠ったガトウさんの声に、僕は少しだけ背筋が凍った。長年ガトウさんと一緒にいるが、ガトウさんが殺気を出した事は一度も無かったからだ。

ガトウさんは手にしたタバコを、ピンと襲撃者の方へ弾くと、間髪入れずに右の手で居合い拳を放った。

「無駄ダトイウノニ、才前モ分カラナイ……」

襲撃者の声は、その次の光景で止まる事になった。

居合い拳で飛ばした衝撃波にタバコが触れた瞬間、突如轟音をたてて大爆発を起こしたのだ。

「わっ……！？」

頬に当たる熱い風と、凄まじい熱量に僕は一瞬怯んでしまう。

「ガトウさん、今のは一体……？」

「何、居合い拳で超圧縮した空気の塊を飛ばして、タバコの火で引火させただけだ」

「い、居合い拳にこんな使い方があったなんて……。やっぱり僕は……。」

「おいおい、またその顔か」

「え？」

「お前は自分に自信が無くなったり、ネガティブになった時、そんなしょぼくれたような顔をする」

「そ、そんな顔をしてたの僕？」

「何度も言うが、弱い事は恥じる事じゃない。世の中にはお前や俺なんかよりも、よっぽど強いやつの方が多い。……ここ一年のお前を見ているとな、闇雲に力を求めてすぎて、いつか人としての領域を踏み外してしまいそうで不安なんだよ」

……ガトウさん、だから心配してここまで来てくれたのか。

……確かに、僕は力が欲しい。……でも、僕は何でこんなにも力を欲しがるようになったんだろう。

……そうだ、僕は何か大切な事を忘れていた。

僕が強くなりたかったのは、恨みや復讐の為なんかじゃない。僕は鋼牙さんのように、みんなを守るために強くなりたかったんだ。

「……ありがとうございます……ガトウさん」

「いや……例を言うにはちょっと早いらしいな」

「え？」

次の瞬間、僕にもガトウさんの言った言葉の意味が理解できた。あの襲撃者、まだ倒されていない！？

「ガガガガガ……油断……ガガガガ……スル二ハ……ガガガガガガ少シバカリ早イ」

目の前には、先ほどの大爆発で既に半壊し、立っているのがやつとといった様子の襲撃者。

「……！！まさか！？」

ガトウさんが突然僕の前に立ちはだかる。

刹那、半壊した襲撃者から途轍もない大きさの衝撃波が僕達に襲い掛かった。

「うわあああああつ！？」

僕は、ガトウさんに抱きしめられる形で吹き飛ばされて木に激突する。木はミシミシと大きな音を立てて、土煙を上げながら折れる。僕達に襲い掛かった衝撃の大きさを物語っている。

「ガ、ガトウさん大丈夫ですか！？」

ガトウさんに守られる形で無傷だった僕は、手に何かヌルリとした温かいものが触れるのを感じた。

「タ、タカミチ……ぶ、無事……か？」

「ガトウさん！？」

目にしたガトウさんは口から血を吐き出しており、背中からも夥しいほどの血が流れていた。

「まさか……死んだ振りまで……使えるとは……」

「ガトウさん！！しゃべらないでください、傷が……！！」

「いいタカミチ……それよりも……お前はすぐに宿に戻れ……」

「な、何言ってるんですか！？ガトウさんを置いていけるわけないじゃないですかー！」

「馬鹿野郎……ここで二人とも死んだら……アスナを誰が守ってるんだ……」

そうだった、ここで僕達が襲われたとなれば、宿に残しているアスナちゃんも危ないという事だ。

……

……

「僕は……それでも僕にはガトウさんを見殺しになんて出来ません
！！」

「……！？」

「僕は……僕は、ガトウさんも助けて、アスナちゃんも守って見せますー！！」

そう、守られてばかりじゃダメなんだ。僕は今までガトウさんやみんなに守られてきた。なら、今は僕がガトウとアスナちゃんを守らなくちゃいけないんだ。

『よくいったぜ坊や』

「……!？」

どこからか、突然知らない人の声が聞こえてきた。周りを見渡しても、殺気を辿っても、僕達以外には目の前でゆつくりとこちらに迫ってくる襲撃者の姿しかない。

『男がそんなにキョロキョロすると、女の子にもてないぜ?』

「だ、誰ですか一体!？」

『坊やのポケットを見てもな』

ポケット? 僕のポケットの中に一体何があるって……!?

「!?!?こ、これって……!?!？」

僕は信じられないものを目にしている。僕の手の中には、光り輝く一枚の白いカード。

白いカードはその光を強めながら、その表面に模様を映し出していく。

そう、これは……

「これは……！？こ、鋼牙さんとの仮解約カード……！」

そう、これは契約失効になったはずの仮契約カード。僕が最後まで使う事の出来なかったアーティファクト『銀狼剣』のカードだ……！！

「と、という事は、ま、まさか……」

『ああ、鋼牙の奴が帰って来たぜ』

カードから聞こえてくる声に、僕は頭が真っ白になった。鋼牙さんが生きている？鋼牙さんが帰ってくる？

『おいおい坊や、嬉しいのはわかるけど、今はそれどころじゃないんじゃないか？』

「そ、そうだ……！」

何が何だか分からないけれど、兎に角ここは何とかして切り抜けないと……！！

「でも、あいつには居合い拳は……」

そう、あの襲撃者には居合い拳は通用しない。今の僕には結局のところ対応する手段がないのだ。

「手段は……一つだけある……」

消え入りそうな声でガトウさんが呟く。どんどん呼吸も細くなってきた。早く何とかしなければガトウさんの命が……！！

『そうそう、手はある。今の坊やには、この銀狼剣があるだろう?』

「で、でも僕はこの剣を持つ事が……」

そう、僕はこの銀狼剣を持つ事が出来ない。この剣は持つ人間の心に反応して重量を変えるらしく、僕の心では重過ぎてピクリともしなかったのだ。

『いや、今の坊やなら持てる筈だぜ。坊やは『守りし者』としての心を理解した。剣はその心に答えてくれる』

今なら、僕にも銀狼剣が持てる?……この状況を何とかすることが出来る?

僕は手を震えさせながら、カードを構えて大きく叫ぶ。

「アデアット!!」

眩い光が、僕の手の中で湧き上がる。そして、僕の両手には一對になった銀色の夫婦剣がしっかりと握り締められていた。

「も、持てた……!!僕に銀狼剣が持てた!!」

『でも坊や。アンタ剣なんて振るった事ないだろ?』

う、そう言われてみれば、剣なんて一回も使った事ない……。持てるようになってから修行しようと思ってたから、全く練習なんてしてなかった。

『心配すんなって。最初で最後の出血大サービス。俺が手伝ってや

るよ』

カードから聞こえてくる声がそうだったかと思うと、突然僕の両腕が光り、銀色の籠手のようなものが装着されていた。

「こ、これは？」

『こいつは銀狼剣で召喚できる『絶狼』の鎧の腕の部分だ。修行してない坊やに鎧の装着は無理だから、俺が腕の部分だけ召喚したのさ。さて、あとはあのポンコツをスクラップにしてやるだけだぜ！』

凄……！この籠手から力がどんどん湧いてくるみたいだ……！
！これならいける……！！

僕はガトウさんを木の根元に横たえ、敵に向かって剣を構える。襲撃者の方は、どうやら素早い移動が困難なようで、ぎこちない様子で不恰好に歩いてくる。

『坊や！！何も考えずにあいつのトコまで走れ！！』

「は、はい！！」

声にしたがって僕は思い切り大地を踏みしめ、跳ぶように相手に向かって駆けた。

敵のほうも僕を迎撃しようと手を振り上げるが、その腕は次の瞬間銀狼剣によって切り落とされる。

体が自然に動く？まるで、長年修行してきたかのように、一切の

無駄も無く剣を振るう自分に驚きを隠せない自分。

『今だけ、俺の経験則がこの鎧に宿ってるのさ。つまり今だけ坊やは剣の達人ってわけさ』

カードからの声を聞きながらも、僕は敵の胴体を刺し貫く。

『ガガガガガガガガ……理解不能……理解不能……才前ノ未来ハ死ノハズ……ガガガガガガガガガガガガガガ……私ノ未来デハ……』

「……僕の未来は、あなたみたいな人形に決められるものじゃない……」

僕はそう叫びながら、二振りの剣を十字に振るう。

一瞬の静寂。それを打ち破ったのは敵。

十字の切断面から、敵は崩れるように四分割され、もう二度とその口を開く事は無かった。

「た、倒した？」

僕は力が抜け、ヘタリとその場に座り込んだ。

『ああ、倒したぜ坊や。俺のおかげとはいえ立派なもんだったぜ』

「そ、そんな事ありませんよ……い、今になって手が震えてます。……死ぬかもしれないっていうのが、今更になって……こ、怖いです」

『……悪い事じゃないぜそれは。死ぬのが怖いっていうのは、生きて明日を歩きたいって思う奴の心の表れさ。死ぬのが怖くないって言う奴なんて、自分の未来を諦めているような奴の吐く言葉だぜ』

「……そ、そうでしょうか？」

『……いいか坊や？勇気っていうのはな死ぬのを恐れずに向かっていく事じゃない。勇気って言うのは、恐怖で膝を震わせながらも、それでも相手に立ち向かっていく事を言うんだ。……お前には勇気があるんだよ。もっと誇っても良いぜ』

勇気……僕に……

『……さて急で悪いけど。そろそろお別れの時間かな？』

「え！？」

『もともと俺は、この銀狼剣の持ち主の残留思念が、仮契約カードが復活した事の影響で一時的に力をもっただけなのさ。意識を持っていられるのもほんのちよっとだけだ』

「そうだったんですか……」

『そんなしょぼくれた顔すんなって。そんな事よりも、お前にはもっと嬉しい事があるだろう?』

「あ! ? ぞ、そうだった! ! ！ここここ、鋼牙さんが生きてるって本当なんですか! ? ！」

『ああ、仮契約カードが復活したのが何よりの証拠だろ? ま、どこにいるかはわかんないけどな』

「ぞ、それでも嬉しいです……! ! ！この事を早く皆さんに伝えなくちゃ! ! ！」

『おっと、その前にお前にはやらなくちゃいけない事がたくさんあるだろ? ……さしあたって、そこのおっさんの手当てとかな? 』

あ! ! ぞ、そうだった! ! ！ガトウさんを早く病院に連れて行かないと! ! ！

『そうそう……。ああ、どうやらもう本当に時間みたいだな。短い間だったけど、俺の後輩と話が出来て嬉しかったぜ』

「はい、僕も貴方とお話できてよかったです! ! ！」

『ありがとうよ坊や。……あとついでに、今度鋼牙に会ったら、あいつに伝えておいてくれないか? 』

『^{すずむら}涼^{れい}邑零がよろしく言っていた……ってな』

カードからの声はそれを最後に、もう聞こえる事は無かった。

僕は、ガトウさんを背負って街へと急いだ。

そして、冴島 鋼牙生存の知らせを皆に伝えるために。

この日は、僕にとって忘れる事の出来ない一日の一つになった。

何のために戦い何のために強くなるのか。僕なりの答えを見つける事が出来た日であり、僕がアーティファクトを持てるようになった日であり……。

そしてなにより、冴島 鋼牙がこの世界に戻ってきた日でもあるのだから。

S I D E タカミチ O U T

そして物語は、黄金騎士へと移っていく。

黄金騎士の物語の第二幕は、今ようやく幕を開けようとしていたのだった。

17： 銀狼（後書き）

この第弐章の話は全て、ほぼ同じ時間に起きた出来事です。

18： 帰還（前書き）

第参章改定版

加えて、14話の白夢も加筆修正しましたので、合わせてご覧下さい

18： 帰還

SIDE???

BCTL目掛け剣を振り下ろした瞬間、一瞬だけ視界の全てが闇に飲み込まれた。持った剣から伝わる筈の、何かを切り裂く衝撃はなく、まるで虚空を切るような感覚だった。

何かを思考する暇も無く、まるで、ただ自分の目の前を通り過ぎただけだというように周りを覆っていた闇は一瞬で晴れる。が、その一瞬は全てを変えるには十分すぎる時間だったようだ。

夕暮れだったはずの空はすっかりと夜の帳が下りており、夜空には星が輝いている。

そして上空数千mにいたはずの自分は、せいぜい数十mの場所におり、眼下を見下ろすと、あの激戦の繰り広げられた荒廃した戦場は無く、森の中にある湖のような場所であった。

BCTL。時間はどうか未だ不明だが、あれは本当にあの場所から俺を空間転移させたらしい。

いつの間にか翼人の姿からも元に戻っており、俺は空気の切り裂くような高い音を耳にしながら、空中から地面へと落下を始める。

体力・気力共に、既に搾り出せる限界のその先へと達しており、戦う相手のいない今となつては最早受身を取るのが精一杯といった

所か。

まあ、たかが数十mから落ちたくらいでは今更死にはしないだろう。

俺は、何とか着地の態勢を取ると、眼前に迫った地面に対して身構える。

まあ、あれだ。空から地面に落とされるのは、猛スピードで壁に叩きつけられるのに似ている。違いといえば、地面は壁と違って突き抜けてくれない事くらいだ。

つまり、とても痛いという事だ。何とか片足立ちの姿勢で着地は成功したものの、地面には小規模だがクレーターのような物が出ている。落下の衝撃の大きさを物語っている何よりの証拠だ。

それにしても、一体ここはどこなのだろうか。

魔法世界なのか旧世界なのか。人も建物も見当たらないこの場所ではどちらとも判断が付かない。そして何よりも時間は一体どうなったのだ？

戦争はどうなった？紅き翼のみんなは？

そう考えると、休んでいる暇なんてない。意識があるうちは、這ってでも進まなければ。もしかしたらまだ戦争は終わっていないのかもしれない。まだ紅き翼は戦い続けているのかもしれない。

死ななくてもいい命が消えているかもしれない。

せめて、それを確かめるまでは、立ち止まるわけには行かないんだ。

鎧は脱げない。おそらく俺が今立っていられるのは、この牙狼の鎧に支えられているからだ。今これを脱いでしまえば、俺はここで倒れ、立ち上がる事が出来なくなってしまう。

俺は剣を支えに何とか立ち上がると、辺りを見回す。湖を中心に人工的に切り開かれたように低い草が生え、周りは森に囲まれている。

湖の反対側に人の行き来がある事を示すように、整備された道がある。あれを辿れば人のいる場所へとたどり着けるだろう。

せめてそこにたどり着き、この場所と今が何時なのかを確認しなければ。

そう思い歩き出そうとしたその時。戦場にいた事で研ぎ澄まされた感覚が気配を感じ取った。

動いてはいない。何処かに潜んでいる。多分、俺がいる前からここにいたのだろう。

もしもここが魔法世界で、潜んでいるのが『完全なる世界』の息の掛かった者だとしたら。

おそらく逃げても追ってくるだろう。この姿はあの戦場で目立ちすぎた。知られているのは恐らく間違いない。

ならば、ここは迎え撃つ以外に選択肢はない。

もしも『完全なる世界』とは無関係だとしても、場所と時間の情報を引き出すには、潜んでいる奴から聞き出すのが現時点でもっとも早い事に間違いない。

そうなればやるべき事は一つだ。

俺は気配のする方向へ体を向けると、ギシギシと悲鳴を上げるように軋む腕で牙狼剣を構える。

「そこにいる者に聞く！！お前は俺の敵か、否か！！」

鉄の味がこみ上げる喉を振り絞り、俺は木の陰に隠れているであろう者に告げる。

気配が動いた。

その動きは、俺に襲い掛かってくるような鋭敏な速度ではなく、

自らの姿を俺に晒そうという行為のそれだった。

草むらの揺れる音が聞こえ、暗い闇の中からそのシルエットが徐々にこちらに現れてくる。

そして、月の光に照らされ露になったその姿を見て、俺は運命い
うものの悪戯に心から驚愕する事になる。

金色の長い髪を静かに揺らす一人の少女。だが、その瞳は少女呼
ぶにはあまりに深い闇が潜んでいる。

そう、彼女の名前はエヴァンジェリンA・K・マクダウェル。

吸血鬼の真祖にして最強の『悪』の魔法使い。

俺は思った。

この夜はもう少しばかり長くなりそうだと。

SIDE 鋼牙 OUT

SIDE エヴァ

魔力震の発生場所を探るために、それらしい魔力の痕跡を辿っていくと、そこは隠れ家に程近い小さな湖のある森だった。

人の反応を確かめてみた所、どうやら魔法協会の連中はまだここには来ていない。まあ、こんな何も無い片田舎だ。調査に来るにも時間が掛かるだろうし、最悪の場合そのまま放置されてもおかしくない。私にとっては好都合以外の何者でもないのだが。

『マナガ渦巻イテキテルゼ。ソロソロ本震モ近インジャーネーカ?』

ワインと酒の肴のチーズの入ったバスケットを持ったチャチャゼ口が私にそう言う。

ワインは数少ないイギリス産のワインであるサリー州のワイン。味はそこそこだが、地元のワインというのもあってなかなか愛着がある。

魔力の残留を調べてみると、確かに魔力震のあったと思われる痕跡、魔力の引つ掻き回されたようなムラのある状態になっている。魔力震の震源はここでは間違いない。

本震は幸いにもまだな様子。おそらく、もう数分と経たない内に起きるだろう。

さて、今回は当たりか外れか。外れならば、ただの地震のような揺れが起きるだけだが、当たりならば持つて来ているチーズ以上の酒の肴になる。

「じゃあ、本命が来る前に場所取りだ。さっさと魔力を辿れ」

『へーへー』

私がそう命令すると、やる気なさげにチャチャゼロがフヨフヨと森へと入っていく。私はその後をのんびりと付いて行く。

辺りは木に遮られ月明かりも射さず、まさに闇の中なのだが、私のような吸血鬼にとっては闇の中も昼と変わりはない。まあ、歩いているのが獣道ではなく、ちゃんと整備されている人通りのある道なのだから、どの道心配するような事もないのだが。

そうして歩く事数分。やがて森を抜け、私たちは森の中心部に当たる、湖の畔へとたどり着いた。

人の気配は無いが、もしも魔法協会の連中と鉢合わせでもしたら面倒くさい。仕方が無いが、草むらの影から魔力震の様子を見物するしよう。

「チャチャゼロ、バスケット」

『アイヨ』

私の言葉でチャチャゼロは、持っていたバスケットを私の隣に降ろす。

私はバスケットの中からワインボトルとグラスを取り出すと、コルクを素手で引っこ抜き晩酌を始める。

空を見上げると、満月とまでは行かないが丸い月が夜空を煌々と照らしている。いやいや、なかなかどうして。これはこれで良い酒の肴じゃあないか。

ワインも良いが、やはりこういう景色を肴にする場合は日本酒が良かったかもしれないな。お猪口でちびちびとやるのが堪らなく風流だ。

そんな事を思いながらワインを一口含むと、一瞬景色がグラリと揺れる。酔ったとかそういう類のものではない。

『来タゼ御主人』

バスケットの上に腰掛けていたチャチャゼロが言う。

どうやら魔力震の本震がやってきたようだ。普通だったら強く揺れてそれで終わりなのだが、運がよければ、かき回された魔力に衝撃が加わる事による連鎖反応で、花火に似た現象を拝む事が出来る。

「……ん？」

だが私は、少しばかり違和感を覚えた。様子がおかしい。

通常ならば、魔力震は無秩序に魔力がかき回されるような感じなのだが、今回ののは逆。魔力が一点に向かって、まるで引き寄せられるかのように集まっては離れ集まっては離れを繰り返している。

「チャチャゼロ！」

『分カッテルテルゼ、記録ハバツチリ保存中ダゼ』

これは何かが起きる。

そう、普通ではない、私の知らない何かが起きる前兆なのだ。

ワインなんか飲んでいる場合ではない。

私はグラスをそこら辺に放り出すと、立ち上がり目の前で起きている現象の行く末を、ただ只管に見つめ続けた。

やがて変化が訪れる。集まっては離れを繰り返していた魔力が、離れる事無く一箇所に集まり始めたのだ。

その量は自然的な魔力の集束密度にしてはあまりにも膨大。ある意味不自然な現象。どういうプロセスで行われているのか、全く理解の出来ない不可思議な現象。

その集まり続けた魔力はいよいよ気違いじみた装いを見せ始めた。

言うなれば、手のひら程度の雪玉なものにも関わらず、使われている雪の量は人間大の雪だるまのそれ。ありえない量が圧縮されているのだ。これは本当に自然現象なのか？そう思わずにはいられない程の量。人為的な意思をも感じられる現象。いや、人為的に行われていると考える方が普通の現象。

だが、周囲に人の気配など無く、その前に起きていた事象は間違いないく自然現象である魔力震のそれであった。

何が起こる？私にはもう想像すら付かない。

唯一考え付くのは、もしあれがそのまま爆発したとしたら、私はかなり痛い目に合うだろうという事くらいである。

『二、逃ゲタハウガイインジャーネーカ？』

と、隣のチャチャゼロも不安そうに言ってくるが、答えは勿論N Oだ。

これは、もし今逃げてしまったら永遠に後悔してしまう。そういう類の遭遇なのだ。死なないからこそ永遠に今日の事を後悔し続ける。そんな歯がゆい思いをするのは御免だ。

私は微動だにせずに、空を見上げ続ける。

そして、ついにそれは起こった。

集まった魔力が、何の前触れも無く行き成り弾けたのだ。音も無

く、衝撃も無く。ただ魔法使いが見る事の出来る魔力の流れでそう見えたのだ。

そして私は己の目を疑う光景を目にする。

魔力が弾けた後から、まるで夜の闇すらも飲み込んでしまうのではないかと思える程の、漆黒と呼べるような闇が溢れ出し、その一角を覆ったのだから。

それはまるで、卵から生まれた生き物のよう。空中に意思を持つたかのように漂う闇。

次に感じたのは音。

まるで頭の中に直接響いてくるかのように、私の耳に飛び込んでくる音。

なんと言っのだろうか。金属をぶつけ合わせた時の音を何倍にも高くしたようなキンという音。

それが途切れる事無く響いている。

その音を聞く私の頭の中に、一つの光景が映し出される。

剣撃。

白い世界の中で、まるで輪郭のはっきりしない金色をした何かが、同じように輪郭のばやけた巨大ななにかと戦う光景。

頭痛がする。胃の中が逆流してきそうな程に。音と、映像と、五

感から入ってくる全ての事象が無秩序に私の体の中を駆け巡る。

何なのだこれは？一体私に何を見せようというのだ？

私はそのあまりの苦痛に、頭を抱えてその場に蹲ってしまう。

キーン、キーンと音が響き続ける。

その音は強さと激しさを増し、私の頭の中を掻き混ぜる。

もう嫌だ。お願いだから止めてくれ。

そのあまりの苦痛に、私はそう懇願した。

何百年ぶりだろうか。

そうこれは苦痛だ。私の隣に胡坐をかき座り続ける、永遠という名の苦痛。

それをまるでこの一瞬に凝縮したかのような遙かに辛く苦しい苦痛。

流れ込んできている。あの闇の中から、私に目掛けて。まるで、私に語りかけてくるかのように。

苦痛は不意に止まった。

私は荒い息を吐き出しながら、痛みの余韻の残る頭と、未だ酸っぱいものがこみ上げてくる胃を擦りつつ、何とか立ち上がる。

横ではチャチャゼロが、リンクの切れた状態で放り出されたかのように転がっていた。あの苦しみの中で、チャチャゼロとの魔力のリンクを維持する事が出来なかったようだ。

私はハッとして空を見上げる。

空には未だ、あの闇があった。

あの苦しみは一体なんだったのだろうか、そしてあの闇は一体何なのだろうか。そう思っているうちに、遂に最後の変化が訪れた。

まるで霧が晴れるかのように、風に吹かれるかのように、あの闇が散り散りになり始めたのだ。

そしてその中から現れたのだ。金色の輝きを持った何か、あの月明かりに照らされながら。

私は思った。

今夜はもう少し長くなりそうだと。

SIDEエヴァアウト

18： 帰還（後書き）

というわけで改訂版です。

書いてて思ったのは、うちの鋼牙のスタンスは昔の漫画の主人公ように、強くて頼れる少年の憧れのような感じで、子供達と同じ視線で一緒に成長するようなとは違っただなあ。という事。

成長するのは周囲の方で、ある意味鋼牙はこれ以上成長とかがない主人公なんですよね。

改定前の違和感は、そんな鋼牙を弱体化させたことで生じたんじゃないかと考えてみたり。

あと、展開的にもこれでもう少し早く現代まで進む事が出来るしねw

19： 瀕死

SIDE 鋼牙

剣を構えたまま、俺は高速で思考する。

目の前にいる少女は、ほぼ間違いなくあのエヴァンジェリン。闇の福音だ。

……今のこの状況は、あらゆる意味でタイミングが悪すぎる。

一つ、対峙した相手。なにしろ、あの最強とも言われる魔法使い、エヴァンジェリンA・K・マクダウエルだ。

二つ、自身の状況。気力体力共に限界などつくの昔に越えている状態で、普通に動く事すら辛い。並みの相手だったら何とか切り抜けられたかもしれないが、今回はいかんせん相手が悪すぎる。

三つ、俺が現在進行形で彼女に剣を向けているという事実。最悪の初手と言って過言ではない状況。例えばこちらが詫びて剣を収めたとしても、彼女がそれで納得するのかどうかと言われれば、その可能性は限りなく低い。

まさに最高とは真逆の状況。俺自身の生き残れる可能性としては、正直あの戦争の時よりも数段低い。

しかし、この状況で分かった事も少なからずある。

目の前にいるエヴァンジュリンは、少なくとも封印されて魔力の抑えられているような状況ではない。その高い魔力が、感知能力の高くない俺でも感じ取る事が出来るからだ。

歴史が原作通りに進んでいると言う希望的観測で考えると、彼女はナギの手によって麻帆良に封印されるはず。その彼女が封印されずにいるという事は、少なくとも時間はそこまでは進んでいない事になる。

……勿論、原作よりもっと先の未来で、彼女の封印が解かれた後だという可能性も十分にありえる。もしそうだとしたら、原作などとづくに終わり新しい歴史が紡がれていることだろう。

確実に言えるのは、今の時間軸は、少なくともエヴァンジュリンが麻帆良に封印されてから、その封印が解かれるまでの期間ではないという事だ。

そうなれば、後は場所だ。

そこで俺はあることが頭に浮かびハツとなる。

魔法世界では動き出さなかったので、その存在をすっかり忘れてしまっていたある物の存在を思い出したのだ。

その名は魔導刻。

本来、魔戒騎士の鎧の装着は99・9秒という制限時間が存在する。その時間を示す時計のような物が魔導刻だ。しかし例外として、原作でホラーと呼ばれる怪物の住む世界・魔界においてはその制限時間に関係なく鎧を纏う事が出来る。

おそらくこのネギまの世界において、魔法世界がそれに当たったのだろう。あの世界で魔導刻が発動した事は無い。

もしやと思い意識を集中すると、案の定、魔導刻はその時を刻んでいる。しかも時間は既に制限時間の半分を過ぎており、残り一分も無い。

俺は意識を目の前のエヴァンジュリンへと戻す。

彼女は、まるで俺の次の行動を待つかのように、何もせずじっとこちらを見ている。

……俺には、すでに選択肢など存在しない。彼女に対して剣を構えてしまった時点で詰み、チェックメイトだったのだ。

残念だが、ここから先は俺の意思ではどうにもならない。全ては、目の前の少女の意思に委ねられる。例えばそれがどんな結果になろうとも。

もしそれが最悪の結果に進むのだとしたら、俺は決断しなくてはいけない。

命を取るか、誇りを取るかの二択を。

俺は、構えていた剣をゆっくりと鞘へと収める。

「なんだ？ 私はまだ何も答えていないぞ？」

不思議そうな顔で、エヴァンジュリンは言う。

「……お前が敵だろうとそうでなかつと、もう関係なくなつてしまつた」

ますます不思議そうな顔をしてエヴァンジュリンは首を傾げる。

「相手が『闇の福音』では、今の俺にはどうしようもないからな」

「ほう、私の事を知っているか。ま、私ほどの賞金首ともなると、知らない方がモグリだな」

不敵な笑みを浮かべながら、彼女は静かに笑う。

「だが、勘違いするなよ。別に私は、お前の事を襲うつもりなんて更々無い」

「何？」

彼女の言葉に、俺は自身の耳を疑つた。

「私はお前に興味がある。吸血鬼つてのはな、血なんかよりもずっと、暇つぶしに飢えているんだ。お前のような訳の分からないものを殺すなんて、勿体無くて出来るわけないだろう？」

エヴァンジュリンが、もの凄く悪そうな顔をしながら、同時に玩具を見つけた子供のような笑みを浮かべる。

「取引しようじゃないか。何、悪い話じゃない。お前は私の気の済むまで暇つぶしに付き合ってもらう。その代わり私はお前を保護してやる」

……事体が思いがけず好転してきた。これは僥倖、最悪の事態は回避できた。今の俺にこれ以上の事を期待する余裕は無い。これが天井、精一杯の幸運と思い、この取引に応じるしかない。

……エヴァンジュリンの暇つぶしがどれほどものか、ある意味末恐ろしくはあるのだが。

「……どうやら、こちらに選択肢は無いようだ」

「ふふふ、賢明だな。もしも約束を違えた場合は……分かっているだろうな？」

「……言うまでも無い」

元よりそんなつもりなど無い。それよりも、いよいよ魔導刻の制限時間が10秒を切った。

この制限時間を超過してしまうと、鎧に心と身体を食われ、心滅獣身という暴走状態になり全てを破壊する災厄へとなってしまふ。

どうやら、俺は命も誇りも捨てずに済んだらしい。

しかし、旧世界にいる間は、常にこの危険に付きまといられる事になるな……。

「エヴァンジェリン……でいいか？」

「構わん」

「……今からこの鎧を解除するが」

「ああ」

「……後は頼んだ」

残り一秒。

俺はギリギリのところで何とか鎧を送還する。鎧は光に包まれて消え、身体がひんやりとした外気に晒される。随分久しぶりに生身の姿に戻ったような気がする。

そして、辛うじて身体を支えていた鎧が消えた事により、最早俺の身体は立つ事すら出来ずに、崩れるようにその場に倒れた。

エヴァンジェリンが何か言っているような気がするが、今の俺にその声はただの音としか聞こえず、俺の意識は急速に、まるで夜の帳が下りるかのように黒い闇で覆われ、やがて電源が落ちるかのように、全ての感覚が、消えた。

SIDE 鋼牙OUT

SIDE エヴァ

「おい！任せるってどういう事だ！」

私が目の前にいる狼面の黄金騎士に言うと、騎士の鎧が激しく光る。行き成りの事に、一瞬目を瞑ってしまうが、その一瞬は状況を変化させるには十分な一瞬だったようだ。

まず気が付いたのが、噎せ返るような血の匂い。目を開くと、その匂いの源は一目瞭然だった。黄金騎士の立っていた場所には、一人の男が立っていた。年は二十代、茶色い髪をした中々に整った顔立ちの男だ。そかしそれ以上に目に付いたのが、男の服だった。男の着ている赤い、いや赤黒い色をしたコートから、とても濃い血の匂いがする。

そして、また次の瞬間。ドチャリという水分を含んだような音を立てて、目の前の男が足元から崩れ落ちる。

そして私はようやく事の深刻さに気が付く。

血だ。

男のコートと同じ色をした血が、水溜りを作るかのように男の周りに広がっていく。

不味い。この出血量は非常に不味い。

人間は血液の三分の一を失うと死に至る。この男が流している血量はおそらくその量を超えてしまっている。

私は、急いでチャチャゼロとのリンクを繋ぎ直すと、こちらに来るように呼び出しをかける。

チャチャゼロが来るまでに、できる限りの処置をしなくては。

……だが残念な事に、元々吸血鬼の自分に治癒の魔法など大して必要など無かったおかげで、精々止血程度の処置しか出来ない。

しかも、何故かその止血の魔法ですら、この男には効き目が薄い。

たしか、あの鎧を纏っていた時も妙だった。

こいつの周りだけ、まるで靄が掛かっているような、魔力が霞んでいるような奇妙な感覚。

今はどうだ？

私はそう思い、この男の魔力の流れを確認して愕然とした。

この男には魔力が存在しない。

「馬鹿な……ありえない……！」

私は思わず、一人なのにも関わらずそう呟いてしまう。

生物を流れるエネルギーには魔力と気力の2種類がある。魔力は精神的なエネルギーを司り、魔法の使用などに関わってくる。対して気力の方は身体的なエネルギーを司っており、こちらは肉体に作用するエネルギーである。

普通の人間はこの比率がおよそ半々であり、魔法に秀でたものは魔力、武術に秀でたものは気力にその比率が偏ってくる。だがしかし、どんなに比率が偏ったとしても、その片方のいずれかが0になるという事は通常は有り得ない。どんなに少量であろうとも、魔力も気力も生命を維持する上で欠かすことの出来ない要素なのには変わりないからだ。

それなのにこの男は、魔力が0なのにも関わらず生きている。……今は死にかけているわけだが。

しかし、それだけではないはずだ。魔力が0でも、微妙ではあるものの一様は止血の魔法の効果はある。おそらく、外からの魔力の流入を阻害している何かがあるはずだ。

私はもう一度魔力の流れを探る。すると、男の腰、おそらく剣を中心にして、まるで魔力の源であるManaが、その剣を避けるように四方に散らばっているではないか。

更に注意深く見てみると、剣に触れたManaが、まるで熱した鉄板

に落ちた水滴のように、弾かれ霧散していくではないか。

魔法の効き目が薄いのはこれの仕業か。

私は、急いで男の腰から剣を外そうとする。すると、私が手にした瞬間に、剣は意思を持つているかのようにその重量を変化させ、私の腕ごと地面に叩きつけるかのように、まるで地響きのような音を立てながら剣は地面へ突き刺さる。

重い。この質量に収まっているとは思えないほどに重い。おまけに、私の触れている部分から、容赦なくその魔力を奪っていく。

私は慌てて剣から離れる。剣に触れた部分が、まるで火傷したかのように赤くなり、おまけに治りも遅い。

……これは私のような存在にとって不倶戴天の天敵のようだ。

だがそれと私の好奇心は別だ。

これはいよいよ面白い事になってきた。

この男には何かある。それも、特別大きな何かだ。

そうなれば、尚更この男を死なせる訳にはいかない。

私は、急いで空間転移のための魔方陣の準備を始める。無論、あの剣とは離れた場所にだ。あの剣は男が生き延びた時に改めて取りに行かせれば良い。どうせ、あの重量を持てるような奴はいやしな
いだろう。

今は急いでこいつを治療しなくては。

勿論普通の医者所には連れて行けない。色々と面倒な事になるのは目に見えている。となれば答えは一つ。

裏の世界には、金さえ払えば表の世界のどんな名医も敵わない腕を振るってくれる者達がいる。

そう、闇医者だ。

蛇の道は蛇。私にも一人、顔馴染みの闇医者がある。もっとも、私自身は医者いらずな身なので、所謂酒飲み友達な訳だが。

兎も角、あいつならばこの男の治療が出来るかもしれない。

私は、フラフラと飛んでくるチャチャゼロを視線の片隅に見ると、魔方阵を書く手に力を入れるのだった。

SIDE エヴァウト

20： 医者

とある場所の一室に、一人の男がいた。

顔は痩せ、皺が深くに刻み込まれており、長く伸びた髪は灰色掛かった白髪。そう、男は老人だった。

灯りの灯っていない漆黒の暗闇の中で、男は粗末な椅子に腰掛けながら、手にした猪口から酒を口にする。

一言で言えば異様。正気を疑う光景だ。

人は本能的に闇を恐れる。全てを覆い隠してしまう暗闇は、見えないはずの何かを見せ、本当に見えているはずのものを覆い隠す。その得体の知れない恐怖を、人は何よりも恐れる。

この光景の回答を言ってしまうえば、とても簡単な話である。

男は、その目にサングラスをかけている。勿論、日の光を避けるためではない。

男は盲目だった。

かつて第二次世界大戦において軍医として参加していた男は、敵軍の爆撃により視力を失った。今まで見えていたものの全てが見えなくなると言うのは、恐怖以外の何者でもなかった。自分は医者であり、そういう患者の相手をしてきたのも一度や二度ではないはずなのに、いざ自身に降りかかると、恐れるなと言う方が無理な話であった。

男は暗闇の恐怖から逃げるために、死を選ぼうと考えた。この無限に続く地獄を味わうならばと、憔悴しきった精神は容易く死に転んだのだ。

だが、男は思いとどまる事になる。

その精神が限界に近づいた時、男の中でとある素質が目覚めたのだ。

そう、魔法の才能だ。

男の目に、今まで見えた事の無い不思議な光のようなものが、ボンヤリと映り出したのだ。そう、それは空中を漂うマナと、それを吸い魔力に変えている人間の流れだった。

そうして、男はその才能を見出され、魔法の世界へと足を踏み入れる。そして後に、裏の世界では知らぬ者のいない闇医者へとなったのだ。

しかし、それも今や昔の話。

男は、数年前に闇医者から手を洗い、フラリフラリと自由気ままに各地を巡り歩く毎日だった。

今いるこの場所も、彼の魔法使いとしての隠れ家の一つ。日本のある地方都市の片隅にある、空きビルの一室だ。

いわゆる不法侵入というやつなのだが、当の本人は気にする様子

も無く居座っている。おまけに、人払いの結界まで施されており、魔法の心得の無い人間には見つかる事すらないので、まさに我が家という風に住んでいるのだった。

「……………」

猪口に注いだ酒がゆらりと波打つ。同時に老人の耳に、聞くに久しい誰か他人の足音が聞こえてくる。視力を失った老人は、それを補うかのように他の感覚が鋭くなった。

足跡の間隔からして小柄な女、しかしそれにしては些か踏み込む足の音が重い。どうやら、何か重いものを背負っているようだ。

老人はクンと一つ匂いを嗅ぐ。

嗅ぎなれた匂いがする。戦場で、手術室で、道端で。数えるのも馬鹿らしいほどに嗅いだ匂い。

そう、あれは濃厚な血の匂いだ。

どうやら、誰かが老人の下へ患者を連れてきたようだ。

この場所を知っていてかつ、小柄な女といえば一人しか思い当たらない。

「珍しいな……あのエヴァンジュリンが人助げか？」

老人は思わずそう独り言を呟く。あの吸血鬼の真祖が他人の命を助けようとする。それは、彼女を知る人間からすれば非常に驚くべき事体である。

よっぽどの事情があるか、それとも……。

「大事な人間でも出来たのかねえ……ククク」

老人の口から小さな笑いが零れる。どの道、これは大分珍しい事には違いない。

「治療してやるかは兎も角。連れてきた奴の顔ぐらいは拝んでおいてやるか」

老人は小さなテーブルに持っていた猪口を置き、体を入り口の扉へと向け座りなおす。

そして、その僅か数秒後。

静寂と暗闇は、盛大なノックの音と共に終わりを告げた。

S I D E エ ヲ ヲ

「おい市川！！患者だ！！急いで準備しろ！！」

ドアを乱暴にノックすると、私は返事も聞かずに乱暴にドアを開く。真つ暗の部屋の中には案の定、目的の人物である老人が座って

いた。

闇医者・市川

裏の世界では有名な、天才的な闇医者だ。通常の医術に加え、魔法を使用しての治療の腕前も正規の訓練を受けたヒーラーなど足元にも及ばぬ腕前の持ち主だ。

その代わり、あいつの要求する治療費は法外だ。相手の支払える限界ギリギリの額を要求してくる。だが、それは金銭が目的などではない。市川は昔、酒の席で私にこう言った事がある。

『俺が欲しいのは金なんかじゃない。生きたいっていう執念が見たいのさあ。どうだい？自分の命が助かるんだったら、一億や二億なんてはした金だと思わんかい？……ま、お前さんにそれを聞くのは酷な話だがね』

……思い出すのもムカつく話だ。

それはそうと、私は魔法で部屋の中に明かりを灯す。市川は盲目だから、照明なんて物は部屋の中に存在しない。

「なんだ……珍しいじゃないか。お前さんが人助けかい？」

明かりを灯すなり、市川が私に話しかけてくる。

「喧しい！一刻を争うんだ！せめて応急手当だけでもしろ！！」

私は自分でも珍しいと思う程の声で、市川に怒鳴り散らす。

「はいはい……。ま、応急手当位なら、顔馴染みのよしみでサービスとしてやるよ」

そう告げると市川は、椅子からおもむろに立ち上がると、私に隣の部屋に移るように促す。

隣室への扉を開いた私は、軽い驚きを覚えた。その部屋は、まさに手術室そのものであったからだ。放浪癖のある男だから、簡単な設備くらいだろうと思っていたが、まさかそんじょそこの病院顔負けの設備があるとは夢にも思っていなかった。

「ところで……」

手に消毒用のアルコールを拭きつけながら、市川が私に尋ねてくる。

「お前さんが治療してくれと言っているのは、その背負っている死体の事か？」

「馬鹿者！まだ息はある！」

私のその言葉を聞くと、市川は怪訝そうな顔をする。

「馬鹿な。その体からは魔力が一切感じられん。……気力の方は異常とも言える位の量だが。まさか魔力の無い人間が生きていられるはずが……」

「そのまさかだ。ほれ、心音だって弱ってるがまだある」

私は抱えている男を手術台の上へと乗せながら、市川にそう言っ

てやった。市川は言われるがままに、男の胸に耳を当て、手首から脈を計る。

「コイツは驚いた……。確かに死にかけちゃいるが生きている」

いつもの余裕のある奴の表情が、珍しく驚きの色へと染まる。

「ふふふ、コイツは面白い。本格的な診断は後回しで、まずは輸血だ。こいつの体は圧倒的に血液が足りていない」

そう言いながら市川は、まだ乾いていない部分の血を指先で触れようと、そのまま自分の口へと運ぶ。

「Bか。おい嬢ちゃん。あっちの冷温庫からB型の輸血用血液持ってきてくれないか？」

「代わりに、1パック貰うぞ」

「好きにしな」

私はしめしめと思いながらも、輸血パックを取りに行く。

……これですぐに死ぬという事はないだろう。さて、次はどうやって本格的な治療をさせるかが、問題だ。

慌てていたのを忘れていたが、たしか市川の奴、闇医者辞めたとか言ってた気がするな。……それにしてはこんなにちゃんとした設備を残している。一体何を考えているのだから。

それに治療費も問題だ。勘違いされやすいが、あいつは金さえ取

れれば誰からでも治療費を受け取るという事は無い。あいつは、治療を受ける本人からしか金を請求しようとし無い。それが、本人の生への執着を見るのに一番良いからだとか。……私が言うのも何だが、あいつは人とは何か違う別の世界で生きているような気がしてならない。人間の持つ道徳や規律から外れた、自身の中で定められた確固たる何かにしたがって生きているのだ。

……こればかりは、どうなるのか私にも分からない。あの市川という男の考え一つで、あの死にかけの男の未来は決まってしまう。

……チ。もう1パック余分にくすねてやれ。

S I D E エ ヴ ア O U T

鋼牙の全身に輸血用の管が通され、大量の血液が流れ込む。これですぐに死ぬという事は無くなった。

市川は、その様子を確認してから、改めて鋼牙の状態を診察しようと魔法を用いて体を調べた。そして、その状態を目にし、奇妙な緊張感を伴う冷や汗と共に、引きつったような笑みが零れる。

（全身のいたるところで筋断裂・筋幕断裂・筋損傷、肋骨が3本骨折、左大腿骨にヒビ、外因性の衝撃で内臓の一部に裂傷、そして右掌から肘に至るまでに深達性ⅠⅠ度の火傷、それに加えて先ほどの大量の出血……。くくく、常人ならばとつくの昔に死んでるわ）

市川は目の前の男……いや、目の前の人間に対して戦慄と畏怖、そして何より好奇心を刺激された。

これは、この男の類稀なる身体能力がそうさせているのか、はたまた魔力と気力の異常比の起こす賜物なのか。それとも……。

（この男の生への執着が、なんとしても生きねばならんという執念が、死を遠ざけているのか）

市川は常々こう思っている。人間の生き死にというものは天の采配によって決められているものだ。瀕死の人間が自分の所に運ばれ生き延びるのも、さっきまで元気だった人間が事故で行き成り死ぬのも、全てはその人間の持つ天運がそうさせているのだと。つまりそれはそれが寿命。病気だとか、怪我だとか、老いだとか、そんな物は関係ないのだ。天運こそが人の寿命。自分が手術するのも、そんな天運を持つ人間だからだ。決して金持ちだからだとか、金を払わせる当てがあるからじゃない。そして、その天運を引き込んでくるのが他ならない、人間の持つているの執着心そのものなのだ、と。

だから、市川は必ず患者自身の口から、手術費用の支払いについての話をする。金額はその患者が払える限界の金額を提示する。だが、意識の無い人間からはどうするのか？

「エヴァ。お前さん、この男から手術費用云々について何か聞いているかい？」

「聞いているはずも無い。私が独断でここに連れてきたんだからな」

その言葉を聞いて、市川はほんの少し顔を下に傾けて、静かに笑

う。

「ならば、意識の無い患者からの費用のいただき方は知っているかい？」

エヴァは黙って首を横に振った。

「意識の無い人間からは、自分は一切金を受け取った事は無い。だがその代わり……」

市川は静かな笑みを絶やさぬまま、手術台の脇を何かを探すように手を動かす。そしてやがて、目当ての物を見つけたようでそれを手に持ちながらゆっくりとエヴァの見える位置へとそれを持ってくる。

「その代わり、命は沢山いただいてきたがね」

その手に握られていたのは、不気味な黒光りの光沢を放つリボルバー。拳銃であった。

エヴァは市川の雰囲気気圧され、ごくりと唾を飲む。

「コイツの中に6発中5発弾丸を込めて、コイツの脳天にぶっ放す。何、これを引いて死ぬようなら、俺が手術をしたって同じ。死んじまうって話だ。そいつにゃ天運が無かったって事だ」

そう、生きる執念が見れぬのならば、直接その者の天運を見れば良い。ついてはそれがその者の生きる執念って事だ。それが市川の思想なのだ。あくまで自身はその生への中継地点のようなもの。その者を生かそうとする天の采配が、あくまで道具の一つとして自分

を使うだけなのだ、と。

狂気。そう、他人から見れば狂気にしか思えないこの思想こそが、医者としての市川の全てなのだ。

エヴァは何もいう事が出来ない。相手は人間。ただほんの少し魔法が使えるだけの、自分とは比べるべくも無い弱い存在。だが、内に秘めるのは吸血鬼など歯牙にもかけぬほどの狂気を宿した、一人の人間。

市川は、どこからか弾丸のジャラジャラと詰まったケースのような物を取り出し、リボルバーへと一つ一つ弾丸を込めていく。そして5発入った所でシリンダーを戻し、それを回転させシャッフルする。

「名前も知らない男よ。あんたの天運、俺に見せてくれないかい？」

狂気の笑みを口元に浮かべながら、市川はその拳銃をゆっくりと意識の無い鋼牙の脳天へと向ける。

緊張。逃げ場の無い緊張した空気が部屋中を満たす。エヴァは、戦いの生き死にではない、もっと別の、違う次元の命の取り合いを目の当たりにし、今まで感じた事の無い背筋が凍りつくような緊張感を味わっていた。

撃鉄を起こすカチリという音が静かに、そしてやけに大きく部屋に響く。

空気が。呼吸が。時間が。

その瞬間に全て停止してしまったかのように、音が消えた。

永遠のようだった。引き金を引くまでの一瞬が永遠のよう思えた。

カッーン

何かを叩くかのような高い音が部屋に響き渡った。

引き金は引かれ撃鉄は、まるで裁判官のハンマーのように振り下ろされた。

冴島 鋼牙は生きていた。

それが全ての結果であつた。

エヴァはヘナヘナと腰が抜けたかのようにその場にしゃがみ込んだ。

「さ、流石というか何と言うか……。運の強い男だな、全く」

緊張から開放され安心したのか、エヴァが言葉を発する。一方の市川は、自分の手にした拳銃を手に呆然としている様子だった。

「どうした市川？ そんなにこいつが生き残ったのが珍しかったのか？」

市川は指先でシリンダーを撫でながら、エヴァに顔を向ける。

「お前さん、弾の入っていないリボルバーの音を聞いた事あるかい？」

市川の問いに、エヴァは思い返してみる。思い返せば自分を襲ってくる人間に銃を使う人間は少なかったので、あまり良く知らない。エヴァは市川に対して首を横に振ることで返事を返した。

「弾の入っていない部分を撃鉄が叩いても、あんなカツンなんて音はせんよ……」

そう言って市川はエヴァに向かって拳銃をポイと放った。

「シリンダーの中をってみろ」

市川の言われるまま、投げ渡された拳銃のシリンダーを見て、エヴァは驚愕した。

「これは……！？く、空砲なんかじゃないじゃないか……！」

エヴァの目にしたのは、しっかりと撃鉄により尻を叩かれている弾丸であった。つまり市川は撃っていたのだ。弾丸のしっかりと込められた拳銃を。

「ミスファイヤ……不発弾だよ……。この弾丸は、そういう事が起きないように、俺自らの手で一つ一つ火薬を詰めている。本来ならば起こるはずの無い事だよ」

本来ならば、この弾丸であの男は頭を貫かれているはずだった……。

疑う余地も無い。

市川は思った。この男は間違い無く天が生かそうとしている。いや、殺してはなるまいと守ってすらいる。この男は決して殺してはいけない男なのだ。この男の命は、守りぬかなければいけない物なのだ。

市川は思った。俺はもしかして、この男の命を救うために、今まで生かされてきたのかもしれない。それが俺の天命なのだと。

「……エヴァ。手を消毒して、手術着を着な」

「へ？」

市川の中から狂気は消え、その目には患者の命を救う医者の目になっていた。

冴島 鋼牙

彼はまだ死ぬ事を許されない。

彼の使命はまだ終わっていないのだから。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

21： 目覚

ボンヤリとした視界。定まらぬ意識。そして、体に感じる疼くような痺れるような感覚。

冴島 鋼牙はとある大学病院の一室で目を覚ました。部屋は個室で、かつ不必要なほどに広く、病室とは思えぬような内装の部屋であった。

「……」

意識は取り戻した物の、未だ鋼牙の思考は焦点を定めず虚空を彷徨う。まるでエンジンの調子の悪いポンコツ車のように、脳が働かない。

すると、不意に鋼牙の目の前に、白い天井と自身の間に割り込むように、何か黒い影が顔を覗き込んだ。

「言っただとおりだろう？ 氣の流れが変わったから目を覚ますと」

少女だった。長く光沢のある金髪の少女が、胸に人形を抱えながら鋼牙を覗き込みそう言った。

『オーオー、アンナボロ雑巾ミティーナ体デ良ク生キタモンダゼ』

それに続き、彼女の胸に抱かれていた人形が少女に答えるようにそう言った。

エヴァンジェリンとチャチャゼロである。

何故、彼らがここに居るのか。その経緯を手短に話すところだ。

市川の元で行われた鋼牙の手術は無事に終了した。だがしかし、手術を行う事は出来ても、術後の処置や療養をするに市川の所は難がある。そこで、市川のツテで都心のとある大学病院に鋼牙を移したと言う訳なのだ。

エヴァンジェリンはというと、鋼牙の身内を装いながら、病室に自身の別荘である魔法球を持ち込み（時間設定は調節していない物）、隠れ家のようにこの病院に潜伏していた。その期間は鋼牙の目覚める今まで実に一週間に及ぶ。

一週間もの間意識がなかったのだから、鋼牙の頭が働かないのも無理はない。

だが、エヴァンジェリンという刺激を脳に受け、その意識は徐々にはつきりとし始める。

「……ああ、エヴァンジェリンか」

鋼牙はようやく、目の前に覗く少女の事を認識する。と、同時に自身の体にもようやくはつきりとした痛みという物を自覚し始める。吐き出される空気と共に、口から短い呻き声が漏れる。体を起こそうとしてみても思うように体が動こうとせず、痛みだけが体を流れる結果になった。

「無理に動こうとするな。お前、昨日まで40度近い熱でうなされてたんだぞ？ おまけに怪我は約全治一ヶ月。一週間近く寝てて体力も筋力も落ちている」

エヴァンジェリンは簡潔に、鋼牙に目が覚める前の状態を説明してやる。厳密に言えば、鋼牙の怪我は常人ならばリハビリを含めれば軽く1年以上は掛かる程の物だったのだが、その異常なほどの回復力でその日数を僅か一ヶ月に縮めていた。市川から引継ぎをした主治医はその回復力・抵抗力に戦慄し、一度じっくりと調べてみたい物だと洩らした程だ。

エヴァンジェリンの言葉に、鋼牙はようやく自身の今の姿を見るに至った。全身のいたるところに通された管。ギプスで固定された足。包帯でミイラのように全身巻かれた体。

成る程、これは酷い有様だ。

「我ながら、良く生きている……」

「全くだ。よくもまあこんな状態で、私に向かって剣を向けられたものだ」

呆れ半分の笑みを浮かべながらエヴァンジェリンが言う。事実、あの怪我では立っている所か意識を保っていられた事自体が驚きだ。それを支えていたのが、目の前に寝ている男の精神力一本による物なのだ考えると、エヴァンジェリンはその恐ろしいまでの精神力に畏怖さえ覚えた。

（日本語を話してる事から、おそらくコイツはこの日本の出だろうな……。全く、市川と言いこの男と言い、ジャパニーズの頭の中は分かん）

そんな事を考えながらも、エヴァンジェリンは鋼牙にここに入院

するまでの経緯を説明する。

「……とまあ、こんな事があった。ちなみに手術台はタダしておくが、その入院費は後で返しに來いだそうだ」

ちなみに保険証云々も市川が裏で色々と病院側に手を回したらしく必要も無かった。

「あと、お前の名前も分からなかったから、市川の奴が勝手に決めて受付したぞ」

鋼牙の頭の上にある名前のプレートには【赤木しげる】と書かれたものが着けられている。

「どうやら、昔の知り合いの名前らしいな。……ま、それはそうと」

エヴァンジェリンは、椅子に腰を下ろすとテーブルの上に置かれていた紅茶の入ったカップに手を伸ばす。

「目も覚ました事だし、いい加減お前の名前ぐらいは聞いておきたいものだな」

エヴァンジェリンはそう言いながら、紅茶を一口飲む。ベルガモットの香りの漂う、一級のオールグレイだ。

「そうだな……。思えば意識を失ったきりで自己紹介もしていなかったか」

鋼牙は軋む体を起こそうと、ベットの手すりに掴まる。が、すぐさまエヴァンジェリンが驚いたようにその体を押さえる。

「バ、バカ！！お前怪我人の癖に何起き上がるうとしてるんだ！？」

慌てるエヴァンジェリンとは逆に、当の鋼牙はと言うと。

「……こんな寝たままの状態で挨拶など失礼だろう。ましてや恩人相手にだ」

「ならばその恩人として言う」

まるで重石の代わりと言った風に、鋼牙の胸元にチャチャゼロを押し付けながら、額の血管をピクピクと浮き立たせながらエヴァンジェリンは言った。

「寝てろ！！」

それはそれは大層に大きな声で。その雰囲気気圧され、鋼牙は手すりに掛けた手を離す。

『ソーソー。御主人ノ言ウ事ニヤ逆ラワネーホーガイイゼ。禄ナ事ニナンネーカラ』

ケタケタと笑いながらチャチャゼロがベットの手すりに寄り掛かりつつ言う。

「……そうか、エヴァンジェリンは人形使いだったな、そう言えば」

「……エヴァで言い、長いからな。そいつはチャチャゼロ。私の小間使いみたいなものだ」

若干怒気が残っているものの、平静を装い答えるエヴァ。

『チャチャゼロダゼ。謀殺カヲ暗殺マデナンデモゴザレダゼ』

なにやら不穏な事を含めながら、チャチャゼロも挨拶をする。

「……こんな格好で申し訳ない。俺の名前は冴島 鋼牙。」

「鋼牙か。私の事は十分に知っているようだから自己紹介はいいな」

互いの自己紹介も済ませ、いよいよ話は本題へ入る。

「エヴァ。唐突で悪いんだが、色々と聞きたい事がある」

「構わん。私が知っている事だったら話してやろう」

「すまない。……今は一体西暦何年の何時なのだろうか？」

鋼牙の口から出た質問に、エヴァは拍子抜けする。真面目な顔をして聞かれた質問が、今日の日付なのだから無理もない。

「……何でそんな事を聞く。……まあいい、今年は1985年。日付は6月の12日だ」

1985年。その言葉を聞いて、鋼牙は必死で自分の時間転移前の記憶を辿る。

（たしか戦争中は1983年の9月の終わり……という事は大体1年と9ヶ月先の未来に飛ばされたという事か）

あまり遠くない未来に飛ばされた事で、鋼牙は少しだけ安堵する。

「それじゃあ戦争は……魔法世界で起こったあの戦争はどうなった？」

「ほう……お前あの戦争の経験者か。……ん？ならば何故その戦争の結果など知りたがる？あの戦場に居たのだろう？」

エヴァンジェリンの疑問ももつともだった。この質問をするには、まずはこちらの素性について詳しく語らねばならないだろう。鋼牙はそう思い、深く息を吸い気を落ち着かせる。

「……そうだな。まずは俺の事を色々と話さなければならぬか」

さて何処から話したものと鋼牙は考える。おそらくエヴァとは長い付き合いになりそうなので、ここは紅き翼の面々に説明した事も含め、大体のことを説明した方がいいだろう。そういう結果に辿り着き、鋼牙はおもむろに語り出す。

魔戒騎士の事。自分が魔法世界に飛ばされて紅き翼と行動していた事。そして、あの戦争の自身の最後の事。

一通り話し終えた時には、ティータイムの時間から夕暮れへと外の景色は変わりつつあった。鋼牙は淡々とありのままの事を語り、エヴァはそれに口を挟む事無く静かに耳を傾けた。

「……そして、あの日エヴァと出会ったと言う訳だ」

全てを語り終えた鋼牙は、自身の言葉で過去を思い返す。本当に色々な事があった。だがしかし、まだ終わっていないのだ。

「これらの事を踏まえて教えて欲しい。……あの戦争の後、魔法世界は一体どうなった？」

包帯に巻かれて表情は窺う事は出来ないが、鋼牙の纏う空気にはこの上ない真剣味を感じ取れた。

エヴァは思考する。記憶の中から一年ちよつと前の出来事を掘り起こし、そして目の前の男と照合する。

エヴァ自身は、元々魔法世界云々には然程興味はない。世界情勢の把握と、暇つぶしの種を探すために魔法世界の新聞を定期購読している程度だ。確かに、あの戦争。たしか大分烈戦争とか言う名前になった大戦争の詳細は新聞により知る事が出来た。だが、風の噂で聞いた話では、一般に出回っているような新聞では情報規制がなされており、情報の歪曲・捏造の行われている信憑性に欠ける記事らしい。

たしかその新聞によると、謎の狼の顔をした騎士により戦局が混乱。紅き翼により事体は収拾したものの、戦争の元凶とされるアリカ王女を死刑、そしてその狼の騎士を永久戦犯として指名手配するというもの。

そしてあの夜。エヴァが出合ったのは狼の顔をした黄金の騎士。

鋼牙の話からしても、おそらく両者は同一人物で間違いない。ならば、あの新聞で取り上げられた事を鋼牙に教えたらどうなるだろうか？

あの新聞の記事ではなく、この鋼牙の語った事が事実なのだとし

たら結果は明白だ。

「……戦争は無事に終わった。だが、戦争の責任を被せられアリカ王女は死刑。……そして、お前の話を信じるのだとすれば、お前も永久戦犯として指名手配されている」

エヴァのその言葉を聞き、鋼牙の目が一瞬大きく見開かれる。が、エヴァの予想とは異なり、鋼牙は深く深呼吸すると、その目を閉じる。そして、

「……元老院も必死だな」

そう一言呟いた。

「何だ。もつと怒り狂うのかと思っていたぞ」

「怒って解決するのなら、幾らでも怒ってやる。が、今は得策じゃない」

そう言いながら鋼牙は、自分の胸の上に乗っているチャチャゼロの喉を、猫をあやすかのように左手で撫でる。チャチャゼロはそれに、猫の物真似のようなことをしながらじゃれる。暇だったらしく構ってくれて嬉しいらしい。

「……アリカ王女は既に処刑されたのか？」

「いや、確か戦争終了の二年後だったな。おそらくあと数ヶ月以内には処刑されるだろう」

鋼牙はその言葉に安堵した。よくもまあ、タイミングの良い時に

戻ってこれたものだ。おそらく、紅き翼のメンバー達は、王女を助けるために何らかの行動を起こしているだろう。

そうでなくとも、自分の次にやるべき事はもう決まった。

「お前、もしかして王女を助けにでも行くつもりか？」

エヴァは飽きた様な顔をしながら鋼牙に言う。

「言っておくが、王女の処刑が行われるのは魔法世界のケルベラス渓谷。魔力の源であるマナの存在しない永久枯渴地区で特S級危険区域だ。いかに紅き翼が強い連中だとしても、あそこは生きていけない。特に魔力の強い者や、私のような魔力に頼って生きているような者にとっては絶対に近づいてはいけない場所だ……」

そこまで言ってエヴァはハッと気がつく。目の前で寝ている男の、特異的な体質の事を。

「……だからこそ俺が行かねばならないんだ」

そう、魔力が体内に存在しない。言い換えれば魔力無しでも問題なく生きていく事が出来る。それがこの男、冴島 鋼牙の異常な所。分かりやすく説明すると、酸素無しでも生きていける人間のようなものだ。

この世でそのような生き物は、ケルベラス渓谷で生きる化け物と、そしてこの冴島 鋼牙しか存在しない。

エヴァは鋼牙の目を見て悟った。この男は止めても無駄だ。おそらく、期限までに傷が完治しなくとも、その体を引きずってでも駆

けっけるだろう。

「……………はあ」

エヴァは溜息を吐いた。成る程、確かに暇つぶしにはなりそうだな。なりそうだが……………。

（暇を潰せる期間は長くはない、か……………）

エヴァはチラリと鋼牙方を見やる。チャチャゼロが、猫の真似をしながら鋼牙の左手に向かって猫パンチをしている。

エヴァは頭痛がした。

「……………言っておくが、私の暇つぶしに付き合ってもらう約束、忘れちゃいないだろうな？」

「当然だ。約束は守る。……………だが本格的に付き合うのは、処刑が阻止できるまで待つてもらえないか？」

その言葉を聞いて、エヴァはしめたと思った。エヴァとしては鋼牙のリハビリと称してデータ収集云々をして魔法世界に送ってやればそれで約束を果たしてしまうと思っていたのだが、鋼牙の言葉からすれば、どうやら今後も暇つぶしと称して色々と実験やら何やらが出来る。思いがけない僥倖だ。

（ふふふふふ。こんな珍しい奴を、そう簡単に手放すのも惜しい話だからな。当然待ってやるさ！）

その本格的というのが何時訪れるのかはわからないが。

こうして、鋼牙とエヴァ（ついでにチャチャゼロ）の奇妙なチームが誕生したのであった。

同時刻、同病院。鋼牙の病室の下の階。

一般的な一人部屋の病室に、二人の人間がいた。

「ガトウさん体の具合はどうですか？」

「ああ、もう殆ど治っている。あとはリハビリに専念するだけだ」

ガトウとタカミチである。

負傷したガトウはしばらく魔法世界で療養していたのだが、再び暗殺の手が伸びるかもしれないという懸念があったので、タカミチやアスナに少し遅れた形で旧世界へとやって来て、日本の病院へと入院したのであった。

「……それで、鋼牙の手がかりは見つかったのか？」

「……それが全然。魔法世界か旧世界のどちらかに戻って来たのは間違いないんですけど」

タカミチはシュンと肩を竦め落ち込む。

「こんな事ならば、少なくとも簡易契約ではなく、最低限仮契約にしておくべきだったな」

タカミチと鋼牙、そしてナギと鋼牙の行った契約は、契約方法が超簡略化されている代わりにアーティファクト以外の能力は全カットされているというもの。なので、カードを使つての念話や呼び出しなども出来ないのだった。

おまけに鋼牙は顔は知られていないとはいえ、魔法世界からは永久戦犯として指名手配されている身であり、軽々しく情報を洩らす事も出来ないの、大々的な搜索の依頼も出来ない状況だった。

「ま、生きてるのならば、いずれこちらの事情を知って、鋼牙の方

から接触してくれるかもしれん。慌てずに、今は待つ事も大切だ」

「そうですね……。生きているのが分かっているだけでも十分ですよね」

二人は知らない。この上の階にその鋼牙本人がいるという事実には

運命の悪戯という物はまっこと恐ろしい物である。

そして、数日後。結局二人は、鋼牙に気付かないまま病院を後にするのだった

そして舞台は数ヶ月先へ飛ぶ

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

21： 目覚（後書き）

エヴァは病院内では、血の繋がらない兄を心配して毎日お見舞いやってくる献身的な良い子、と勝手に周りから思われています。チャチャゼロを胸に抱いてるのも、普通の子供の演技のためです。

その様子を後書きで書こうと思ったのですが、面倒くさいのでやめました。

タカミチとガトウの件は完全に蛇足ですが、タカミチの不運さがよく分かると思ったので乗っけてみました。哀れタカミチ

さて、次回から王女奪還編だよ！

22 (前書き)

ちんちんくー歩

小雨の降る、とある肌寒い夕暮れ。

とある日の射さない薄暗い森の中に、二つの人影が歩いていた。
いや、正確には二人と一体が。

一人は白いコートを着た若い男。傘も差さずに仏頂面をして黙々と歩いている。もう一人は、長い金髪をした少女。そしてその傍を、傘を持った人形がフヨフヨと宙に浮かびながら少女の隣に着いて来ている。

「おい、お前風邪引くぞ?」

少女が少し飽きた様な声で、前を歩く男に話しかける。

「問題無い」

男は立ち止まる事も無く、その言葉の通り何も問題の無いように歩き続ける。少女の方も、そう帰ってくるのが半ば予想通りだったので、軽く溜息を吐くだけで深くは追求しない。

『御主人トノ相合傘ハ嫌ダツテヨ』

少女の隣の人形がケケケと笑いながら、茶化すように言う。少女は一瞬ムツとした顔をするが、言い返すと変な勘ぐりをされそうなので、咳払い一つだけする。

そうしてしばらく歩いて行くと、やがて視界が開け、小さな湖が姿を現す。夕暮れ、しかも小雨が降っているという事もあり、人影は無い。ただ雨が、静かに湖面を叩く音だけが聞こえてくる。

湖の畔。そのある場所で、二人と一体は不意に足を止める。

男の足元には、丈の短い草の上に転がる一本の剣があった。男は徐に手を伸ばし、剣を手取る。

カチャリと金属音が小さく聞こえ、剣は男の手に収まる。それこそ、剣と鞘のように。それが至極当然であるように。

かなりの間そこに放置されていたようで、剣のあった場所はその形に草が萎れ枯れかかっている。

「どうだ？ちゃんと振れるか？」

少女が男に尋ねる。その言葉を聞いた男は、鞘に納まっていた剣を抜く。シャリンと金属の擦れ合う音がし、白日に晒された刀身に男の顔が映る。曇りの無い、それが数多の命を刈り取ってきた物だとは思えぬほど澄んだ剣だった。

「右手が多少突っ張る感じがするが……支障は無い」

そう言いながら男は、右手で持った剣を伸ばした左手をなぞるように地に対し水平に剣を構える。男にとっては幾万、幾億と繰り返された動作。

そして一閃。男の伸ばされた左手が剣の柄を握ってから袈裟懸けに振り下ろすまでの、まさに電光石火の一振り。

澱みの無い動作で振られた剣は、風を斬り、降りしきる雨粒の一つ一つを弾き、その剣気は剣の軌跡に雨粒が残るのを許さず、そこだけまるで雨が途切れたかのように剣跡が残る。

『コレデ本調子ジャーネーッテンダカラナ。ドンダケッテ話ダゼ』

人形が少女の肩に座りながら、やれやれと肩を竦めそう呟く。無論、傘を持ちながらだ。

「さてな……。おい、用が済んだならとっとと移動するぞ。私はどうでもいいが、お前の方は時間が無いんだからな」

その少女の言葉に、男は剣を鞘に収めながらコクリと頷く。

「一番近くのゲートまでは転移魔法で行くとしてだ。ゲートって奴は基本的に開くも閉じるもランダムだ。今開いていたとしても、1分後にも開いてるといふ保障は無い」

旧世界と魔法世界を結ぶゲート。それは少女が言ったように非常に不安定な周期で開閉されるものであり、長くて1ヶ月、短くて1日で閉じてしまうのだ。

「ま、少なくとも情報があつた昨日までは確実に開いていたはずだがな」

『コレ逃ストヨー。マズ処刑ノ日ニヤ間ニ合ワネーノハ確実ダゼ』

少女と人形の言葉に、男は俯くように視線を落とす。

「……急ぐっ」

そして、そう一言呟くと少女の方を見やる。少女は深い溜息を吐きながら男を見返す。数ヶ月の短い付き合いながらも、少女は男の事を大分理解していた。この男は平時であってもお世辞にも饒舌とは言えないが、今のような状況。つまりシリアスな雰囲気になるとその口数が更に減る。しかも、だからといって焦ったりする事も無く冷静な思考を失う事は無い。自分一人ではゲートまでたどり着けない事を理解しており、その手段を持つ少女が行動を起こすのを静かに待つ。

「はいはい……」

少女は投げ遣りな風に返事をする、呪文の詠唱を開始する。幾つかの術式が紡がれ、いつの間にか少女の手に握られていた杖のような棒が地面を突く。すると、そこを中心として光の線が広がって行き、幾何学模様の魔方陣が描き出された。

「お前が触れると魔力が弱まるから、私たちが転移した後で付いて来い」

少女の言葉に、男は黙って頷く。そんな男に少女の肩に座る人形は『シリアスな柄ジャネーンドケドナー』と、ピリピリとしたこの雰囲気になんか食傷気味なのであった。

そして、少女と人形と男は旧世界から姿を消す。

魔法世界に二人の最強が今、足を踏み入れたのだった。

魔法世界は大陸全体が剣呑な雰囲気で包まれていた。それも無理は無い。何しろ、数日後にとある人物の処刑が執り行われるのだから。普通の罪人の処刑だったのならば、話題に上るようなことも無い。しかし此度の処刑で断罪されるのは、残念ながら普通の罪人などではない。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

今は無きウエスペルタイア王国女王にして大分烈戦争の黒幕とされた人物である。戦争の黒幕という認識はメガロメセンブリア元老院により流布された情報であり、一般市民には広く認知されているが、戦争の根幹に関わった者達から言わせて見れば濡れ衣もいとこの捏造された情報である。

元老院側としては、決戦の場となった「墓守り人の宮殿」の崩壊と共に姿を消した真の首謀者の代わりとしての苦肉の策であった。永きに渡る戦乱の終結は確かに国民達には一時の安心を与えられるかもしれない。だがしかし、その安心が定着してしまえば、その時になり戦争の責任の行き場が掘り起こされる事となり、世界は再び不安と疑心暗鬼の場と化すのは明白であった。そう、根の部分では未だに終結を見せていないこの戦争を、表向きに無事終結させるためには、相応の人柱が必要だったのである。人心が求めているのは怒りの矛先であり責任の押し付ける場所だ。アリカ王女が無抵抗に処刑へと向かうのも、上に立っていた者の立場として、この事を重々に理解していたからでもあるのだろう。

だが、世の中にはその事を理解した上で、それでもまだ納得しない連中が存在するのである。

それはどの国、どの組織の中にも少なからず存在していたが、その中でももっともアクティブで尚且つ力を持っていたのが何を隠そう、あの「紅き翼」なのだから。

アリカ処刑当日。

魔法世界では、ここ1週間ばかり止む事無く雨が降り続けていた。

その雨雲が天を覆いつくす空の上。一隻の戦艦がエンジンを唸らせながら飛んでいた。

目的は一つ。一人の人間をある場所に送り届ける。たったそれだけの事。それだけのために戦艦を一隻出撃させたのだから、その人間というのが只者で無い事は言うまでも無い。

そう、アリカ女王をケルベラス渓谷まで輸送するための戦艦なのだ。

この輸送の光景を含め、アリカ女王の処刑はリアルタイムで魔法世界全域へと中継されている。戦争の黒幕の公開処刑という面もあるのだが、それとは別にもしもアリカ女王を奪還しようとするような者達が現れた時、この映像がそのまま証拠へと変わると言う理由もある。……もしも見す見す奪還などされた日には、全国レベルの晒し者になってしまうので、護衛にも力を入れるもの当然というものでだろう。

艦はゴウンゴウンと低い唸り声のようなエンジン音を響かせながら進んで行く。

そして、やがて目的の場所へと辿りつく。

魔力の枯渇した死の大地。悪鬼羅刹、この世でもっとも恐ろしい怪物たちの闊歩する現世の地獄。そう、まるで悪魔が大きく口を開けて獲物を待ち構えるかのように漆黒の闇が谷底を覆う、自然の処刑場。

ケルベラス溪谷。

あらゆる思惑、そして運命の交錯する、そこはまさしくこの世界の岐路の一つなのだった。

t o b e c o n t i n u e d

22（後書き）

ようやく現代編が見えてきました。

頭がなかなかネギまに切り替わらなくて全然筆が進まないです。今頭の中は無双オロチ2の影響で三国無双と恋姫で一杯です。

幾ら振り払っても恋姫×牙狼の二次創作ネタしか浮かんでこなくてマジしんどい。

あれだよね、牙狼って普通に天の御使いっばいよね。

それにしても今回は？ぎ回みたいで内容が薄いですね。エヴァとの生活とかも入れようかと色々書いたけども、結局なんかダレそうなのでカットしました。横道にそれないでさっさと本題を進めなくちゃ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2110m/>

魔法世界にこんにちわ

2011年11月21日08時25分発行